
魔法使いと執行者

テイク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いと執行者

【Nコード】

N0820M

【作者名】

テイク

【あらすじ】

世界、つまり神に選択を迫られた執行者の少年ケイはあらゆる可能性の力を与えられ異世界のユニヴァースへと送られる。そこで魔法使いの少女ネルに出会う。それから始まるケイとネルの物語。

突然ですがリアルが一段落したら新しく書き直したいと思います。私の稚拙な文章とストーリーの為に、収集がつかなくなり、ストーリーが行き詰まってしまったからです。

その為新しく書き直したいと思っています。幾つかの設定とストーリー

リーが変更されるだけで、基本的な部分は変わりません。
いただいたキャラクター案などもそのまま使わせていただきます。
皆様にはご迷惑をおかけしますが、より良い作品を提供したいので、
どうかご理解のほどをよろしくお願いいたします。

プロローグ（前書き）

異世界トリップ最強ものだけど敵も最強。

作者が考えた能力のすべてを備えた主人公が頑張る話です。

苦手な人は読者専用特殊能力「戻る」を使って戻って下さい。

プロローグ

漆黒の闇の中を漆黒が駆け抜ける。音もなく目的の場所へ向かって漆黒は走っていた。

目的の場所に着いたのか漆黒が目の前にある扉に手をかけ開け放つ。その瞬間漆黒は世界から消え失せた。

・
・
・

そこは真っ白な空間が広がっていた。どこまでも広がる広大な空間が。そこに黒のロングコートを纏った黒髪の少年が横たわっていた。

「うう、ここは？」

少年が目を開ける。少年——瞳は右目が赤く十字架が刻まれている。左目は漆黒だ——は起き上がり周りを見渡す。

「何があったんだ。俺はさっきまでそこにいたはずだ。なのに何でこんなところにいる」

何かの魔術が使われたわけではない。いきなりの移動だ。どんなに卓越した魔術師にもそんな芸当は不可能。なら、なぜと少年は考える。一つだけ可能性があった。

「……魔法使いか？」

魔法使いは魔術師と違い有を無に無を有に変え、時間を飛び越え、

次元を越え、世界の理をねじ曲げ、死者すら蘇らせる。というより魔法使いの魔法を誰にでも使えるように劣化コピーしたのが魔術だ。魔術師には無理でもおそらく魔法使いにならこんな芸当も出来るかもしれない。

「だが、あの場所に魔法使いがいるわけがない」

魔法使いは世界に数人しかない。元いた場所には魔術師はいたが魔法使いはいなかった。

「何なんだ」

そう、少年が呟いた時少年の頭の中に声が響いた。

『ここは中間の間。または1と0の狭間、刹那の空間』

「誰だ！！！」

少年の頭の中に直接語りかけてくる声。その相手の姿はどこにも見えない。

「どこにいる姿を現せ！！」

『君は今から選択を迫られる』

「何を言っている」

少年の声にまったくこたえず声は語り続ける。それはまったく意味のわからない話だった。これが魔法でないなら一体なんなのか。少年の疑問は募っていく。答えになりそうな声も何も答えない。

『君には力を与えた』

「なに？」

既に諦めこの声の話が終わるのを待つことにした少年は疑問の声を上げる。自分の内側に目を向けるとはじめて気がついた。膨大な力に、見たこともない力に、ありえない力に。

「な、何だこれは!!」

『その力はお前自身が持っていた可能性の力。あらゆる世界に散らばった君の欠片』

「なん、だと」

声は言った。その力は別の世界の少年が持っていた力だと。それがひとつになった。元から自分が持っていた力なのだから違和感などなく受け入れていたということ。多次元にいる自身の欠片をひとつに統合したということ。

『君は選択を迫られる。それは君に意思で決めよ』

「こんな力を与えて俺に何をさせようってんだ」

少年は理解した。こんなことが出来るのは世界でもただ一人。いや、もはや人ではない。そう、出来るのは神。世界そのもの。つまり、少年は世界に望まれて何かを選択しなければいけないということ。

『さあ、選択をしろ』

声がそういった瞬間また別の声が響いた。

『……………来て』

今にも消えてしまいそうなほど小さい少女の声。

「声……」

『……助けて』

助けを求めていた。

『誰でもいいから……』

「……………」

『……………お願い』

少年は考えるまでもなかった。

「フッ、考えるまでもないな」

少年の答えは決まっていた。

「俺が行ってやる」

『お前の選択はそれか……ならば行け』

「うわあああああああ……!!」

少女の声とは違う世界の声を聞きながら俺は落ちて行っった。

世界はたくさんある。

世界は些細なことで分岐する。

たった一つの選択で世界は変わる。

全ての世界を認識することは不可能。

だけど自身の世界を知覚することも不可能。

広大な世界の中で自分は他人を認識し認識される。

世界はそういった瞬間に始まる。

たった一つの選択から始まる……………。

第一話 ノステラシス魔法学園

空に巨大な浮遊大陸がある。その中央の高台に巨大な石造りの城がありそれを囲むように九つの塔が建っている。それは荘厳な雰囲気放っていた。

ここはユーニヴァスという世界にあるミスヴェルトという国に存在する巨大な浮遊大陸につくられたノステラシス魔法学園。九つの塔を有する九角形の城壁に囲まれた城は天に届かんといわんばかりに巨大。それぞれの塔と中央の城は回廊で繋がっている。

そこの中庭に生徒と思われる一団が集まっている。数は2300人程。黒のローブを纏い杖を持った少年少女たちと先生と思われる女性だ。

「さて、一年生のみんな入学おめでとう。私の名前はエリス・マネイア。これから一年間無の魔法の授業を担当することになっています」

赤い髪のエリスは自己紹介し魔法について説明をしていく。魔法は呪文を唱え魔力を消費することにより発動する。魔法には九つの属性がある。火、水、風、土、雷、氷、光、闇、無の九つ。だが、それら全てを一人の人間が使うことは出来ない。指紋や声、顔、髪型などが一人一人違うように魔力の質、量は異なり使える属性も異なってくる。例外として無属性の魔法のみ誰でも使うことが出来る。

それぞれ属性には特徴があり火は全属性の中で一番の侵食力を持つ。極めればありとあらゆるものを消し炭にすることが可能。水はどの属性よりもやわらかく様々な形をとることができ応用が利く。

風全ての属性の中でもっとも鋭利で戦闘的。土は全ての属性の中で最高の硬度を誇るゴーレムなどを生み出すことも可能。極めたものは人口の生命体すら作ることが出来る。雷は貫通力が強い。最高の硬度を誇る土の属性すら貫通することが可能。氷は生命体の自由を奪うことに適している。極めていけば相反する火すらも凍りつかせ時すらも凍らせることが出来る。光は属性の中で唯一癒しの力をもつ。使い手が少ない。また、癒しだけでなく攻撃をすることも出来る。闇は全属性の中で一番の破壊能力を持つ。全てを無に帰す力。光の属性よりももっと使い手は少ない。大抵の使い手は悪の道に走ってしまっているのが現状だ。無は誰にでも使うことが出来る。開錠やロック、召喚、飛行など様々な分野で使用可能。

「さて、説明はこれ位にして私はあなたたちがどの程度のレベルなのか知りませんが――」

エリスが生徒達を見渡すと言う。

「――まずは参入儀式イニシエーションを行います」

エリスの言葉に生徒達がざわめく。魔法使いとはいえまだ子供。それにそのレベルは生徒によってまちまちなのだ当然レベルの高い生徒は何も心配はしていない。だがレベルの低い生徒はおどおどしている。

「安心してください。そんな難しいことじゃないですから。簡単です。じゃあ、会場に行こうか」

エリスが手に持った杖で地面を突く。すると巨大な魔法陣が出現し光を放つ。そして光と共にエリスと生徒達は消えた。

「さくって今年は何人残るかな」

消えた生徒達がいた場所をオペラグラスで見ながら妙齡の女性呟く。彼女はライラ・ネリエール・レジストリ。この魔法学園の学園長。こんな姿だが実際は数百歳の老婆。

「例年通りなら七割残れば良い方です学園長」

黒髪で細身の黒服の男が言う。彼はサイ・カミエナ。ライラの秘書である。柔和な顔だが隙のない雰囲気纏っている。

「さてね」

「あの学園長。まさかとは思いますが――」

「なんだ？」

「何かしましたか？」

「フツ」

含みのある笑いを漏らすライラ。それで何かを確信するサイ。

「何かしましたね！！ 確実に」

「何を言っている私は何もしてないぞ」

ライラはそう言っているが顔は完全に緩みきり笑っている。今は声こそ上げていないがサイがいなければ確実に笑い転げているであろう顔だ。だが、まあ、サイがいなければ笑うこともないのだが。

「さっきの笑いと今の表情が全てを物語っています」

「ふむ、そうか、気をつけるとしよう」

「アンタ、反省する気ないな」
「ない!!」

きっぱりとライラは言い放った。溜息をつき目頭を押さえるサイ。ライラの無茶に付き合わされる身にもなっただろうと思うのだが、そう思った前任者が全て押し付けて失踪してしまったので自分もそうすることはさすがに出来ないので溜息をつくしかないサイ。

「はあ、それで今度は何をしたんです。トラップですか？」

「いや、珍しい動物を放ってみた」

「……………まさか、ウェネーフィクスではないでしょうね」

「ああ、そうだ」

「……………」

自分の予想が当たったことにくぐりと肩をおとすサイ。そしてライラにつかみかからん勢いで迫る。

「アンタは生徒を殺す気ですか!!」

「大丈夫だろ」

「大丈夫じゃないです!! 第一級接触禁止生物じゃないですか!

! 生徒確実に死にますよ!! ただでさえまだあそこにはアナタの仕掛けたトラップがあるんですよ!! エリス先生だけじゃ対応できません!!」

「大丈夫だってあそこで同時に召喚もやるんだし」

大丈夫大丈夫と手を振りながら言うライラ。しかし、サイの顔は曇っていく。

「その途中で教われでもしたらどうするんです!!」

「そのときはそれまでだったということだ。諦めろ!」

「アンタは教育者やめろ!!」

「あゝうるさいうるさいうるさゝい!!」

耳を塞いで子供のように騒ぐライラ。サイは拳を握りしめプルプルと震えている。

「コホン、まあ、そうだな私が直に行って説明して、もしもの時は対処しよう」

サイの様子を見て言ったライラ。だが、あくまでライラが手を出すのはもしもの時である。つまり何かあるまでは手を出さないと言うこと。何かある前に退治しようとは決して言わないライラであった。

「まあ、それならいいでしょう」

サイはそれで納得したようだ。彼の感覚はどこかズレている。まあ、ライラのような人間のそばにいれば当然の結果なのかもしれない。

「じゃあ、行くとしよう」

ライラが腕を振るう。魔法陣が現れライラとサイは部屋から消えた。

エリスと生徒達は森の中に移動していた。木々の間から古代の遺跡の跡が見える。

「さて、みんな来てるね〜！」

確認して頷くエリス。

「よし、じゃあ、説明を——」

その時、魔法陣が出現しライラとサイが現れた。

「学園長！！」

「やあ、エリス先生」

「どうしたんですか。今度は何をやったんですか！」

「私が来るときはそんな理由だと思ってるのか」

「違うんですか？」

「うぐっ！！」

落ち込むライラ。ライラの周りだけ雰囲気沈んでいる。サイはライラの自業自得のため何も言わなかった。

「それで何をしたんですか？」

エリスが聞くがライラは落ち込んでいて使い物にならない。代わりにサイが答える。

「この学園長^{バカ}がここにウェネーフィクスを放してしまったんです」
「なんだそんな——ってええ！？」

エリスは目を見開いて驚いた。何たって第一級接触禁止生物がこれから生徒を向かわせようとした場所にいと聞かされたら誰でも驚く。

「まあ、そういうことだ。まあ、心配はない」

立ち直ったライラが言う。そんな気楽に言われたくはないエリスであった。

「何か大変な事になってきましたわね」

話をしているライラ達を遠目に見ながら金髪金眼の少女が言う。彼女はリリィ・レムス・ツタニティア。俗に言う貴族という存在だ。この国では貴族と言うのは珍しくない。もっとも実力主義のミスヴェルトではあまり関係はない。だが、貴族と平民との線引きはきちんとなされている。この国の矛盾だ。

「それにしてもウェネーフィクスってどんな奴なのかしら」

右手を形の良い顎に当てながら言う。

「……第一級接触禁止生物」

隣にいたくすんだ灰色の髪でメガネをかけた小柄な少女が言った。

「あなた確か――」

「……ネル」

「そう、ネルね、アナタ何か知ってるの？」

「……何もただ本で読んだだけ」

「そう」

リリィは少し残念に思う。もしもの時は情報が生存率を上げる。少しでも情報はほしかった。だが、知らないなら仕方ないとすぐに諦めて思考を切り替えネルのことを聞いてみる。

「あなた貴族？」

ネルは黙って首を横に振る。

「そう、私はリリイ・レムス・ツタニティアよ、よろしく」
「……よろしく」

挨拶もそこそこにリリイはネルにあれこれ聞くのだがネルはあまりしゃべらなかった。わかったことは少ないが少なくともこの国の出身ではないらしいということだけ。得意な魔法や好きなものすらわからなかった。唯一読書がすきということはわかった。

「……………説明」

「え？」

考え込んでいたリリイにネルが言った。ライラがちょうど説明を始めるところだった。

第一話 ノステラシス魔法学園（後書き）

感想お待ちしています。批評はライトをお願いします。

第二話 参入儀式開始

「さて、諸君待たせて悪かったな」

学園長のライラが言う。

「私は学園長のライラ・ネリエール・レジストリ。さて、なら参入^{イニシェ}儀式^{イニション}の説明を始めよう。エリス先生」
「はい」

ライラの後ろに控えていたエリスが前に出る。

「とりあえず参入儀式^{イニシェイション}について説明します。これからあなた達はこの森で三日間過ごしてもらいます」
『ええ！？』

生徒達から驚きの声があがる。

『大丈夫なのかよ！』

『食料は？』

『どうするんだ！？』

「黙れ！」

ライラが一喝して生徒達を黙らす。やれやれとサイは目頭を押さえる。

「ぐだぐだ騒ぐな鬱陶しい！。これは貴様らを試す試練だ。心しろ！ これくらいのことには合格出来ないようなら荷物を纏めて田舎に帰れ！！」

『横暴だ!!』

『それでも教師か!!』

『聞いてないぞ!!』

『パパに言いつけてやる!!』

『黙れ!!』

騒いでいた生徒が静かになる。

「ぐちぐちぐちぐち!! うざいんだよ!!」

この人は本当に教師なのだろうかという発言をするライラ。

「本気で一人前の魔法使いになりたいのならこれくらいクリアして見せろ!!」

とライラは言うが。

「あなたウエネーフィクスを森に放ったの忘れてませんか」
「そ、そうだったな」

ライラはサイの一言で思い出した。

「……………さうて、よく聞け。今、森にはなぜか! なぜか!!
なぜか!!!」

やけになぜかを強調するライラ。

「手違いでこの森に第一級接触禁止生物のウエネーフィクスが入り込んでしまった」

自分の責任なのにあくまで事故ということにしたいライラ。

ざわ……ざわ……。

「だが、安心しろ。危険は……まあ、ないから」

ゼロとは言わないライラ。

「まったく信用できませんわね」

リリイはライラの言葉を聞きながら言った。

「……………別に問題はない」

「そう言っても危険な生物よ。アナタ大丈夫なの？」

「……………別に」

「そう」

自信の表れなのかそれとも本当に気にしていないのかわからない。
二人が会話をしている間もライラの説明は続く。

「さて、私からの説明は以上だ。とにかく何かあったら私が行くから安心しろ」

それは何かあるまでライラは何もしないということだ。

「じゃあ、エリス先生改めて参入儀式イニシェーションの説明を」

「はい、えーっとさっきも言ったとおりあなた達にはこれからここで三日間過ごしていただきます。持つて行ける物は杖のみ、必要な物は森で採るか自分で作って下さい。それと森では何をしていても良いですが使い魔の召喚だけは行って下さい。やり方はわかつてると思

います。ウェネーフィクスに会ったら逃げることをオススメします。
説明は以上です」

諦めたのか覚悟を決めたのか生徒達は文句も言わずに杖を取り出す。

「それではイニシェーション参入儀式を開始します」

生徒達は一斉に森に入って行った。

「行ったな。サイ気を抜くなよ」

「そっくりそのままあなたに返しますよライラ学園長」

ライラとサイは森の中を監視しながらウェネーフィクスの動きを探っていた。今のところ大きな動きはないがこれからはわからない。

「大丈夫でしょうか？」

今更ながら心配するエリス。毎年の恒例ながら危険な場所に生徒を送り出すのだから心配しないわけではない。

「まあ、今回は質が良さそうだったしな。それに危険でなかったら意味がない」

イニシェーション
参入儀式の意味は危険を体験し対処させること。魔法の力は危機を体験する事で磨かれる。特に命の危険は最も魔法の力を引き出す。魔法の力とは生きようとする意志の力だ。

魔法には才能は関係ない。確かに魔力量や操作能力などの一部には才能は必要だ。だが、魔力量も僅かだが上げることがはできるし操作能力も訓練すればまた別の境地へと至るだろう。重要なのは考えること、諦めずに理想へと突き進むことだ。

「今は信じて待つことだな」
「そうですね」

ライラは各生徒を魔法でモニターしながら呟く。

「さあ、考えろ、実行しろ、感じろ。貴様等が生き残るにはそれしかないぞ」

イニシエーション
まだまだ参入儀式は始まったばかりだ。

第三話 参入儀式一日目 前編

ネルは身の丈程の杖をつきながら川に沿ってを歩いていた。ここならすぐに水分補給が出来るし水を飲みに来た動物を仕留めることも出来る。更に言えばウェネーフィクスは水の中には入って来れない。ウェネーフィクスとは地中を泳ぐ生物なのだ。水を苦手とする。それにネルの使う魔法にとっても都合が良い。

「……………」

しばらく歩いているとネルの前に滝が立ちはだかった。それに結界が張られていた。これから先は範囲外ということだ。ネルは辺りを見渡す。滝の横に石造りの遺跡を発見した。

「……………ちようどいい」

ネルはその遺跡を拠点とする事にし、中に入る。どうやら昔の砦だったようだ。頑丈な造りをしている。

だが、かなりの部屋が崩落しており使用できるのは少ない。ネルは砦のエントランスを拠点とするようだった。

「……………守りの結界、我に仇なす者を阻む壁となれ」

ネルが身の丈程の杖を振るう。砦を結界が包み込む。守りの結界、簡単に言えば設置型のバリア。術者の技量により強度は異なる。

その後ネルは結界の外に出る。必要な薪や食料を集めに行くためだ。まず、ネルは川に行く。水をくむのだ。

「……………凍」

水の一部が凍り容器の形になる。氷属性の魔法だ。

「……………固定」

固定の魔法は無属性の魔法。物体を空間から切り離し固定しそのままの状態を維持させる魔法。これでこの容器は溶けはしない。

ガサッ!!

「!？」

物音にネルが杖を構える。茂みから出てきたのはウサギ。ネルは氷のナイフを作り出し投擲した。ナイフはウサギに突き刺さる。

「……………」

ネルはウサギを回収する。これで食料は確保した。ネルの顔には嫌悪感はない、明らかに慣れている。ネルは結界を張った砦へと戻る。辺りには気配はない。どうやらうまく森中に生徒は散らばったようだ。

「ほう……………」

ライラが声を上げる。

「どうしました？」

「いや、中々いい奴がいるな」

「ああ、ネルさんですか」

サイが魔法で作った画面を見ながら言った。

「魔法の腕も有りそうだしサバイバル経験もありそうだ。他の奴らはまだあたふたしてる奴らもいるというのにもう拠点と食料と水を確保したか」

「確かに優秀ですね」

「だが、他の奴らもちらほらいるな」

画面には全ての生徒が映し出されている。まだ、脱落者がいないがまだまだ序盤だ。追い詰められればどうなるかは予測不能だ。

「今年はよさそうですね」

「さて、それは終わって見るまでわからないぞ」

「まあ、それもそうですねウェーネーフィクスも動き始めた頃ですし」

「さあ、どうなるかな」

「さてと、私もそろそろ拠点を作るとしましょう」

リリイが森の中で呟き目をつむり意識を集中させる。

「偉大なる大地の精霊よ、その力を持って我が示す形と成せ」

呪文が完成した瞬間地面の土があるものを形作っていく。それは小さな家だった。

「固定、そして、守りの結界、我に仇なすものを阻む壁となれ」

出来た家を魔法で固定し結界を張ったリリィ。そして地面に杖で文字を書いていくリリィ。

「神より与えられし秘法より生まれし出でよ、ゴーレム!!」

文字を書いた地面から人型の土人形ゴーレムが現れた。数は10体程。鎧姿の騎士のようだ。

「散れ!」

ゴーレム達が森の中に散っていく。

「これで敵が来ても大丈夫でしょ——ん?」

ゴーレムの一体が何かを追ってリリィの方に来ていた。

「何?」

「うわああああ!!」

悲鳴と共に青い髪 of 気の弱そうな少年が出てきた。

「カイル!?!」

「あ、リリィ!! お願いこいつ止めて〜!!」

「はあ、止まれ」

ゴーレムが少年を追うのを止めて戻って行った。少年は地面に手をついた。息は荒い。

「はあ、はあ、はあ、た、助かった」

「それで何をやってるのかイル・ディ・サクレリス？」

リリイは地面に手をついているへたれ少年——カイルに言った。

「森を歩いてた行きなりゴーレムに追われて……」

「あなた何で横に逃げないの。あれにはここに来る者を追うように命令をプログラムしたんだから別の方向に逃げれば追わないのに」

「そ、そんなの知らないよ!!」

「はあ」

リリイは深い溜め息をついた。カイルはそんなリリイの様子を不思議そうに見ている。

「本当にバカね。ゴーレムの命令は胴体に刻むのが常識でしょ」

「あ……………」

「まったく、で、あなたこれからどうするの？」

「……………どうしよう？」

「考えてないのね」

目頭を押さえるリリイ。カイルとは幼馴染のような関係なのだがいつもいつもこんな感じで困らされている。

「はあ、いいわ、あなた水の魔法使えたわね」

「まあね」

「というかそれだけが取り柄でしょ。アナタが魔法で水を出すならここにおいてあげるけど」

「やる!!」

即答したカイル。

「じゃあ、アンタが寝るのはそこね」

リリイが言えの外の地面を指差す。

「ええー!! お願いだよ僕も中に入れてよ!!」

「……………」

カイルはへたれである。役に立つことなどあまりない。

「はあ、昔はもうちょっといいところがあると思ったのに」

「何か言った？」

「何にも、わかったわよ。中はいりなさい。ただし、変なことしたら殺すから」

「そんな勇気あるわけないよ」

その一言に心底呆れながらカイルを家の中に招き入れるリリイであつた。

ネルは先ほど捕まえたウサギを捌き終えて薪に火をつけていた。

煙は魔法で外に出ないようにしている。

イニシェーション
参入儀式が始まって早5時間。残り67時間。今まだ大きな動きは起きていない。

「……………」

ネルはウサギが焼きあがったのを確認してから食べ始めた。今の

ところは順調。だが、この先何があるかわからない。

「……………罫は張った。何かあればわかる」

自分に言い聞かせるようにネルは言っ**て**壁にもたれかかる。参入儀式イニシェーションと言えど危険な魔獣と戦うわけではない。拠点を定め食料さえ確保できればそれ程難しいものではない。

「……………なら、何かある」

これだけなら全体の三割を減らすことはないだろう。何かあるのだ難しい何かが。だが、ネルにはそれがわからない。

「……………なら考えても仕方ない」

ネルは思考を切り替えながら今後の事を考える。使い魔の召喚は三日目で構わない。早めに召喚した方が有利かもしれないが使い魔の分の食料を調達するのは楽ではないだろうし危険が増える。

「……………雨」

雨音が響いきた。雨が降っているようだ。ネルは1人雨音を聞きながら何を思うのだろうか。

「サイ、何時間経った？」

イニシェーション「参入儀式開始からざっと10時間ってところです」

サイが時計を見ながら言った。既に参入儀式イニシェーションが始まって10時間

も経っていたのだ。時間というのは案外早い。

「ウェネーフィクスは？」

「雨のため現在は活動を休止中です」

「脱落者は？」

「375名が現在脱落しています」

「そうか」

ライラ自身や他の先生が仕掛けた罠や過度のストレスにより脱落者が出ていた。

「さて、ならそろそろアレを送ってやれ」

「はい」

サイが魔法で何かを送る。

「さてと、クリアしろよ」

生徒達のもとにある指令が届いた。例外なく森にいる全生徒に。

指令を受けた全生徒は動き始めた。

第四話 参入儀式一日目 後編

ネルの前の空間に文字が出現した。その文字は指令を告げた。

『指令一、森の中に隠された証を見つけよ』

ネルは現れた指令をじっと凝視した。

「……証」

更に文字が追加される。

『なお、証は1500個しか用意されておりません。一日目終了までに証を所持していない者は強制的に失格といたします』

文字はそれで終わりだった。

「……あと14時間」

強制失格まで残り14時間。

「アンタまた余計なことしたな!!」

森の外で送った文章を見ながらサイがライラに詰め寄る。

「どうした」

ライラはまったく心当たりがないという風に言った。

「これはどういことですか!!」

サイが文章をライラに突きつける。

「何々？　なお、証は1500個しか用意されておりません。一日目終了までに証を所持していない者は強制的に失格といたします。おいおい全く容赦ないなお前は」

ライラの言葉に拳を握りしめ怒りのあまり体を震わせるサイ。

「アンタが勝手に追加した文章だろうが!!」

「だってツマンナイだろ」

「ツマンナイってだけで生徒の未来を潰すな!!」

サイがさっきの文章を取り消そうとするとライラに腕を掴まれた。しかも、万力のような力で握り締めた。

「いたたた!!」

「取り消しはなしだ。どの道1500人位まで落とすつもりだったんだ」

「こんなに早く落として少なすぎてもしりませんよ」

「大丈夫だ」

ライラは自信満々に言う。その自信はどこから来るのか疑問に思うサイであった。

ネルは拠点である砦の外に出て証を搜索していた。

「……サーチ」

ネルは搜索の魔法を使い、辺りを調べる。証とは学園の校章のこ
と微量の魔力が込められている。

「……見つけた」

反応はすぐ近くだった。あの水を叩きつけている滝の下。つまり
あのちょうど水が落ちてきている場所。

「……………」

ネルは羽織っていたマントを脱ぎ息を吸い込んで迷いなく飛び込
んだ。

「……………」

水は澄んでいて視界はいい。飛行魔法を使って水の中を飛ぶよう
に進む。ネルは結界を張り滝をせき止めてから証を探す。

（……見つけた）

証はちょうど滝のど真ん中にあった。ネルはそれを取り結界を解
き陸へと上がった。

『それを出しな』

水から上がった途端ネルは杖を突き付けられた。見ると4人の男

達に囲まれていた。それぞれが赤髪、青髪、黄髪、緑髪の男だ。

『証、持ってんだろ俺らに寄越せよ』

ネルに杖を突きつけている赤髪の男が言う。

「……………」

『どうした、恐怖で言葉もでねえか？』

ネルが証を手放す。証が地面に落ちる。

『へっ！ 良い心掛けじゃねえか』

地面に落ちた証に手を伸ばす赤髪の男。

「……………アイスフアング」

次の瞬間には赤髪の男の手が氷ついていた。

『ぎゃああああ！！ 腕が腕が！？』

『野郎やりやがったな！！』

青髪の男が魔法を使おうと構えるが。

「……………アイスレイン」

青髪の男に氷が雨のように降り注いだ。

『ぎゃああああ！！』

『こ、こいつ、なかなかやるぞ！』

残った緑髪の男と黄髪の男が警戒するが既に遅い。ネルを格下だと侮っていた時点で負けだ。

「……………アイスニードル」

地面から巨大な氷の針が出て2人を貫いた。ハズだった。

「がっ!？」

ネルが横なぎに吹き飛ぶ。

『ふう、危ない危ない』

氷で貫かれたはずの緑髪の男が立っていた。無傷で。貫かれた緑髪の男は幻覚。貫かれる前に幻覚を使い難を逃れ風の魔法でネルを吹き飛ばしたのだ。

『たく、てこずらせてくれたな。まあ、そのおかげで邪魔な三人を倒せたんだがな』

「……………つく」

ネルが緑髪の男を睨む。だが、緑髪の男はそんなのお構いなしにヘラヘラと笑っている。

『そんなに睨むなよ。さあ、証を渡しな。俺には氷は効かないぜ』

一步一步ゆっくり緑髪の男はネルに近づいて行く。ネルは目を一瞬閉じ開いた。

「……………漆黒よりなお暗く、深淵よりなお深く」
『おいおい今更なにすんだ?』

ネルの詠唱は続く。

「光すら飲み込み、ただそこにある暗き闇、常世を喰らい尽くす暗き輝き」

緑髪の男がおかしいと思う。明らかに詠唱が長い。それにひどく禍々しい気配が強まっていく。いつしか緑髪の男は一步も動けなくなっていた。

『な、なんなんだよ。それは!?!』

ネルは問いには答えずただ詠唱を続ける。

「世界の始まりにして終わり、終わりにして始まり」

『こ、この野郎!』

緑髪の男が風の弾丸を放つ。直撃するはずだった。だが、風の弾丸はまるで何事もなかったかのように打ち消された。

『な!?!』

「それは全てを喰らう暗き闇なり……アブソリュートダークネス」

『ぎゃああああ!?!』

ネルから生じた闇が大爆発を起こし周囲を喰らった。ネルを中心にクレーターが出来上がった。緑髪の男は気絶していた。

「はあ、はあ、はあ」

ネルはクレーターの中心で膝をつく。息が荒い。それもそのはず
闇の魔法は強力だが膨大な魔力を必要とするからだ。

「んっ……」

ネルが立ち上がりマントを羽織り証である校章を取り拠点である
砦に戻った。

森に夜の帳が降りてきた。

「全証回収されました」

サイがライラに報告する。

「あれから12時間か。割と早かったな」

「現在は争奪戦の真っ最中といったところですがおそらく今、証を
手にしてる1500人が残るか」と

「そうみたいだな」

ライラが画面をさっと一別して言う。今証を手にいる生徒は
ドイツもコイツも素質のありそうな奴ばかりだった。一部例外があ
るが証を手に入れているということはそれなりに伸びる要素はある
ということ。

「さて、そろそろ一日目終了だ。気を抜くなよ生徒共」

そして一日目が終わった。

第五話 参入儀式二日目 前編

日が昇り二日目の朝。既に森にいるのは1500人の生徒のみ。他の生徒は皆失格して森の外に連れ出されている。

「……朝」

壁に寄りかかったまま寝ていたネルが日の光で目を覚ました。そして回りを見渡す。昨日と変わらないことに安堵するネル。そして周りの気配を探る。動いているものはいない。近くに人の気配もない。昨日のやからはどうやら回収されたようだ。

「……」

とりあえず外にでるネル。日の光に目を細める。雨もやみ晴れ渡っている。

「……………うぐ」

ネルが言っているのはウェネーフィクスの事だ。雨はあがりウェネーフィクスの活動を遮るものは何もない。

「……………」

ネルは辺りの気配を探る。近くに動く気配はない。動物もない。昨日の闇の魔法の影響だろう。人間ですら嫌悪感を抱くの大人より敏感な動物ならばまず逃げ出す。そして近付かなくなる。つまり食料としては全く期待できない。

ネルは歩き出す。食料を探すためだ。幸い森の実りはいい。季節的にも果実はあるだろう。

クラッ

歩いていたネルがよろめく。

「っ!？」

慌ててネルは体勢を立て直す。闇の魔法の影響は術者にも及ぶ。闇の魔法は強力だが使えば使う程魂を蝕まれていく。

「……………」

一度目を瞑るネル。そしてすぐに再び歩き始めた。ネルは闇の魔法を使うのは初めてではないから慣れている。キヨロキヨロと周りを見渡す。この辺りには果実はないようだ。

「……………?」

おかしいと思うネル。このあたりの木は全て果実をつけるものだ。季節的にもなっていないなんてない。つまり誰かがとって行ったということ。身構えるネル。それと同時に獣が飛び出してくる。

「クッ!」

向かってきた獣を杖で叩く。しかし、少女の筋力だたかが知れている。獣は止まらなと見るやネルはすぐに避けた。

「おお、それを避けるか、あんた小せえなりしてやるな」
「……………誰」

赤い髪の男が出てきた。飄々とした雰囲気がある。さっきの獣、狼の姿をした何かはその赤い髪の男の隣に座っている。

「ああ、悪いな。オレはテュールってんだ。こいつはフェンリル。おい、フェンリルお前人型になれや」

狼が輝いたと思うところには小柄なネルと同じくらいの背で地面に達する綺麗な銀髪で赤い瞳をして旅人の格好で何かに両腕を縛られた少年が立っていた。

「うっせー、それよりこれはずせやー!!」

「あ?、はずすわけねえだろ。そしたらお前オレよりでかくなんだろうが」

フェンリルが騒ぐ。

「だからどうしたってんだよ!!」

「オレよりでかい奴は認めねえ」

「誰がチビだー!!　いいから解けー!!　てかお前十分でかいだろうが!!」

ネルはそれを不思議そうに眺めている。確かにテュールは身長的に173cm十分大きい部類だ。だが、彼の一族は全員2m以上の長身の一族なのだ。

「とにかくオレはそれを解く気はねえ」

「この、どうせ一族の中でめえもチビって言われてたんだろうが!!」

ブチッ

何かが切れる音がした。

「……………」

テュールが黙る。

「どうしたよ」

「お前知ってるか」

トーンが下がりドスの利いた声でテュールがフェンリルに聞く。

「何をだよ!!」

「言い訳を失った人間が何をするかだよ!!」

テュールは完全にブチキレていた。

「な、なんだよ!!」

「圧倒的暴力だ」

フェンリルがすかさず逃げ出す。

「逃がすかよ。集え、煉獄すら焼き尽くす紅蓮の炎エタンセル!!」

巨大な炎球がテュールの掲げた手の上に生じる。

「喰らえや!!」

テュールの手から炎球が放たれる。

(……まずい)

ネルは危機感を覚える。あれほどの炎球が落ちた場合この森は一瞬で焼け野原だ。ネルは急いで呪文を唱える。

「地獄の底にありし嘆きの川よ、その力を持ってその全てを凍りつかせよコキュートス!!!」

炎球が着弾した一瞬の間に全てを凍りつかせた。炎球すら凍り付いている。ついでにフェンリルすら凍り付いている。

「やっぱお前ただもんじゃねえな」

「……考えるべき」

「いやゝ悪かった」

平謝りするテュール。

「っっておれまで凍らすなよ!!!」

「なんだ生きてたのか」

「生きてるよ!!!」

テュールとフェンリルがまた騒ぎ出す。ネルは早々に立ち去ることにした。

「ちょっと待ってくれよ」

「……………何」

「いや、お前さ食料ないんじゃないの?」

テュールの手には果物が握られている。

「……………あなたが」

「ほしいんだろ？」

「……………」

テュールを睨みつける。

「おお怖い、怖い」

「……………何を考えている」

「なくに、単純なときさ。お前いずれオレの邪魔になりそうじゃん——」

テュールから殺気が漏れ出す。

「——だからここで潰そうかと思ってな——」

テュールが炎を放つ。マントでそれを掃うネル。

「……………アイスファンク」

氷の牙をテュールへと放つ。

「氷は炎には勝てませうん。バーニング——」

氷が炎に阻まれる。急速に熱せられた氷は水になり水蒸気となる。

「うお——」

水蒸気がテュールの視界をふさぐ。

「……アイスジャベリン」

その中でネルの声が響く。水蒸気の中から氷のジャベリンが飛んでくる。

「おわっと！」

それを体をひねって避けるテュール。そして水蒸気が晴れたときにはネルはいなかった。

「隠れたようだななら、スネークバーニング！！」

テュールの杖であろう槍から炎の蛇が放出される。

「さあ、行け」

森に蛇が散る。

「はあ、はあ、はあ」

ネルは森の中を走っていた。そのあとを炎の蛇が追う。走りながらネルは呪文を唱える。

「……千の眠りを与えし凍土の眠り、フリーズサウザンド」

ネルの周りが凍っていく。そこに近づいてきた炎の蛇もまた同じ

く凍っていった。

「……」

「やるな、だが!!」

茂みから出てきたテュールが槍を構えネルに突っ込む。

「おらああああ!!」

それを紙一重で避けるネル。魔法使いが近接戦闘とはどうなのだというはなしだが。

「…………やる」

「ふん、魔法騎士目指してんだ。これくらい出来なくてどうするよ」

ウィザードナイト

魔法騎士、魔法と武術を使い数多くの武勲を立てた者に与えらるゝとされる王国最強の騎士の称号。それを目指す学生は多い。そのため武術を習う学生は多いのだ。ネルはそちらを希望していない。

「……………フリーズ」

「へ!?!」

テュールの足が凍りつく。

「……………油断大敵」

「ええええええええ!!」

テュールの顔が驚愕に染まる。というより戦闘中に威張る方が悪いのだけれど。

「……………どうする？」

ネルがテュールに聞く。返答しだいでは気絶させる気のネル。

「……………参りました」

「……………そう」

ネルが杖を一振りするとテュールの足を凍り付かせていた氷が溶け自由になる。

「お前強いんだな」

「……………別に」

ネルが勝てたのは偶然だ。もう一度正々堂々戦えば勝てるかどうか分からない。ネルが弱いのではなく相性の問題だ。

話も終わったと思いネルは立ち去ろうとする。

「ちょっと待てよ」

振り向くとテュールが果実を投げてきた。それを取り、何？という視線を向ける。

「果実全部採っちゃったからそれしかねえが分けてやるよ」

「……………ありがとう」

「じゃあオレ行くわ。行くぞフェンリル」

テュールはフェンリルと共に去って行った。

「……………」

ネルは果実をかじる。

シャク

みずみずしい果汁が口の中に広がる。

「……おいしい」

呟いた瞬間ネルは果実を放り投げた。それに何かが飛びつく。

「……魔物」

『グルルルル!!』

果実を飲み込んだ魔物がネルを睨みつけうなり声を上げる。魔物は狼のような姿をしている。恐らくフェンリルに引き寄せられたのだろう。

「……………」

しかも、この一匹だけではないようだ。周囲にはネルを見つめる視線がいくつものある。ネルは慎重に気配を読んでいく。数は十匹ほどのようだ。

「……すぐ終わる」

杖を構えネルは魔物との戦闘を開始した。

「さて、そろそろ頃合いだろ」

ライラが呟く。サイは嫌な予感がしながらも聞いてみる。

「何がです？」

「見てのお楽しみだ」

「嫌な予感しかないんですが」

今までのことを思い返しながら言うサイ。どうせ止めても無駄なのだから心配するだけ疲れるだけなのだがそうも言ってられないサイなのだった。

「大丈夫だ」

サイの心配をよそにライラが不敵に笑いながら言ったのだった。

イニエーション
参入儀式残り時間30時間。

第六話 参入儀式二日目 後編

魔物との戦闘を終えたネルは再び食料を搜索していた。先ほどの魔物は食べられない。食べられる魔物もいるのだがあまりお勧めはしない。森の中を歩いていると再び川に出る。拠点付近の川とは別の川だ。

「……………」

ネルが川を覗く。澄んでいて綺麗な川だ。川底までしっかり見える。そしてそこには魚がいっぱいた。食料には丁度いい。ネルは決めて川に手を浸す。

「……………」

ネルは目を閉じて集中する。そして魔力を放出する。それに驚いて気絶した魚が水面に浮いてきた。それを集めるネル。氷で作った籠に入れる。鮮度も保てて一石二鳥だ。

魚を集め終わった所でネルの耳に戦闘の音が入ってきた。割と近くのようなだ。ネルは確かめるために音のする方へ歩いていった。

『このバカ!!』

『ひえええゴメン!!』

男と女の叫び声が聞こえる。ネルが見ると男女の二人が魔物に囲まれていた。リリイとカイルだ。

「……………」

狼系の魔物だ。それに囲まれてしまっている。だが、手助けはいらないとネルは判断した。リリイが土系の属性の優秀な魔法使いであることは知らないがネルは本能的に感じ取っていた。

「ああもう、あんたのせいでこうなったんだからあんたなんとかしなさいよ!!」

「無理!! 絶対無理!!」

「はあ、わかったわよ。私がなんとかすれば良いんでしょうまったく。アースクエイク!!」

リリイの魔法で地面が揺れる。魔物の立っている地面から土柱が出現し魔物を吹き飛ばしていった。ネルは巻き込まれないよう境界を張った。

「ふう」

「すごいやリリイ!!」

ドガッ!!

「痛!？」

リリイは寄ってきたカイルを殴った。

「な、何で殴るの!？」

「あなたがバカで役立たずだから」

「酷い」

しかし事実なので仕方がない。こうして生き残っているのもリリイがいるからだ。リリイがいなかったらカイルは30秒も保たない

だろうとリリイ自身思っている。

「で、そこで隠れてる人出て来たら？」

「……………」

木の陰に隠れていたネルが出て来た。

「あなた確かネルだっけあなたも残ってたんだ」

リリイの言葉に頷くネル。

「リリイこの子誰？ 知り合い？」

「森に入る前に知り合ったのよ」

「そうなんだ僕はカイル・ディ・サクレリス。よろしく」

「……………ネル、よろしく」

形式的に握手を交わしたネル。

「さて、始めるか」

ライラがおもむろに立ち上がり歩き出す。

「何をする気ですか」

監視をしなければならぬサイは動くことが出来ない。

「安心しろ教育者として脱落者にもチャンスを与えるだけだ」

「まさか……………！！」

「そのまさかだ」

ライラは脱落者が集められた小屋へと向かった。

ドンッ！！

扉を開け放ちライラは脱落者に言う。

「さあ、クズ共貴様等にチャンスをやる」

教育者としてあるまじき発言をするライラ。

「優しい優しい私は哀れで惨めな貴様等にラストチャンスをやろう。
二日目が終わるまでに今生き残っている奴らを倒して証を奪えば貴
様等は敗者復活だ」

ざわ……ざわ……

脱落者の全員がざわめく。

「さあ、行くがいい」

ライラが全員を転移させた。

「さあ、面白くなってきたなウエネーフィクスはなぜか動いてない
がまあ、そろそろ動くだろう」

ライラは面白そうにサイのもとに戻った。

『指令、脱落者に復活のチャンスを与えた。それはお前たちの持っている証を奪うことだ。期限は二日目終了時、その時点で証を持っているものは強制失格とする』

ネルたちの下に指令が届く。

「誰がこんなの考えてるのかしら」

「たぶん理事長と僕は思うよ」

「……………」

「まあ、そんなのはどうでもいいけど。さっそくきたみたいよ」

リリイが言うのと茂みから数十人の男たちが出てきた。脱落者だ。

「数をそろえてきたわね」

『俺らも必死なんだよ』

「それはこっちも同じなんだけど」

『関係ないな!』

数十人が一斉に様々な形の杖を構え魔法を放つ。

「仕方ないわね。アースウォール」

土の壁が魔法を防ぐ。魔法を全て防いだところでネルが壁の外へ飛び出す。

「一人で出たら危な……………」

リリイの心配はいらなかった。脱落者達は既に全員凍り付けにされていたからだ。

「あなたがやったの？」

ネルは頷いて肯定した。

「なかなかやるとは予想してたけどここまでとは」

「ねえ、みんな死んじゃった？」

カイルの問いにネルは頷く。

「へえ、すご——うわぁ!!」

カイルが最後まで言えなかったのはネルがいきなり氷の槍を放ったからだ。

「な、何するんだよ!？」

「……敵」

「え？」

カイルが振り返るとそこには氷の槍を喰らってダウンしている男がいた。

「もしかして助けてくれた？」

「……視界に入ったから撃っただけ」

「でも、ありがとう」

「……………」

ネルはどこか照れた風にカイルから視線を外した。そしてすぐに照れた雰囲気は消える。

「まったく次から次へと」

リリイの言葉を合図に四方八方から脱落者達が出てくる。

「さて、さっさと全滅させるわよ!!」

「……………」

「が、頑張る」

三人は魔法を放つ。

「おいおい、ちょっと弱すぎじゃねえの？」

テュールが呟く。

「おれを囿にしてくせに何を言ってやがる」

フェンリルは地面に転がされていた。

「あ、なんか言ったかチビ」

「チビ言うな!!」

「チビにチビ言って何が悪い」

「全面的に悪いわ!!」

だが、騒いでいた2人が急に黙った。

「また来たようだぜ」

匂いを嗅いだフェンリルがテュールに言った。

「たく、次から次えと、めんどいなバーニング」

ドンツと凄まじい音と共に巨大な炎柱が立ち昇る。

「あちっ！ あちちっ！！！」

フェンリルにまで飛び火するほどだ。炎柱が消えると黒こげになった数十人の脱落者達がいた。

「てめえ！ 少しは加減しやがれ！！ おれが燃えるだろうか！！」

「いいだろうがどうせ元にもどんだから。小さい奴だな」

「誰がチビだコラー！！」

戦闘中だというのに危機感のない二人。

時は過ぎ二日目が終了した。

「サイ残った奴らは？」

「ほとんど変わりありません。一部が敗者復活したぐらいです」

サイの報告を聞いたライラ。

「割と頑張るじゃないか」

「ですね」

「まあ、後1日だどうなるかだな。貴族のお坊ちゃんたちはそろそろ限界だろう？」

ライラの指摘通り貴族の子供たちの殆どが拠点に引っ込んでしまっている。

「まあ、そうですね」

「それにウエネーフィックスの被害も多少は出てるようだし」

「はい、明日一杯は気が抜けません」

「そうだな」

ライラは森を見ながら言った。

（さて、じゃあウエネーフィックスを抑えてた魔力を放つのをやめますかね）

ライラが誰にも気付かれずに放出していた魔力を止めた。どこかでウエネーフィックスの叫びが響いた。

（さあ、残り1日だ生き残ってくれよ）

イニシエーション
参入儀式残り24時間。

森の中のある場所。ここに一匹の魔物がうずくまっていた。第一級接触禁止生物ウエネーフィクスだ。サメの顔と人間の体を持ち上質な魔力を喰らい土の中を泳ぐ生物。

『グルルルル』

ウエネーフィクスがうなり声をあげた。

『ガアアアア!!』

ウェネーフィクスが天に吼える。そしてウェネーフィクスは近くにいる上質な魔力のもとへと動き出した……………。

第七話 召喚

イニシエーション
参入儀式三日目。

ネルは二日目にリリイとカイルに魚をおすそわけして二人と別れ
拠点へと帰り休息をとっていた。

「……行こう」

ネルは砦へとかけていた結界を解く。これから使い魔を召喚しに
行くのだ。

ネルは砦をでて森を歩く。森の様子は昨日と変わらないがネルは
微妙な雰囲気の違いを感じ取っていた。

「……………何？」

だが、あまりに微妙な為ネルには何かはわからなかった。もつと
経験を集めばそれは魔力の量と質の変化だとわかったのだが今のネ
ルにはわからない。

微妙な違いとは魔力の質と量が変わったことだ。質、量共に低下
している。ライラがウェネーフィクスを抑えるのを止めたことが原
因だった。

「……」

考えても無駄なのでネルは気にするのをやめて召喚が出来る場所
を探す。

「……見つけた」

開けた場所そこに魔方陣を書いていくネル。そして召喚の儀式を始めた。

「……我は乞い願う」

魔方陣が発光していく。それを見ている影がひとつ。ネルは気づかずに召喚を進める。

「今ここに異界の扉を開き我が呼びかけを届けよ。我が血を贄にして彼の者をこの地へと呼び寄せ我が使い魔とせよ。呼びかけに応えここに姿を現せ!!」

召喚には多少の時間がかかる。その間召喚者はその場を動くことが出来ない。

ガサッ!!

茂みの中からウィネーフィクスがその醜惡な姿を現した。ネルの顔が歪む。

『リョウシツナマリヨクヲカンジテキテミレバ、シュオウカンチュウトハラツキダ』

身の毛のよだつような不快な声でウィネーフィクスが言った。これが接触禁止の理由。知能があるということは自在に魔法を操れるということ。高度な社会を持つということだからだ。

「学園長!!」

サイが慌ててライラに駆け寄る。

「どうしたサイそんなに慌てて」

「生徒がウィネーフィクスに接触してしまったんですよ!!」

「大丈夫大丈夫。どうせ逃げるって」

サイが首を振る。

「それが動けないんですよ」

「なに？」

「見てください」

サイがライラに画面を見せる。

「召喚中か!!」

「そうです」

「クソ行くぞ!!」

ライラが走り出す。そして森に転移しようとしたところで完全に動きを止めた。

「どうしたんですか!! 急がないといけないのに!!」

「来る」

「え？」

「何か来る」

ライラが森の上を見ながら呟いた。

「何がです」

「強大な何かが来る」

ドーン！！

その瞬間凄まじい衝撃が巻き起こった。

『ジャアシンデエサニナレ』

ウィネーフィクスがネルへ襲い掛かる。ネルは思わず目を瞑った。そして天に助けを願った。それは唐突にやって来た。

ドーン！！

凄まじい衝撃が巻き起こり砂煙が舞う。そして魔方陣の中に何か
が落ちた。

砂煙が晴れるのと同時にネルが目を開けた。そこには漆黒のロングコートを纏った黒髪の少年瞳は左目が赤く十字架が刻まれている。左目は漆黒の少年がウィネーフィクスを押さえてそこに立っていた。漆黒の少年——ケイはネルに迫るウィネーフィクスを素手で掴んで止めていた。

「何とか間に合ったか。あいつめいきなり落としやがって」

ケイが愚痴をこぼす。

「……………誰？」

「俺か、俺は——」

『ナンダキサマハ』

「——まずはコイツを倒すのが先だな」

『ナンダナンダナンダ！！　ナンダキサマは！！　アリエナイアリエナイアリエナイ！！！！』

「さあ、なんなんだろうな、魔剣開刀」

ケイの手に抜き身の血を思わせる紅い刀身の刀が握られていた。

『マサカキサマ——！！』

ウィネーフィクスが最後まで言い終わることはなかった。ケイが振るった刀がウィネーフィクスを真つ二つに切断したからだ。

「ふう」

ケイの手の中の刀が虚空に消える。

「大丈夫か？」

「……………問題はない。それよりあなた誰」

「俺は執行者？11K。ケイって呼んでくれ。君は？」

「……………ネル」

「そうか、それで君が俺を呼んだのか？」

ネルは状況を考えて頷く。

「つまり俺はネルの使い魔になるのか？」

「……………おそらく。いや？」

「いや、どうせ行くところはないからな」
「そう、なら、そろそろ契約が終わる」

魔方陣が輝きを増し光が二人の左手へと向かう。そして紋章を刻んだ。二枚の翼を模した白銀の紋章を二人の左の手の甲に刻んだ。

「よかったですね、なんとか召喚が間に合って」

画面越しにネルたちを見ながらサイはほっとする。だが、ライラは険しい顔のままケイを見ていた。

「学園長？」

「なあ」

「はい、なんでしょう」

「こいつなんだと思う？」

ライラがケイを指差してサイに聞く。

「気になるんですか？」

「ああ、で、何だと思う？」

サイは少し考えてから言う。

「わかりません。強大な力を持っているのは確かです」

「そうだな、注意しておくでしょう。それで残っている奴らは全員召喚を終えたか？」

「はい」

「そうか、今回はこれで終わりにしよう」

ライラが腕を振るった。ライラたちは森から学園に戻ってきた。広場には1500人の生徒＋使い魔1500が現れる。

「これにて参入儀式は終了とする。エリス先生が寮へ案内するから今日はゆっくり休むことだ。荷物は部屋に置いてある。そして合格おめでとう」

ライラが宣言し参入儀式は終わりを告げた。イニシエーション

運命は今、交錯する。

互いが互いを引き寄せる過酷なる運命

0と1の戦い

運命はいやおうなく全てを巻き込んでいく

そして全ては選択の先にある……………。

第八話 世界

その夜ネルとケイは寮の一室にいた。男女分けるべきと思うところなのだがネルがこの部屋にいる理由は自分の部屋だから、ケイがいるのはネルの使い魔で部屋が用意されるまではここで寝ることになっている。

「さて、落ち着いたな。ネルちょっと確認したい事があるんだ？」

「……………何？」

「俺で本当にいいのか？」

「？」

首を傾げるネル。

「俺が使い魔でいいのかってこと」

「……………あなたは私の召喚に応じて助けてくれた。あなたしかない」

「俺が人殺しでもか？」

「……………ケイがどんなことをしても受け入れる」

ネルの言葉にケイは微笑んだ。

「わかったなら……………」

ケイがネルの前に跪く。

「執行者ケイはこの身の全てをあなたに捧げよう」

それは誓い。

「……わかった。期待する私の使い魔」

誓いは交わされた。

「さてと、それじゃあ、この世界のことを聞かせてくれないか？」

ケイがネルに言う。

「……長くなる」

「ネルが話せるだけでいい」

ネルが頷き話し始めた。

「まず、ここはユニヴァースという世界にあるミスヴェルトという国にある巨大な浮遊大陸に作られたノステラシス魔法学園」

「なるほど魔法学園か道理で魔力が集まってるわけだ。じゃあ、詳しくこの国についてくれないか？」

ネルは頷いて話し始めた。

ミスヴェルト。エンピアス王が治める国。徹底的な実力主義で実力さえあれば奴隷でも王にすらなれる。魔法技術が発達しており生活に魔法は欠かせない。身分制度は残っており奴隷から貴族まである。国民のほとんどが平民か奴隷。だが、奴隷にも教育の機会は与えられている。

気候は比較的穏やかで四季があり季節によって様々な顔を見せる。名物の一つ。

地形は平原と森が多く農業に適している。また国の北には巨大な

山脈がある。東の国境には海があり漁業も盛ん。西には砂漠がある。

「……という感じ」

「じゃあ近隣諸国の状況は？」

「ミスヴェルトは三大国に囲まれている」

北の山脈の向こうのライベルト皇帝が支配するラグナバルト帝国。西の砂漠の向こうのアークライト王が治めるサモバンリ王国。南のユリアリス女王のドレストル連合国。

「これにミスヴェルトを加えて四大大国という。だけどミスヴェルトは四国の中でも一番国土が小さいうえに国力も弱い」

「それでもこうして平和を保っているということは魔法技術のおかげか」

ネルが頷く。

「……ほかの国より発展した魔法技術のおかげで均衡を保っている。今のところ四国の情勢は安定している。でも、それもいつまでもつかわからない」

今は魔法技術で勝っていてもいずれは追いつき追い越される可能性もあるからだ。

「よくわかった」

「……………他に聞きたいことは？」

「国のことは大体わかったあとは自分で見てみる。使い魔の仕事を教えてくれ」

「……………わかった」

使い魔の仕事は大まかに言って三つ。ひとつは主人の補佐。体調管理から家事の世話など。二つ目は主人の護衛。戦闘においては主の盾となり矛となる。三つ目は薬草などの探索採取。

「……できる？」

「一つ目と二つ目は問題ない。三つ目はそれがどういうものか教えてくれればいける」

「……そう、他には？」

「今はない」

「…………じゃあ、次はあなたのこと」

「わかった」

ケイは話し始めた。

「俺はわかっていると思うが異世界の人間だ」

ネルは頷いて肯定を示す。

「俺の元いた世界にも一般人が知らないだけで魔法や異能の力が存在していた。俺はある組織に所属していた。その組織には魔法や異能の力の使い手が集まっていた」

「……力？」

「これだ、魔剣開刀」

部屋の中に無数の剣が出現した。その全てが強大な力を持った魔剣。

「俺は魔剣を自由自在に操れ取り出すことが出来るというわけだ」

魔剣が消える。

「まあ、他にもあるみたいなんだが」
「……………」

ケイの言葉に首をかしげるネル。ケイは神に力を与えられていることをネルに黙っていた。いまだに自分の力を全て自覚しているわけではなかったからだ。それにねずみがいるようだからだ。

「まあ、それはいいとしてその組織で俺は27人の執行者の一人としていろんなことをした人もたくさん殺した。そして任務の途中でネルに呼ばれて俺はここに来たんだ。俺についてはこれくらいだ」
「……………わかった。そろそろ寝る」
「ああ、そういえば俺はどこで寝ればいいんだ？」

黙ってベットをさすネル。

「お前は？」

また黙ってベットをさすネル。

「いやいや、ちょっとまずいだろ」
「……………」

「わからないならいい。俺は床でいいよ」
「……………そう」
「じゃあ、お休み」

ネルが眠りにつき完全に眠ったところで――。

「入ってきたらどうだ」

——ケイは言った。

扉が開きライラが入ったきた。

「気づいていたか」

「ああ、盗み聞きもしてたな」

「お見通しか。さすがだな」

「俺に話があるんだろ。ここじゃなんだ外に行くでしょう」

「そうだな」

ライラとケイは部屋を出て行った。そして広場に出る。

「さて、話をする前にその木の陰、城門の上、壁の中、土の中、茂みの中、部屋の中から見ている奴らは全員出て来い」

『!?!?』

ケイが言ったところから教師と思しき老若男女が出てきた。

「いつ気がついた」

ライラがケイに聞く。偽装は完璧魔力も気配も完全に消せる人選をしたはずだった。

「最初からアンタが部屋に来たときからだ。俺には全てが見えるらしいんでね」

ケイの右目が妖しく光っていた。

「なるほど、わかった、それじゃ話をしようか」

「ええ」

ケイはネルに話したことを話した。ライラたちは驚いていたがどこか予想通りと言ったとおりだった。

「なるほどな、だかお前まだ隠してることがあるだろう」

「アンタにはばれているようですね。ええ、そうです。ですがそれについては今は話せません。俺自身わかってないこともあるので」

「そうかわかった悪かったな時間をとらして」

「いえ、それじゃあ」

ケイはその場を立ち去った。

「あのライラって人は一筋縄じゃないようだ」

そう呟きながらケイはネルの部屋へと戻って行った。

第九話 説明会

翌日は俗に言う入学式のようなものだ。ケイは思った。桜に似た桃色の花を咲かせた木が咲き誇っている。昨日の参入儀式イニシエーションは試験のようなものだったとケイはネルに聞いた。そして今日は説明会という名の入学式のようなものがあるようだ。

ケイたちは大広間に集まっていた。ネルとケイは壁際で立っていた。ネルは壁にもたれて本を読んでいる。するとそこに茶髪の青年を連れてリリイがやってきた。

「ネルおはよう」

「……おはよう」

本から顔をはずさずに応えた。

「そっちの人は使い魔？」

ケイを見ながらリリイが聞く。ネルは頷いた。

「はじめまして私はリリイ・レムス・ツタニティア。こっちはグリフォンのランドよ」

「ランドと申します」

ランドが恭しく頭を下げた。礼儀正しい性格のようだ。着ているのも執事服で端から見ればリリイの執事である。

「俺はケイ、一応人間だ」

「人間ね、珍しいわね」

「そう見たいだな。人の形をしているのが多いがほとんどが人外の力を持った幻獣みたいだしな」

「わかるの？」

「ああ」

幻獣の変化はただの人間には見破れない。つまりケイはかなりの使い手だろうと判断するリリィ。

「あゝ！！　いたリリィ！！」

カイルが走ってやってくる。だが――。

「みつともないから走るなど言ったじゃろうが――！！」

青髪ツインテールの羽衣を纏った偉そうなネルよりも小柄な少女というよりは幼女にとび蹴りを食らわされ床に転がるカイル。

「痛い！！」

こっちの方がみつともないと思うのだが関係ないようだ。そんなカイルを冷めた目で見るリリィ。

「えっと、あそこで転がってるヘタレはカイル・デイ・サクレリス。一応、一応、私の幼馴染よ」

「僕ヘタレ！？　そして一応ってなに！？」

確かにこんなのは幼馴染とは言いたくないだろう。

「うるさいよ！！」

おっと失礼。

「お前のがうるさいのじゃ!!」

また蹴られるカイル。

「さて、わらわは水龍のミズチこんななりでもおぬしらの倍は生きておる。不本意じゃがこのヘタレがわらわのマスターだ」

確かに姿と言葉遣いにギャップがある。

「ネルの使い魔のケイだ」

「ほう、お主面白いことになっておるの？」

ミズチがケイをじっくりとみながら言う。

「わかるのか？」

「龍とはいえわらわとて神の端くれ。お主がまともでないことくらいわかっておる」

「そうか、まあ、わかってたことだがな」

「まあ、それをどうするかはお主しだいじゃ」

「そうする」

ミズチとの話も終わったところでちょうどライラがステージ上に現れた。脇にはサイが控えている。

「さて、諸君参入儀式イニシェーションご苦労だった」

ライラが挨拶をする。

「一晩で疲れは取れたか？ まあ、取れてなくても関係はない。どうせ今日は説明だけだ。そのあとは自由だ。街に行くのもいい。コロシムでは剣闘もあつてみたいだからな。一応違法だが私は規制しない。捕まらなければな」

教師らしからぬ発言をしたところでサイが咳払いをして止める。

「さて、じゃあ、さっさと始めるとしよう。まずはお前たちに魔法を教える先生たちを紹介しよう」

壇上に11人の教師が現れた。

「左端は知ってるな無属性の魔法を教えるエリス・マネイア先生だ」

エリスが頭を下げる。次は赤髪で長身の男。エリスと似ている。

「その隣が火の魔法を教えるセイル・マネイア先生だ。エリス先生とは姉弟で重度のシスコンで変態だ」

「おいしい!!」

セイルが反論しようとするがライラは無視した。次は子供にしか見えない青髪ショートヘアの女(?)。

「その隣の青髪のどうみても子供にしか見えないのがお前たちに水の魔法を教えるウィリア・アクエリス先生だ」

「誰が子供ですか!!」

ウィリアの反論も完全に無視。それにウィリアの場合は全員が小さいと思っている。次は白髪と髭をたくわえた男性。

「その隣の男性が風の魔法を教えるセフィス・テンペリス先生だ。この歳だがかなり強いぞ。しかも怖い。まあ、私よりは弱いかな」
「フォッフォッフォ」

ライラの紹介とは対照的にセフィスは優しそうに笑う。強いというがまったくそんな感じのないセフィス。次は茶髪で童顔の男。

「その隣の特徴のないことが特徴の男は土の魔法を教えるヒューイ・マグネス先生だ」

「ど、どうも」

ヒューイがおどおどと頭を下げる。どうやらカイルと同じでヘタレのようだ。次は長髪で金髪碧眼で白で統一した服を着ている男。

「その隣にいる殺したくなるイケメンがレオン・ナイトレイ先生。顔はいいが本性は黒いから気をつけろ」

「学園長それは少し言いすぎでは？」

レオンの言葉をやはりライラは無視する。誰も言葉も無視する気のような。次はオレンジの髪をショートにした女。

「その隣が雷の魔法を教えるミーリア・サスタニス。お調子者だ」
「うちはそれだけか！！」

ツツコミを入れるミーリア。本当にお調子者だったようだ。次は白いショートヘアの無表情の女。

「その隣が光の魔法を教えるレミリア・フォークネス先生。保険医も兼ねている。無愛想なように見えるが優しい先生だ」

「……………あう」

照れて赤くなるレミリア。次は珍しい黒髪の男。偉そうだ。

「次が、あまり紹介はしたくないが闇の魔法を教えるレギルス・ダ
ーリス先生だ。偉そうで私は苦手だ」

それは同族嫌悪じゃないのかと全員が思った。

「我が^{オレ}レギルスだ。我^{オレ}に従え」

本当に偉そうだ。次は、緑髪を三つ編みでメガネで白衣の女。

「その隣が魔法薬の先生でフェリア・アミルス先生。もう一人の保
険医だ」

「よろしくお願いしますね」

その次はメガネをかけた灰色の髪の男。

「その隣が魔法史のテオロ・ヒストリス先生。授業ははっきり言っ
てつまらない。しかし、なぜかこの先生の授業では寝れない。言葉
を聴いただけで眠くなくなる。一種の拷問だ」

「よろしく」

「さて、これで貴様らに関係のある職員は紹介し終わった。あとに
この城の管理人とか森番とかいるんだがめんどいんで省略」

管理人と森番と思わしき人物たちが悲しそうにしている。ご愁傷
様です。

「学園内の案内は明日だ。さてと、授業は明後日から詳しい説明

もその時に行く。次は……なんだったけサイ？」

サイが溜息をつきながらライラに言う。

「はあ、組み分けですよ」

「ああ、そうだったな。さてと」

パチン

ライラが指を鳴らすといきなり9個のテーブルが現れた。それぞれのテーブルはテーブルクロスの色が異なる。

「さらにと」

いきなりネルたちが転移させられる。

『!?!』

「私の独断と偏見で組み分けした。基本的に組は変える気はない。力も合わせてないから強い所は強いし、弱い所は弱い、微妙な所は微妙だ」

全9クラスで無、火、水、風、土、氷、雷、光、闇。担任はさつき紹介された教師達。ネル達のテーブルクロスの色は透明でクラスは無。担任はエリス。

「さて、じゃあ、これで終わりだ。ああ、寮の部屋は移動しておいたから気をつけろ。あとバレなければ何やつでも構わん以上だ。今日はこれで終わりだ」

ライラはそう言って壇上から消えた。生徒たちはメイドに案内さ

れて新しい部屋に行った。

ケイ達の部屋はきちんと二部屋あった。元々は使い魔と一緒に過ごすことを考えて作られた寮だから当たり前だ。昨日の部屋はクラスごと各部屋を準備するための仮の部屋だった。

「ネル、少し外出して来ていいか？」

「……………どうして？」

「少しな」

「……………いい」

「じゃあ、行ってくる」

ケイは寮の部屋を出て行った。

第九話 説明会（後書き）

キャラクターを募集します。

どんなキャラクターでも構いません。なるべく詳しく設定をかい
て感想に書いてください。

駄目作者ですから設定通り書けないかも知れませんがご容赦くださ
い。

ストーリーカーでも変態でも何でもいいです執行者でも構いません。

皆さんの募集をお待ちしています。

第十話 可能性の力

ケイは寮を出て森に向かう。誰もいない森の奥でケイは立ち止まった。

「さて、問題はないと思うが一応人払いをかけておこう」

ケイはいくつかの木に文字を書いていく。

「我は魔術師の後継、魔導の末裔なり。刻みし力あるルーンよ、認識を阻害し人も魔も払え」

ケイが刻んだ文字が光を放つ。魔術の人払いの結界。認識を阻害して誰もこの場所に近付かないようにする。

「よし、さて」

ケイが目を瞑る。自身の中にあるものを認識する。

「なるほど、力の使い方だけは記憶にあるようだ。なら今はこれがちょうどいいな」

ケイが右手を掲げる。

「シロガネ白鋼！」

右手から白い輝きが放たれ付近を包んでいく。魔法ではない。魔力は感じられない。異能の力だ。

光が収まった時ケイは荒野に立っていた。明るい青空だが空に太陽はない。どこまでも続く広大な世界だ。

「これが創造の白鋼シロガネの力か」

白鋼シロガネ、想像がおおよそ限りありとあらゆるものを作り出すことができる能力。鋼と呼ばれる四つの力のうちの一つ。

つまりこの荒野はケイにより想像され創造された小規模な世界。

「次はこれだな」

ケイが左手をその辺りにあった巨石へと向けた。

「黒鋼クロガネ！」

左手から黒い光が放たれ巨石に当たる。巨石は跡形もなく消え去った。

黒鋼クロガネ、白鋼シロガネとは真逆の能力。ありとあらゆるものを破壊し消滅させる能力。四つある鋼のうちの一つ。

「鋼かなかなか強そうだ。あとの二つは常時発動型か」

赤鋼、ありとあらゆるものを認識する能力。世界の心理、人間の心、過去や未来などありとあらゆるものを見ることが出来るが脳にかかる負担が大きい。基本常時発動だがONOFFができる。四つある鋼の一つ。発動中は右目が赤くなる。

青鋼、身体能力や他の力を限界まで高める能力。常時発動型でO

NOFFが出来ない。他の能力と併用することで能力を強化する事が出来る。四つある鋼の一つ。

「ふん、こればかりは使ってみないとわからないというかなるほど先読みと身体強化か」

これはいいと思うケイ。どうやら神が与えたという可能性の力とやらはかなり強いものようだ。

「それにしてもこんな力を持ってた世界の俺ってなにをやってたんだろうか……まあいいか。次だ」

ケイが両袖をまくる。そこには。10個のセフィラと22個の小^ス徑^ペを体系化した図とそれを逆にした図が刻まれていた。

アカガネ
「赤鋼……」

ケイの右目が赤く輝く。

「術式解析、カバラの生命の樹と邪悪の樹の刻印による魔術、虚空ゼロ領域からの物質転送術式、および転送物質固定術式、転送物質概念認識術式、固定物質該当概念は守護天使と十地獄の悪魔。術式名称は天魔の術式」

天魔の術式、異世界のアレイスター・クロウリーが作り出した魔術。虚空ゼロ領域と呼ばれる空間、天界とも魔界とも呼ばれる場所にある次元の超えたものの俗に言う天使と悪魔を呼び出しその力を行使する術式。天使と悪魔は高密度の魔力の集合体でありそれひとつで世界を破壊することが出来る。

右目の輝きが消える。

「なんて術式だ。世界ひとつが俺の手の内か」

ケイが呟き袖を元に戻す。

「次だ。古の叡智を納めし神々の創りし無幻の図書館。盟約に従い道を開かん」

黒き空間が広がりそして扉が開いた。中はまさしく図書館だった。ロビーやエントランスなどなく、見渡す限り、いや見えない所も全て本棚で埋め尽くされている。天井は高く果てがないように錯覚する。辛うじて見える壁も本棚で埋め尽くされていて梯子や無駄に荘厳な螺旋階段を使えば壁につけられた通路に行ける。と言っても本しかないが。

本と本棚以外の物と言えば入り口近くの開けた場所に置かれた椅子とテーブル、ソファくらいだ。無幻図書館それがこの図書館の名前。

ケイが周りを見てみると奥から黒髪の女性が現れた。漆黒の服の上に純白のエプロンを着た陶器の肌を持つ漆黒しか写さないガラスの瞳の人間味に欠けた女性が現れた。

「ようこそ無幻図書館へ。ここには古今東西ありとあらゆる蔵書、知識、この世の叡智が保管されています。何の変哲のないライトノベルから強大な力を持つ魔導書、神の書まで選り取り見取りあなたのニーズにお応えします。マイマスター」

「君は？」

「インデックスと申します。この無幻図書館の司書をしております。

現在世界を移動したことによる情報解析とマスターへのフィードバックのため蔵書の閲覧は一定期間不能となっております」

「フィードバック？」

「はい、この世界の文字言語の知識をマイマスターにフィードバックしております。現在は言語のみ認識可能です」

「そうか、道理で言葉が通じるのか。俺には普通に使ってる言葉と同じ感覚だったぞ」

無幻図書館、人と神が生み出したありとあらゆる叡智が保存された図書館。その中から力ある魔本を取り出し使うことも可能。また、付属効果としてありとあらゆる言語文字をマスターは解読できる。世界にある知識を自動で収集しマスターへのフィードバックが可能。

「それがフィードアバックですマイマスター」

「蔵書を使えるようになるまでにどのくらいかかる」

「情報の収集、整理、適応化、フィードバック、全ての工程を完了時期は最短で一年、最長で二年となります。順次重要度の低いものから閲覧が可能になっていきます」

「そうかわかった。またくる」

「はい、マイマスター」

ケイは無幻図書館を出た。ケイが作った世界に戻ってきた。

「一、二年か、まあ、そんなに使うことがあるとは思えないからいいか。他の能力も見えておかない」と

ケイは巨石に目を向ける。

「レッドクロス紅十字！！」

ギンッ!!

紅い光が世界を覆い尽くし破壊した。

「うお!!」

自身の作った世界も人払いの結界もその存在から破壊された。

レッドクロス
紅十字、存在否定の魔眼。魔眼としては最高ランクに位置する。

見たものの存在、そして自身の存在すら破壊し否定し消滅させる。
現在封印により魔眼の能力を下げることににより使用者への否定をなくしている。さっきのはケイが力をコントロールしなかったため起きた事故。

「とりあえずこれでやめておこう」

これ以上やるにはまた結界を張り世界を想像しなければいけないからだ。それに時間もかかるだろう。

「あまりネルから離れるわけにも行かないからな。戻ろう」

ケイは森を抜けて寮へと戻っていった。

第十話 可能性の力（後書き）

引き続きキャラクター募集中です。

どんなキャラクターでも構いません。待ってます。

守護者と呼ばれるケイと同等の力を持った人たちを出すので四人ほど募集します。

守護者以外は何人でもかまいません。

第十一話 学園案内

翌日、ケイはネルより先に起きて外に出ていた。体が鈍らないように訓練をするためだ。誰もいない広場にくる。

「ここならいいかな」

ケイが目を瞑る。

「魔剣開刀」

大量の魔剣が空中に浮かぶ。それはケイの軍。ケイを守る騎士。ケイの剣。その形状は様々で中には剣の形をしていないものもある。魔剣開刀とは力ある武器を扱う力だ。剣の形状をしている必要はない。それが魔の武器であることが魔剣開刀にはいる理由。そのほとんどが魔剣なため魔剣開刀といわれている。

「いい感じだな」

ケイハその魔剣の剣群を操り動かしていく。まるで魔剣の舞踏会のような。しばらく魔剣を動かしてから一本一本消していく。そして刀身が血のように紅く妖しく輝いている刀だけを残した。

魔剣、銘は紅、斬った者の血を吸収し切れ味が増す。その血を操ることも出来る。また斬った者の力をも吸収し己の力とすることできる。円卓の魔剣と呼ばれる十二の魔剣のひとつ。裏切りの姫が持つ紅き魔剣。それを手に取り構える。

「ハ！！」

紅をケイが振るう。紅を一閃するたびに大気が音が風が切断される。

「フッ!!」

美しい剣技、ケイの才能だけでなく戦いの中で磨かれていった洗練された美しさがそこにはあった。剣の舞は続く。

「ふう、これくらいでいいかな」

やめたのはそれから一時間ほど経った時だ。ケイの目には学園が目を覚ましてきたのを感じていた。刀を消す。

「戻るか、ネルが心配するかもしれない」

ケイは寮へと戻る。ケイが戻るとちょうどネルも起きたくらいだった。

「…………どこに行っていたの？」

「腕が鈍らないように訓練をしてきた」

「……………そう」

「それで今日は学園の案内だったか？」

ネルが頷く。二人はそうして大広間へ向かう。大広間のクラスのテーブルに座る。上級生もいるようだ。大広間はたくさんの人でひしめき合っているが不思議と狭さを感じない。そそくさと食事を終えたところでライラが言った。

「さて、そろそろ朝食を食べ終わったな。いや、お前らじゃない、

上級生じゃない。上級生はさっさと出て行け邪魔だ。新入生はここにいろ」

上級生が全員出て行った。ライラの暴言にはなれたもので誰も文句ひとつ言わずに出て行った。

「さて、新入生諸君今日は学園案内だ。専属のメイドつけたからあとはそいつらに案内してもらえ。ちなみに専属のメイドは四年間一緒だから。安心しろ男子、全員美女 or 美少女だから。さらに夜伽の技も完璧だ!!」

なんとも無駄なことだと思ふ女子だが思春期男子には効果覿面だったようです。それぞれメイドが出てきた。ケイたちの前には黒髪の豊かな体つきのメイドが来た。

「はじめまして、メイドのクロアと申します。では、どこへ行きたいですか?」

「……………全部」

「わかりました」

まず、ケイたちがやって来たのは教室の並ぶ広いフロア。

「こちらは全て授業で使う教室となっています。皆様もここで授業を受ける事になります。このフロアとあと上3フロアも同じようになっています。それぞれが一年、二年、三年、四年となっております」

教室が並ぶ、と言っても数は少なく九つ、扉が大きいので中は広いようだ。それぞれの組の教室なのだろう。ここでは簡単な魔法なら使用してもいいらしい。

それから色々なところに案内された。魔導書が保管公開されている図書室、奥は非公開で特別な理由がない場合は立ち入り禁止。といってもケイにとってはあまり意味がない。無幻図書館があるのでこれ以上に貴重な魔導書も閲覧が可能。今は無理だが。それにいずれはこの蔵書も無幻図書館の棚に並ぶことになる。

薬草学で使う草木がある温室。占星術などの特別教科で使用する屋上。今は使われていない地下牢まである。ここには何かの薬などを作る時に使う道具が置いてある。噂では誰も知らない部屋があるとかないとか。魔法具などの倉庫など色々。

「他に行きたいこと質問はありませんか？」

「じゃあ、いいか？」

「はい」

ケイがクロアに聞いた。

「その口調きつくはないか？」

「うん、きつい」

クロアの口調がいきなり変わる。

「いやゝ、いつ切り出そうかと思ってたんだよねゝ。でも、よくわかったね？」

「俺は普通じゃないからな」

「ふゝん、じゃあ、改めてどっか、行きたいところある？」

ネルは首を横に振った。

「じゃあ、どこか暴れても大丈夫なところはあるか？」

「それなら修練場だね〜こっちだよ〜」

クロアについて城の外に出る。つれてこられたのは城の裏手にある何もない場所。

「ここが修練場です」

「魔法による結界が張られてるな。なるほど暴れても大丈夫そうだ」

「ここでは本格的な魔法戦の授業を行うんだよ。じゃあ、これから私が独断と偏見で選んだ場所を回ってみよう!!」

ケイたちが案内されたのは学園長室。

「学園長室、ここに入った生徒は学園長を崇め奉るという伝説があります」

その次に案内されたのは音楽室。

「夜になると誰もいないのに勝手に楽器が演奏し始める音楽室」

その次に案内されたのはトロフィー室。トロフィーがおかれた部屋。

「ここは夜になると騎士の甲冑がさまよい歩くトロフィー室」

さらに次に案内されたのは三階左の廊下。

「ここはなにやら錬金術の秘法の石があるって噂の廊下」

更に次に案内されたのは第二図書館。

「ここは通称魔の図書館。入ると一年は出て来れなくなるって噂」

「ちょっといいか」

「ん？なに？」

「さっきから七不思議をまわってないか」

「はっはゝばれたか」

いままでクロアが案内していたのは学園に伝わる七不思議にかかわりのある場所だ。

「でも、楽しかったでしょ？」

「まあ、少しはな」

「……………」

ネルも頷いた。

「よかったよかった。じゃあ、これからどうします？」

ネルはケイを見る。ケイに決めろと言っているのだ。

「そうだな、俺ももうない。大体は把握できた」

「そっかそっか、じゃあ、部屋に戻りましょうか」

クロアの先導で部屋に戻った。それからは各自自由だったので部屋にでゆっくり過ごした。

第十二話 なぜか始まった決闘

翌日、授業を受けるために教室に行ったネルとケイ。使い魔が人型なのは全員連れてきていた。

「だ〜か〜ら〜!! はずせて言っただろうが!!」

「駄目だ」

教室に入って一番初めに聞こえてきた声はフェンリルとテュール。

「何度も言ってるだろうがそれはずしたらお前俺よりでかくなるだろうが」

とそこまでテュールが言ったところでネルたちに気がついた。

「おお、ネルじゃねえか。同じクラスだったのかよ」

「……………そう」

「相変わらずだな、でそいつがお前の使い魔か……………」

ケイをじつと見て。

「てめえ、決闘だ!!」

「はあ!?!」

ケイがいきなり決闘を吹っかけられたことに驚きの声を上げる。ちようどそこにカイルとリリイも来た。

「何、いきなりどうしたの?」

「……………決闘」

「は？ どうしてそうなったのよ」
「……………」

わからないと首を横に振るネル。ケイを見た途端決闘と言い出したテュールなのだ。理由は本人しかわからない。

「なんじゃ面白そうじゃな」

「ミズチいつの間に来たの！？ さっきまでいなかったじゃん」

いきなりのミズチの出現に驚くカイル。

「さっきじゃ」

「さっきって寮からここまで結構距離あったんだけど」

「それくらい出来なくてどうする。さて、久しぶりじゃなフェンリル。今だ封印されとるとはな」

ミズチがフェンリルに近づいていく。フェンリルよりも小さいミズチだが雰囲気は圧倒的にミズチの方が強い。

「うっせゝ好きで封印されてんじゃないわい！！」

「ふん、それは貴様の自業自得じゃろうて」

「ぐっ」

「ほれ、何も言い返せん。まあ、それはわしでも解くことは無理じやなからな。ラグナレクを待つんじゃない」

「いつだよ」

「さあ？」

フェンリルがミズチに蹴りかかる。ミズチはそれを簡単に避けていく。完全にフェンリルは遊ばれている。

「まあ、まあ、お主の主の決闘じゃぞ見なくてよいのかの？」

教室には既に誰もいない。

「じゃあの」

ミズチが水になる。どうやら水で作っていた分身のようだ。

[illegible]

フェンリルが走って修練場に向かった。

「それで本気でやるのか？」

「当たり前だ！」

ケイとテュールは修練場で向き合っていた。

「決闘の理由はなんだよ」

「お前がオレよりでかいからだ!!」

「は？」

「お前がオレより身長が1mmでかいからだ!!」

そんな小さな差で決闘を挑んだテュール。全員がドン引きである。

「おい」

ケイも呆れている。

「オレはオレよりでかい奴は認めね！」

「面白そうだな」

「「「ライラ学園長!!」」」

ライラがなぜか修煉場に出現した。

「話は聞いた。お前ら思いっきりやれ。殺しても大丈夫だ。うん、ここなら復活するし」

堂々と殺しを薦める教育者の姿がそこにはあった。

「なるほど、ここにかかった魔法で一つとても古いのがあった。なんだと思ってたらそれか」

「そうだ、私が五百年位前にかけた魔法だ。失われし魔法ロストマジックでな。専用の魔具がないと使えないんだ。ちなみにその魔具はもうない」

「なら、思いっきりやってもいいだな!!」

「ああ」

若干一名のみが張り切っている決闘が始まった。

「いくぜえええええ!!」

テュールが槍を構える。対してケイは自然体で立っている。

「地獄に在りし爆炎フレア!!」

テュールが呪文を唱えた瞬間ケイは後ろに跳ぶ。ケイがいた場所に爆発が起きる。爆発の衝撃で砕けた地面が砲弾のようにケイに降り注ぐ。

「アカガネ
赤鋼」

ケイが呟くとケイの右目が紅い輝きを放つ。ケイの右目には砲弾がまるでスローのように見えていた。砲弾をまるで舞っているかのように避けるケイ。かすりもなかった。

『すげえ』

『なんだ、あの使い魔』

『やばすぎる』

見ている生徒から簡単の声が上がる。

（やっぱこれ便利だな。全方位見える。魔力の流れまで見えるから次にどこに魔法が来るかもわかるな）

テュールが呪文を唱える。

「侵略するは炎の槍フレアランス！！」

空中に炎の槍が出現する。テュールはそれを同時に投擲する。

「無駄だ」

ケイはその全てを紙一重で避けて見せた。アカガネ赤鋼によって全て見えているのだ。元から高い身体能力がアオガネ青鋼によって更に強化されているのだ避けられないほうがおかしいとケイは思っていた。

「スネークバーニング！！」

炎の蛇が地を這いケイに迫る。ケイはそれを跳んで避ける。

「集え、煉獄すら焼き尽くす紅蓮の炎エタンセル!!」

テュールの手に巨大な炎球が現れる。そしてそれが上空のケイに放たれる。

「おお、珍しくバカが頭使った」

「フェンリルようやく来たのか。遅かったの」

「誰のせいだよ誰の!!」

空中では身動きが取れないケイ。理由は今だ自身の力の全てを把握しているわけではないため。下手をすれば世界ひとつをとにかく全ての世界を破壊しかねない力を持っているためうかつには動けない。

「魔剣開刀」

紅を出す。それと同時に炎球がケイに衝突する。

「はははは!! デケエ奴は滅んでしまえ!!」

その時燃え盛る炎球に変化がおきた。炎が何かに吸収されていく。見る見るうちに炎球は消え去りあとには真紅の刀を紅を構えたケイがゆつくりと地上に降りてきた。

「ふう、危なかったぞ。お前」

「チッ!! なら、これならどうだ!! 炎を纏い炎術の助けとなせ、フィーヴァー!!」

テュールが炎を纏う。そして槍を構えケイへと疾駆する。

「でりゃあああああ!!!」

高速で槍をくりだすテュール。それをいとも簡単にかわし剣で弾いていくケイ。赤鋼アカガネには次にどう動くことすら見えていた。紅をその位置に動かし槍を弾き炎を吸収していく。徐々にテュールの動きが鈍くなってきた。魔力が切れてきたのと体力が限界なせいだ。対するケイはまったく消耗していない。

「そろそろやめておいたらどうだ？」

「やめるかよおお!!」

「はあゝ仕方ない」

ケイは後ろに跳びテュールから距離をとった。紅を消し、開いた右手を前に持ってくる。

クロガネ
「黒鋼」

黒い光がその手から放たれる。そして炎を全て打ち消していった。

「ぐっは！」

テュールは倒れていた。

「大丈夫か？ 一応手加減はしたが」

「……………返事がないただの屍のようだ」

テュールは大丈夫みたいだ。というか余裕みたいだ。

「平気みたいだな」

「ああ、お前強いな」

「それでも神に選ばれたらしくてな」

「そうか、まあ、1 m mならあまり気にすることじゃないな」

それなら最初から決闘なんかするなと思うケイ。

「だけど、まあ、お前とは戦ってみたかったってのもある」

「そうか」

「さて、終わったところでお前ら授業ださっさと教室に戻れ」

ライラの号令で教室に戻る生徒たち。

「勝ったぞ」

「……………そう」

ネルとケイも教室に戻っていった。

第十三話 世界を喰らうもの

授業を終えたネルとケイは中庭に来ていた。ケイはこちらの魔法を知らなかったので中々新鮮な授業だった。そんなわけで木陰で休んでいる。

「そんなとこでなにしてんの」

リリイがやって来た。

「読書」

ネルが本から目を離さずに答えた。リリイは呆れた顔をする。

「こないいい天気なんだから他のことすればいいのに」

「それは俺も言ったんだが」

ケイが言ってもネルは聞かなかった。

「聞くみみなしだ」

「そうなんだ」

「それでリリイは何か用なのか？」

「特に用はないけどそうね。あなたについて話を聞いてみたいわね。あなた何者？」

「異世界のただの人間じゃ納得してくれないよな」

「そうね。あの性格はあれだけど同年代では名の知れたテュールを圧倒したのがただの人間なら納得は出来ないわね」

「そうだな。ネルには一応話したから、お前にも話しておくか」
「なら、お願い」

リリイが木陰に座る。

「なぜ、座る？」

「こっちの方が話しやすいでしょ」

「まあ、いい。それよりも――」

ケイがナイフをコートから取り出し茂みに投げる。

「うひゃああああ!!」

茂みから悲鳴が上がった。

「酷い!!」

ナイフを持ったカイルが茂みから現れた。

「それはアンタがこっそり盗み聞きしようとしてたからでしょ」

リリイが正論をカイルに言う。何もいえなくなるカイル。

「いい、聞きたいなら聞かせてやるよ」

「ならオレもいいか？」

木の上に立っているテュールが言った。

「構わない」

全員が木陰に座った。正直狭いと思うケイ。

「さて、知っての通り俺は異世界の人間だ。俺の元いた世界にも一般人が知らないだけで魔法や異能の力が存在していた。俺はある組織に所属していた。その組織には魔法や異能の力の使い手が集まっていた。その組織で俺は27人の執行者の一人としていろんなことをした人もたくさん殺した。そして任務の途中でネルに呼ばれて俺はここに来たんだ」

ネルに話したこととまったく同じ事を一気に話し終えたケイ。

「なるほど、通りでアレだけ強いわけか。くぐってきた修羅場がちがうってわけか」

テュールが納得したように言った。

「そうでもない。お前もそれなりだったぞ。それに俺は今とんでもない存在だしな」

「とんでもない？」

「気にするな」

話を打ち切るケイ。

「まあ、いいわ。それで、アナタどうするの？」

「何がだ？」

「元の世界に帰るとかないの？」

リリイが言った。もったもな話だ。普通人間が召喚されたら元の世界に戻りたいというのが本当だろう。だが、ケイにはそんな感じが感じられない。

「別に元の世界に未練なんてない。組織からはもともと抜けるつも

りだったんだ。目的を果たしたからな」

「……………聞いてない」

ネルが本から顔を上げていった。

「ああ、言ってなかったな。悪いネル」

「……………いい」

「言ったとおり俺には元の世界の未練なんてないな。だから——！？」

ケイがいきなり立ち上がった。

「なに、どうかしたの？」

「いや、これはいったい？　しかも、これは——少し出かけてくる」

「ちょっと——！」

ケイは誰も止める間もなく虚空へと消え去った。

「なんなのよ」

「……………」

ケイが来たのはゼロ領域と呼ばれる世界と世界の狭間にある空間。1と0が同時に存在する場。質量が無であり有である場。何もなくて全てがある場。

「あの感じはここから……………な！？」

そこには巨大な何かがいた。赤鋼アカガネを持ってしてもそれは巨大な顔。

世界を喰らう顔としてしか認識できない。

「なんだ。これは！」

明らかに異常だった。ケイ自身の存在も異常だがアレにはそれ以上の異常を感じる。

「……………放っておくわけにはいかないな」

「そこのお前〜！」

「!？」

かかるはずのない声が後ろからかかった。ケイが振り返ったところにはタバコをくわえた中年の男が立っていた。

「誰だ!!」

「そう凄むなよ俺たちや同類だろ」

「なに？」

「神に選ばされた人間。可能性を受け取った人間のことさ」

ケイは召喚される前に聞いた神の言葉を思い出していた。どうやらケイだけではなかったようだ。

「俺の名前はまあ、そうだなカインとでも呼んでくれ、セフンオブセブンス始まりの七世界の第二世界担当だ」

セフンオブセブンス 始まりの七世界、全ての世界の原型。この七つの世界より無数の世界、平行世界が生まれている。世界の親とも言える世界。神が作り出した七つの世界。カインはその第二世界担当。全ての世界には同じように人が住んでいるが世界によりそのありようが異なる。

「ケイだ」

「よし、まあ、色々聞きたいと思うがまずはアレを止めてからだ」

顔を指差すカイン。

「まあ、初めてだろうけど大丈夫だろう。適当に倒せ」

「いいのか？」

「じゃないとお前の担当世界が消えるだけだ」

「……………やってやるさ」

ネルたちを消させるわけには行かないとケイは踏み出す。

顔はケイの接近に気がついたのかケイを見てくる。そしてその口から大口径の光を放ってきた。

「っ！
クロガネ
黒鋼！」

黒と白の光がぶつかり白は黒に飲み込まれ消えた。

「どうやら、そんなに強くないようだな……魔剣開刀」

数ある魔剣の中から一つを選びその手に具現化させる。魔剣ヴィミラニエ。形状は弓。だが持つ箇所はリング状になっておりそれを中心に鳥の翼のように展開した左右対称の双剣でもある。放つのは矢ではなく使用者のエネルギーであり弦は弓状態の時のみ出現する。円卓の魔剣のひとつ。弦に手をかけ引く。そこに光り輝く矢が出現する。

「フッ！！」

それを放つ。それは一直線に顔に飛んでいき顔に直撃した。貫かれた顔は粉々に砕け散った。

「おお、上出来上出来」

「それであれば何だ？」

他にいないことを確認してケイはカインに聞いた。

「あれは世界を喰らうものだ」

世界を喰らうもの。その名の通り世界を喰らうもの。いつ誕生したのかは不明だがいつの頃からか誕生し世界を喰らい始める。既に平行世界のほとんどが喰らいつくされており残るは始まりの七世界のみとなっている。世界を喰らうものには階級がある。それぞれ歩兵、城、僧侶、騎士、女王、王と呼ばれる。世界を喰らうごとに階級が上がっていく。

「世界を喰らうもの……」

「ああ、少なくとも俺たちはそう呼んでる。でさっきのは歩兵だ」

「俺たち？」

つまりは組織であるということ。

「ああ、俺のほかにもあと五人いる」

「どういう組織だ？」

「守護者だ」

「守護者？」

「ああ、世界を喰らうものから始まりの七世界を守るために神が選び可能性の力、世界に散らばった欠片の力を与えた七人のことだ」

守護者、神が異世界中に散らばった欠片の力、可能性の力を与えられた存在。エヘクトル世界を喰らうものから、セブンオブセブンス始まりの七世界を守る役割を与えられた存在。人智を超えた力を持ち一人が始まりの七世界の一つを担当する。全ての時代で七人の守護者が選ばれる。

「つまり……俺もその守護者なのか？」

カインもいれても六人。つまりあと一人いるということだ。

「そうだぜ。欠番だっただがようやくお前が来たんだ」

笑いながらカインはケイの肩を叩く。

「しかし、神は何も言わなかったぞ」

「ああ、俺たちの時も何も言っていなかった。でだ、異質な気配を感じて移動してみるとこの顔がいたわけだ。そしてそれと戦う男もな」

つまりはケイと同じ状況だったということ。

「んで、そいつに色々教えられたわけさ」

「なるほどな」

しかし、それなら最初から神が教えておいてもいいと思うケイなのであった。

「それで、守護者になったらなにかあるのか？」

「そうだな。エヘクトル世界を喰らうものから世界を守る以外なにもない。奴らが現れるまでは担当世界で自由にしていいたよ」

「そうか」

「じゃあ、これからよろしくな」

カインが手を差し出す。

「……………」

ケイは少し躊躇ってからその手を握り返した。

第十三話 世界を喰らうもの（後書き）

まだまだ、キャラ募集中です。

第十四話 無幻図書館の蔵書

ゼロ領域から戻ってきてからケイは事情を誰にも話さずに一日を過ごした。巻き込む可能性はなかったがなんとなく知られたくなかったからである。

その翌日、授業が終わった放課後。

（マスター）

ケイの頭の中で声が響く。声の主はインデックスであった。

（どうしたインデックス？）

（いえ、たいしたことではないのですが通常の蔵書が早く整理が出来たので閲覧が可能になりました）

（そうか）

一度世界の外に出たからである。ゼロ領域では普通では起こらないことが起きる。それが原因である。

（しかし、この世界の蔵書と魔導書などの力を持った書物は閲覧は今できません）

（それはいい。わかった行ってみるとする）

（はい、お待ちしております。マイマスター）

それきりインデックスの声は聞こえなくなった。

「さてと、そうだな。ネルでも誘っていつてみるか。読書が好きなネルなら喜ぶだろう」

そう言って部屋を出てネルのところへ行くケイ。扉をノックして
ネルが許可したので部屋に入る。

「ネル、これから予定はあるか？」

首を横に振るネル。

「……それがどうかした？」

「少し良いところに案内してやろうと思ってな」

「……良いところ？」

「来ればわかる」

それだけ言って部屋を出る。とりあえずエントランスから向かう。
う。ネルも出てくる。

「さてと、古の叡智を納めし神々の創りし無幻の図書館。盟約に従
い道を開かん」

以前と同じように黒き空間が広がりそして扉が開いた。ケイとネ
ルは無幻図書館へと足を踏み入れた。以前より混沌としている。ど
うやら世界の知識の整理とやらの途中のようだ。奥からインデック
スが出てきた。

「ようこそ無幻図書館へ。ここには古今東西ありとあらゆる蔵書、
知識、この世の叡智が保管されています。何の変哲のないライトノ
ベルから強大な力を持つ魔導書、神の書まで選り取り見取りあなた
のニーズにお応えします」

そして決まり文句を言う。ネルは驚きできよろきよろと周りを見

渡している。

「……………ここはどこ？」

「ここは無幻図書館だ」

「……………無幻図書館？」

それにインデックスが答える。

「はい、古今東西のあらゆる世界のありとあらゆる知識が収められた図書館です」

「……………よんでいいの？」

「ああ、だが、魔導書の類は読めないから普通の物語とかだとかしか読めないと思うけどな」

「……………十分」

「インデックスなにか選んでやってくれ」

「はい」

インデックスが本棚群の中に消えて行く。そして大量の様々な種類の本を抱えてもってきた。

「私があなたにあうと思われる本を厳選しておきました」

「……………ありがとう」

ネルが一冊目に手をかける。

「……………わかる？」

「どうした？」

「……………見たことない本。文字も違うのにわかる」

「そういえばそうだな」

ケイがインデックスに説明を求める。ケイだけならまだしもネルにまでフィードバックが起きているのはどういことなのかを聞いた。

「はい、ここは図書館です。図書館は知識を広める場所です。そこで文字が読めなければ意味がありません。ゆえにこの図書館に入っている間はあるとあらゆる言語が理解でき読めるようになります。ただし、この図書館内だけです。外に出ればマスター以外には効果はありません」

納得したネルは読書の世界へと没頭していった。ケイは図書館の中を歩いていく。様々な時代の本がおいてある。

「本当に色々あるな。ん？ これは……？」

一冊の本に目が留まる。漆黒の表紙の本だ。タイトルにはケイの本名が書かれていた。

「これは……？」

アカシックレコード

「それは運命の記録本です」

急に背後に現れたインデックスが言う。

アカシックレコード

「運命の記録本……つまり、これは俺の記録か」

アカシックレコード

運命の記録本。全てのものが一冊は持っているという本。それには未来、現在、過去、その全てが書かれている。人が持っている運命の記録本を読めばその人間の未来も過去も今も知ることができ自由に操ることが出来る。また、執筆者ライターと呼ばれる選ばれた特別な人間なら運命の記録本を改変することも出来る。改変すれば過去も未

来も今すらも自由自在である。また、アカシックレコード運命の記録本のページを破れば寿命を削ることになるがそのページに書かれていた内容が起ころなくなる。現在この執筆者は存在しない。ライター

「はい、それにはあなたの人生が描かれています。お読みになりますか？」

「いや、いい。人生は知らないほうがいい」

「そうですか。では、それは棚に戻しておきます。この図書館にはアカシックレコード全ての運命の記録本が収められ常に書き加えられています。閲覧には対価を伴うためご利用は計画的に」

「わかった」

インデックスがケイのアカシックレコード運命の記録本を戻しに行ったのを見送りケイは再び図書館を歩く。

「ふう、広いな」

歩いて歩いても壁には到達しない。

「さすが世界の知識を詰め込んだ図書館だけある。時間はっ」と

ケイが時計を見ると三時間はたっていた。

「戻るとしよう」

戻るとまだネルは本を読んでいた。

「ネル、そろそろ戻らないか？　だいぶ時間経ったみたいだし」

その時ネルのおなかになる。顔を赤くしてネルは言った。

「……………食事の時間でもあるから」

「ふっ、じゃあ、インデックスまた来る」

「はい、次のおこしを楽しみにしております」

ケイとネルは無幻図書館から寮の部屋に戻ってきた。

「で、どうだった？」

「……………興味深い。また、行っても？」

「ああ、いつでもいいぞ」

「……………ありがとう」

再びネルのおなかになる。うつむいて顔を真っ赤にするネル。

「……………」

「じゃあ、食事に行くか」

「……………うん」

食堂へと向かった。

第十五話 破魔

学園が休日の日。この日は学園の生徒は街へ行ったりする。それはケイやネルも例外ではない。ケイとネルは現在リリイやカイルを伴ってシーラの街へと来ていた。ランド、ミズチも来ている。

「ここがシーラの街か」

「……………そう」

「この浮遊大陸で一番大きな街よ」

リリイが言う。

石造りで段状に広がっている街。街は白で統一されている。街の上に行くほど土地が高くなっていて土地の高いところには身分の高い者が住んでいる。街の真ん中を突っ切る通りにはたくさんの店が面している。人が一番集まり人通りが多い場所である。裏路地もきちんと整備されてるため怪しげな店はない。

「ほう、すごいなマスター。ふむ、わらわがあがめられていた時代から考えたらえらいちがいじゃのお。お、なんじゃあれわ!？」

ミズチは好奇心旺盛な子供のようにキョロキョロと面白いものが見つかっただけすぐにそこに走って行く。

「って、待てよ。僕がマスターだぞ。僕に従えよ」

「ならばわらわにお主が男だと認めさせよと言っとなるじゃろ」

カイルはみっともなくミズチを追った市場の中へと消えて行った。

「まったくあのバカ」

「大丈夫なのか？」

カイルたちが消えた方を見ながらケイは言った。

「どうせいつも通りだし。ミズチがいるんだから大丈夫よ」

リリイが言った。それならとケイも納得する。

「それでどこか回る予定でもあるの？ 勝手についてきたからなんとも言えないけど」

リリイが言う。ケイたちが出かけようとしているときに丁度会ったのでついてくることになったのだ。

「リリイ様、私は予定通り買い物をしてきます」

「ああ。そっだったわね、頼んだわ」

ランドが市場のほうに向かい人込みに消えた。

「さてと、じゃあ、何もないなら私も自由に行動させてもらうわよ」

「……………別に構わない」

「じゃあ、行くわ。終わったらその噴水で集合しましょ」

「ああ、わかった」

リリイが反対側の通りへと向かっていく。

「さてと、じゃあ、とりあえず武器屋とかに案内してもらえるか？」

「……………どうして？」

「武器は持っているがいちいち取り出すのもどうかと思うしそれに

あまり能力は人に見せたくはない」

「……………そう。こっち」

ネルの案内で武器屋へと向かう。中層の表通りの端にある武器屋へと来た。中へと入る。所狭しと武器が置かれている。

「いらっしやい。どんな武器をお探しで？」

中から店主が出てきた。

「……………剣だな」

「剣ならその棚にいったいありやすぜ。自由に見てくたせえ」
「ああ」

ケイが棚に近づいて剣を取る。

「……………どれもこれも同じような感じだな。あまり装飾がないのがい
いと思うが……………ん？」

そこでこの世界では珍しいものを見つけた。

「これは……………」

それは鞘に収められた刀。その刀を見ていることに気がついた店主がやってくる。

「ああ、お客さんそいつはやめたほうがいいですぜ」

「どうしてだ？」

「東方からの輸入品なんすけど誰にも抜けないんすよ」

「そうなのか？」

ケイは赤鋼^{アカガネ}を使い刀を解析する。何もおかしいところはない。抜けないという要素はどこにもないに見える。表面的には。その裏側に何かがあるようだった。精霊に近いものだ。

「これをもらおう」

「ええ！？ まあ、お客さんがいいのなら。金貨200枚で売りましょう」

「俺が払うわけじゃないからな。ネル」

黙ってネルが前にでる。

「……………誰にも抜けないのならもう少し安くするべき金貨50枚」

いきなり四分の一の値下げを要求するネル。

「そりゃ困るぜ。これでもだいぶ安くしてるんだ。抜けないとはいえ東方の上物だぜ。150枚」

「……50枚」

「125枚」

「……50」

ネルは主張を変えない。これでは終わらないと思ったケイが話に割り込む。

「50で売ってくれたら他のも買おう。そこの金貨50枚でナイフを買いえるだけな」

これで金貨100枚。

「うーん……………なら、それで手を打ちましょう」

「ネルもこれでいいか？」

「……………あなたがいいなら」

「なら、これで」

刀とナイフを数本購入してケイとネルは武器屋をあとにした。

「……………それでなんでその刀を買ったの？ 誰も抜けないと噂になってる」

「そうみたいだな。だけど俺の予測が正しければこれは抜ける。それも特別な武器だこれは」

ケイがキョロキョロと何かを探す。

「……………何を探してるの？」

「どこか座れるところはないかと思ってな」

「……………こっち」

ネルの案内でカフェへと来る。そこの一席に座る。

「……………それでどうするの？」

「ちょっと待ってろ」

ケイは刀を持ったまま目を閉じた。

ケイが目を開けると真っ黒な空間に一人佇んでいた。

「ずいぶん暗いな。いや、闇か……………」

ケイはとりあえずまっすぐ進むことにする。赤鋼アカガネを発動してみるとどうやら城と古風で和風な街が広がっているようだった。昔は栄えていたのだろうがその面影は見えない。寂れている。

「さて、いるとしたら城かな」

ケイは荘厳な天守閣を有していたであろう寂れた城へと向かった。

「ここだな」

城の中天守閣の中に入る。

「……………」

中もやはり暗い闇だ。その中でうずくまりっている者が一人。

「お前が刀に宿っていた精霊か？」
「誰!？」

そこには手のひらサイズの黒髪の少女がいた。髪には二つの鈴飾りをつけて和風の服を着ている。

「お前の新しい持ち主だ」

「ここに誰かが来たのは久しぶりなのね」

少女がケイの目の高さまで浮かび上がって応えた。相変わらず暗いため赤鋼アカガネがなければ見えないだろう。

「そうなのか？」

「そうね。みんなみんな私を使おうとしなかったのね」
「そうか、刀が抜けないこととこの世界が暗いのはお前が心を閉ざしていたからか」

刀は人や物、魔を斬る事を目的に作られた。人に使われ人や物、魔を斬り続けるのが刀の存在意義。しかし、それが出来ないのでは存在意義が消えることも同じ。だからこそ使ってくれる人間が現れるまで誰にも抜けないようにしていた。

「そうね。全てを閉ざしたからこの世界は暗いのね。お父さんが作ってくれたときは光が溢れて桜が咲き乱れてとっても綺麗な場所だったのね。だけど、もう、長い間見てないのね」

「また、見れるさ。俺はお前を使うためにここに来たんだから」

「本当？ 本当に私を使ってくれるの？」

「ああ」

その言葉を聞いた少女が泣き出す。

「お、おい!？」

「その言葉を永い間待っていたの」

「そうか」

少女が涙を拭う。そしてケイを見据える。

「私の名前は破魔^{はま}」

「俺の名前はケイだ。これからよろしく頼む」

「うん、こちらこそ幾久しく」

世界に光が灯る。桜咲き乱れ光溢れる町並みがその姿を取り戻した。

ケイが目を開いた。

「……………大丈夫？」

「ああ、問題ない。これで大丈夫だ」

ケイが刀——破魔の柄に手をかけゆっくりと抜く。誰にも抜けないという噂が嘘のようにあっさりと破魔はその美しい刀身さらけ出した。

「いい刀だ」

破魔が当たり前なのと言うように煌めく。

「……………本当に抜けた」

珍しくネルが目を見開いて驚いていた。

「……………どうして？」

ケイが刀を鞘に戻してネルに向き直って答えた。

「この刀、破魔って言うんだがな精霊が宿っていたんだ」

「……………精霊？」

「ああ、刀精と言ってな刀匠がありったけの思いを込めて刀を作り上げた時に宿る一種の精霊みたいなものだ」

刀精は主と認めた者に力を貸す精霊である。能力は刀匠が込めた思いによって異なる。破魔はその名の通り魔を破る力を持っている。

「…………聞いたことない」

「まあ、この世界では刀自体珍しいからな。知らなくて当然だ」

そう言うケイだが無幻図書館で検索をかけフィードバックしただけであるが。

「で、刀はこちらでは珍しいから観賞用として売られることになった。破魔は魔を斬るために作られた刀だからなそれが気に入らなかったらしいんだ」

「……………そう」

ネルがそこまで話を聞いて納得したように頷いた。理解したようだ。

「わかったか？　つまり破魔は誰かに使って欲しかったんだ。だから、使う気のない人間には抜けなかったんだ」

そのため武器として使用しようとしたケイには抜けたのである。

「……………よくわかった」

「そうか。さて、目的は済んだから。街をぶらついてみようかな。ネルはどうだ？」

「……………」

ネルが肯定を表すように首を縦に振り頷いた。

「じゃあ、行くか」

二人は立ち上がり人混みの中を歩き出した。

第十六話 錬金術師の小さな工房

ケイとネルは街の中を歩いていた。シーラの街は浮遊大陸の中でもかなり大きな街なので人あるいて回るだけでもかなりの時間を要する。

目的もなく二人が歩いていると街の中層と下層の間にある小さな寂れた店が目に入った。看板には錬金術工房と書かれていた。

「……………錬金術工房? ……」

「珍しいのか?」

ネルが頷く。

「……………この国には錬金術師は四人しかない」

「それなら確かに珍しいな。だけど何で四人しかないんだ?」

ケイの中には錬金術は魔法の一種になっているのではと予想していたので四人しかないのは予想外だった。

「……………よく知らない。ただ、錬金術は科学らしい」

つまりは魔法の発達したこの国では科学者である錬金術師はいないということ。しかし、考えてみればこの世界では魔法が科学のよなもの、錬金術もある意味魔法と呼べるかもしれない。

「なるほど、魔法が発達した国には科学者はいないか。なら、面白そうだな入ってみるか」

ケイが扉に手をかけ扉を開ける。中は少し埃っぽいがしっかりと工房らしい雰囲気がある。奥のテーブルには試験管やらなんやらが置かれていた、

「確かにこれは科学だな」

店の中に入ると店のカウンターの奥で寝ている少女が起きている。青を基調としたワンピースのような服を着た灰に近い黒髪の少女だ。なんともこの工房の主なのだろう。しかし、そうとは思えない。どこかとても妙な感じがしている。

「むあ……………!？」

少女が起きてケイたちが入ってきたことに気がついた。グレーブルの瞳が見開かれる。

「お、お客さんですか!？」

「まあ、そんなものだろうな」

「い、今すぐ、準備をおお。わ、ひゃあああ!！」

少女がカウンターに引っ掛かって倒れた。

「おい、大丈夫か？」

「はうう、だ、たいしょうふでふ」

鼻を打ったようで鼻を押さえながら答える。立ち上がり身だしなみを整える。

「えっとトルマリナ・ニエフリートです。みんなトトって呼ぶけど」

「俺はケイ」

「……………ネル」

ケイが工房の中を見回す。

「全部お前のか？」

「えっと、ほとんどお師匠様のです」

「なるほど」

それならこの設備も納得できる。こんな少女に集められるとは思っていなかったケイ。

「しかし、それにしては寂れてないか？」

「……………」

急にうつむいて泣き出してしまうトト。墓穴を掘ってまずいといった顔をするケイ。ネルは無表情だがどこか攻めるようにケイが見ている。

「うう、師匠がいつもの癖で行ったから、がんばって店を何とかしようとしてけどヒック。わたし、ダメダメだからッヒック、こんなことお客さんに言っても意味ないのにやっぱりわたしダメだ。うう、なんでわたしこんなにダメなんだろう。ううう」

「あゝ、ネル。ちょっと……………」

ネルは知らん顔で無視している。ケイと顔をあわせようとしてもしない。手伝う気はないということだ。

「ちょっと待てネル。俺泣き出した子供の扱いなんて知らねえぞ！どうすりゃいいんだよ！？」

おろおろしているケイという珍しい光景数分間続けられた。

・
・
・

「あ、あの、すみません」

トトは十分後泣き止んだ。そして、そのことを自覚して羞恥で赤くなっている。ちなみに泣き止むまでケイはおろおろしていただけである。ここにリリイやカイルたちがいなかったことがせめてもの救いである。

「あ、ああ、いいよ」

ケイはどこか疲れた様子だ。ネルは今までと同じ無表情だがいいものを見たといった風な感じがする。

「えっとそれでこの店では何が出来るんだ？」

「薬を作ったり、機械を作ったり、爆弾を作ったり、色々します。しかも全部魔法を使わないで作るんですよ」

「へー、そうなんだ。じゃあ、薬を作ってもらおうかな」

別に今薬が必要なわけではないがこの流れだと何か頼まなければいけない気がするためだ。

「はい！ 頑張って作ります！！」

張り切って材料を取りにいくトト。

「ああー！？」

「どうした？」

「すみません。材料きらしてたみたいで……すぐに買ってきます！」
慌てて外に出て行こうとするトト。

「ああ、それなら俺もついて行っていいか？ 興味があるんだ」

「いいですけど。ただの買い物ですよ？」

「いいよ。こっちでの買い物に興味があるんだよ」
「ならどうぞ」

トトが出て行くのにケイもついて行く。ネルは断って店に残るこ
とになった。

向かったのは表通りの薬草屋だ。店にはたくさんの薬草が並べら
れている。

「お、トトちゃんじゃねーか。どうした？」

奥から出てきた薬草屋の店主が言った。そこでケイに気がついた。

「ん？ かつこいい兄ちゃんだな。はは〜んなるほど

薬草屋店主が何かに気がついたようにしきりに頷く。

「デートか。トトちゃんもそういう年頃かい。おじちゃんうれしい
ね〜！」

笑いながらいう薬草屋店主。激しく誤解している。

「ち、違いますよー！！」

耳まで真っ赤にして否定するトト。

「きよ、今日は薬の調合に必要な薬草を買いに来たんです！」

「何だ、つまらねえな。トトちゃんもそういうの気にしたらどうだい？ 錬金術なんかにつつつを抜かしてないでさあ」

「悪いですけど止める気はないよ」

「まあ、そうだなほら、今日はサービスしといたぜ」

大きな紙袋にはたくさんの種類の薬草が入っていた。

「いつもいつもすみません」

「いいって、まだあの人帰って来てないんだろ？ 今月も厳しいって言ってたからな」

「すみません」

トトがお金を払い紙袋を受け取る。トトには紙袋は大きく抱える
と顔が半分隠れてしまう。薬草だけなので軽いのでまだいいが。

「おや、トトちゃんじゃないか。来てたんかい」

薬草屋の奥から恰幅のいい主婦が現れた。

「こんにちはおばさん」

「久しぶりだねえ、元気してたかい？ それにしても痩せたねえ。
ちゃんと食べてるかい？ ほらこれ持って行きな」

紙袋にたくさんの野菜が入れられる。

「いつもありがとうございます」

トトとケイは薬草屋をあとした。

「俺が持つよ」

ケイがトトが持っていた紙袋を取って持つ。

「あ、良いですよ。自分で持てますから」

「いいからいいから」

正直な話危なっかしいと言うのが理由だ。紙袋抱えてふらふら歩いていたのでケイが持つことにした。

「あの、ありがとうございます」

「ああ」

ケイとトトは工房に向かって歩いていった。歩いているとトトはよく街の人に声をかけられていた。錬金術師と言うこともあり有名みたいだ。だが、どちらかと言えば憐れみや同情が多かった。トトは師匠に苦勞させられているらしい。

店の前にある広場でトトの足が止まった。

「どうした？」

ケイが聞くがトトは答えない。恐怖で目を見開き震えている。ケイがその視線を辿ると如何にもチンピラで借金取りといった風情の三人組がケイたちに向かって来ていた。

「よお、トトさんよお。金返してくんないかなあ！」

男の一人が言う。こいつがリーダーだろう。

「あ、あの、それは、まだ期限が、ある、はず、じゃ。そ、それにまだ、師匠、帰ってきてませんし。第一、お金ありません」

「そのためのお前だろうが！！　まあ、金がねえなら。体で払ってもらおうかなあ！！」

リーダーがナイフを取り出し振り上げ振り下ろす。反射的に目を瞑るトト。しかし、いつまで経っても痛みはこない。トトがおずおずと目をあけると男の腕をケイが掴んで止めていた。

「えっ？」

驚きで目を見開くトト。

「女の子に手をあげたらダメだろ」

「な、何だお前は邪魔するのか！！」

「まあな」

ケイが更に力を込めて相手の腕を握りつぶした。ボギンと骨の折れる小気味のいい音が響く。

「ぎゃあああああ！！」

見るとよほどいい折れ方をしたのか肉から骨が皮膚を貫通して外に出ている。

「う、腕があ！！」

「悪い。少し力を入れすぎたようだ」

「ば、化物め!! 三人でやんぞ!!」

三人が一斉にナイフや魔法で攻撃して来るがケイは魔法以外を完全に避けていた。魔法は被害が出ないように受け止めている。

「ちょっとこれ持っててくれ」

「は、はい!？」

ケイが薬草の紙袋をトトに一旦返した。

「さて、すぐ終わる」

ケイは手加減して拳を振るった。

・
・
・
「お、覚えてろよ!!」

完全に悪役のセリフを吐き捨てて三人組は一目散に逃げ出した。

「す、すごい……」

「これくらい軽い。大丈夫か？」

ケイが一応トトが怪我してないか見ようとトトに近付いた。その時殺気を感じて飛び退いた。一瞬前までケイの頭のあった位置を魔力の弾丸が通り過ぎた。

「そいつから離れやがれゴミムシ野郎」

ケイが弾丸が放たれた方向を見ると帽子にマント、手袋を身につ

けた男がいた。マントの隙間から覗く男の体にはいたる所にピアスが付けられている。そして男の体の大半は機械であった。

「ど、ドットさん!？」

どうやらトトの知り合いであるようだが穏やかな雰囲気じゃない。ケイは破魔へと手をかける。

「誰だお前」

「クズ野郎に名乗る名はねえが名乗ってやるよ。てめえを殺す相手だ。しっかりとその腐った脳みそに刻むんだな。オレはドットⅡキーⅡラスオン。さっさとトトから離れるよ」

どうやら何か勘違いしている様子だ。

「ちょっとドットさん!!」

「へっぽこは下がってろ!!」

「だ、誰がへっぽこですか!!」

「まあ、下がってた方がいいのは認める」

「何言ってるんだよ豚野郎が!! 細切れにして家畜の餌にしてやんよ!!」

しかも、何を言っても誤解が解けるとは思えない。案の定ドットがケイへと襲いかかる。それでもケイは嬉しそうに破魔を抜いた。

第十六話 錬金術師の小さな工房（後書き）

今回 mission No. 149 様よりいただいたキャラクター
ドットキーラスオン登場です。 mission No. 14
9 様キャラクターを応募いただきありがとうございます。
詳細設定は追々書く予定です。

第十七話 賞金稼ぎ

ドットはケイに銃を向け魔力弾を放つ。純粹な魔力の弾丸が高速でケイに迫る。ケイは避けようとしなない。ただ一閃破魔を振るった。魔力の弾丸は破魔によって切り裂かれた。

「やるじゃねえか。あいつらも本氣ってことかよ!!」

「ちよつとドットさん止めてください!!」

トトが止めようとする。

「へっぽこ、あいつを庇うんじゃねえ。安心しろあいつらの用心棒だろうが追い返してやるよ!!」

「だから違いますよ!!」

ドットはトトの言葉を無視してケイに魔力弾を放っていた。ケイはそれを破魔で切り裂いたり避けたりする。一発もかすらない。

「チッ! やるな。ならこれならどうだ!」

左腕からガトリング砲が出てきた。

「死ねや!!!!」

ガトリング砲が火を噴く。常識的に考えてこれを完全に避けることは出来ない。

「はっ!!」

ケイはその場で跳躍する。

「かかったな」

ドットが左手を向ける。収納されていたミサイルが発射された。

「マジかよ！」

空中で受け身はとれない。ケイは破魔を振り上げる。そしてミサイルが爆発した。

「はははは！！　これで――」

「あゝごほごほ」

ドットの後ろにケイが着地する。

「たくよ、街の中でそんなの使うなよ」

「やるな。なら、これでどうだ糞野郎！！」

右手からナイフが飛び出す。ドットがケイに切りかかる。ケイは破魔で受け止める。鉄と鉄のぶつかる音が響く。唾競り合いになる。

「近接も出来るのか」

「当たり前だ。オレは天才だからなあ！！」

ケイが押し負けていた。青鋼アオガネで強化されていても押し負ける。赤鋼アカガネで見ればピアスが空気中の魔力を吸収していた。それにその魔力で体を強化している。さらに大部分が機械のため通常の人間よりも力は強い。

「チッ!!」

無理矢理ドットを払いケイが下がる。ドットは追撃するため疾駆する。

攻防は続く。剣戟ではどちらも傷を負わせることが出来ない。

「やるなてめえ。なら、奥の手って奴を見せてやるよ」

ドットがナイフをしまう。そして右手をケイに向ける。

「魔力が集まっているな。何をする気だ」

ケイが身構える。

「これでてめえも終わりだ!」

ドットの体中につけられたピアスが弾け飛び空中で静止する。それはゆっくりと円を描くようにドットの周りを回る。

「行け!!」

ゆっくりと円を描いていたピアスが一斉にケイへと高速で飛翔する。そしてそれら全てが魔力を放出した。それは弾丸のごとくケイへと殺到した。あらゆる方向から。

「くっ!?!」

「おせええええ!!」

気づいた時にはもう何もかもが遅かった。高密度の魔力は弾丸と

成りてケイに直撃した。砂煙が巻きあがりケイと覆い隠す。しかし、直撃したのだ生きてはいないだろう。

「ケイさん！」

トトはその場に泣き崩れた。ケイがどうなったかを悟って。

「おいおい、勝手に殺すなよ」

しかし、予想に反してケイの声が砂煙の中から響いた。

「なに！？ てめえ、何で生きてやがる！！」

「お前が奥の手を出したんだ。俺も出さないとフェアじゃないだろ」

衝撃が生まれ砂煙が吹き飛ぶ。そこには無傷のケイとケイを守るように大量の剣群が浮遊していた。魔剣、ケイの剣にして盾。

「てめえ、あの一瞬でどうやってそんなに剣を出しやがった。それにてめえ何者だ」

「それは終わってから話してやるよ」

「そうかよ。なら、一生聞くことはできねえな。てめえはここで死ぬんだからよ！！」

再びピアスが動き始める。

「それはもう見た」

ケイが魔剣を二本掴み高速で投げる。それはピアスに辺りピアスが爆発する。

「ぐあー!!」

ドットが痛みの声を上げる。その隙をケイは逃さなかった。ただ一直線にドットへと疾駆する。ドットの首に破魔を突きつける。それと同時にピアスがケイを包囲する。

「……………」

「……………」

膠着。どちらも動けない。ケイが動けばその瞬間にピアスから魔力が放たれ。ドットが動けば一瞬のうちにドットの首が飛ぶ。ゆえにどちらも動けぬ膠着状態になった。

「いた!! こっちですよ。兄貴!!」

その時、先程ケイが追い払った三人組とマッチョな男が出てきた。

「やいやい、その黒コート。さっきはよくもやってくれたな。このグレートな兄貴がお前をけちよんけちよんにしてやるぜ」

「また、お前らかよ。今、忙しいあとにしてくれ」

「なんだと! ん? おいおい、ドットの野郎まで一緒じゃねえか。好都合だ、二人まとめてやっちまうぞ!! さあ、兄貴どうぞ」

ドットがその一言を聞いてケイに聞く。

「あ? おいてめえ、こいつらの用心棒じゃねえのか?」

「いつ俺がそのバカ三人組の用心棒だと言った」

「……………」

ドットが押し黙る。そして口を開いた。

「もしかしてオレ物凄い勘違いしてた？」

今更ながらに気がついたドット。

「ああ」

「……………そうか、わかった。とりあえずこの勝負は保留にしておこう」

「そうだな」

「とりあえずこの屑共を黙らしてからだ」

ドットとケイは互いに身を引く。そしてケイとドットは三人組と兄貴に武器を振り上げた。

・
・
・
「畜生覚えてろよー！ー！！！！」

小物の捨て台詞をはいて三人組＋兄貴は逃げていった。

「で、お前はなんなんだ」

「俺は――」

「もうドットさん！！！」

ケイが答えようとしたときトトが割り込んできた。

「おう、へっぽこ無事か」

「無事かじゃないですよ！！ 何やってるんですか！！！！」

トトは怒っていた。もうぶんすか怒っていた。端から見たら物凄

い可愛いし微笑ましいのだが本人はいたって真面目に怒っていた。

「何ってお前がいつものように襲われてると思ったから助けただけだ」

「ケイさんは逆に助けてくれたんですよ!! 勘違いも甚だしいですよ!!!」

「なんだよ、それなら早く言えよな。てか、そんな怪しい黒コート着てんのが悪いんだよ。オレは悪くねえ」

ドットの言葉で更に怒るトト。それをケイがなだめる。

「はあ、すみませんケイさん」

「いいよ。それよりこの男は」

「えっと師匠の知り合いでわたしも時々会っては助けられたりします。体は師匠が作ったそうなんですよ」

ケイは感心した。あれほどの機構を作れる人間がいたことに。

「わたしはまだダメダメでそんなのは作れませんけど」

「大丈夫だろ」

ぽんとトトの頭に手を置くケイ。

「諦めなければいつか夢は叶うさ」

そう言って優しく撫でた。

「あうう」

どこか嬉しそうにはにかみながら頬を赤く染めなるトト。

「ああ!？」

そこで思い出したように声を上げるトト。

「どうした!？」

「あ、いえ、薬草大丈夫みたいです」

肩の力が抜けたケイ。

「さて、とりあえず工房に戻るか」

「はい!」

「つて、待てオレを置いて勝手に話を進めるな。オイ!!」

ケイ、トト、ドットの三人は工房へと戻って行った。

・
・
・

「じゃあ、ちょっと待ってて下さい。すぐに作りますから!」

トトが作業台でござと作業を始めた。

「……………何かあった」

「まあ、色々な」

「……………そう。で、誰」

ネルがドットを指差す。

「チビガキ、人に名乗って欲しけりゃ自分から名乗るんだな」

「……………礼儀を知らないバカに名乗る気はない」

ネルとドットの間に火花が散る。

「……………まあ、いい。ガキに意地張っても時間の無駄だ。オレはドットキーラスオン。賞金稼ぎだ」

「……………ドットキーラスオン？ ……………まさか黒金のドット」

「へー、オレのこと知ってんのかチビガキ」

ネルが驚きの目でドットを見る。ケイはわからない顔をする。それをみたネルがケイに説明する。

「……………凄腕の賞金稼ぎ」

その一言でケイには十分だった。

「なるほど、あの強さはそれか」

「で、お前らの名前は？」

「……………ネル」

「ケイ、ネルの使い魔だ」

「なんだ、お前使い魔だったのかよ。どうりで得体がしれねえわけだ」

ドットが納得したようにケイを見る。

「そういうことだ。お前も中々だったぞ」

と話している間にトトが薬を作り終えてやってきた。

「はいどうぞ」

「ありがとう」

ケイがビンを受け取る。

「うまく出来てよかったです。いつもみたいなことにならなくて」
「いつもみたいなこと？」

「あ！、いえ、なんでもないんです」

「いつものことってのは爆発させることさ。こいつ、いつもは薬でも爆発させてるんだぜ」

「なんで言うんですか！！」

トトが怒るがドットは知らん顔だ。

「まあ、成功したならいいと思うが」

「お優しいなお前は。このへっぽこを甘やかすと調子乗るぞ」

「いいんですよドットさんなんて。わたしは褒めて伸びる子です
から」

どうだかとドットがトトに聞こえないように呟いた。ケイとネルにはしっかり聞こえていたが。

「……………そろそろ時間」

「おっと、そうだった。じゃあ、俺たちは行くよ。また来る」

「はい、ありがとうございます」

「今度来たらさっきの続きしようぜ」

「ああ」

ケイとネルは工房をあとにし集合場所の広場に向かうことにした。

第十七話 賞金稼ぎ（後書き）

名前…ドットIIキーIIラスオン

年齢…22歳

性別…男

身長…182cm

体重…150kgくらい（体が機械のため）

職業…賞金稼ぎ

二つ名黒金

容姿…髪と瞳の色はダークブルー。体の至るところにピアスをしている。体の大半が機械でできている。普段はその体を隠すためにマントと帽子と手袋を常に身に着けている。機械は数少ない錬金術師が作ったもの。仕込みナイフやミサイル、ガトリング砲など様々なギミックが製作者の趣味で付けられている。体重が重いのはこのギミックのせい。

性格…通常、口が悪く、おちゃらけているだが仕事になると真面目になる。しかし、口の悪さは悪化する。本当は根は優しい好青年の予定。作者の技量不足で性格が変わる可能性大です。

戦闘方法…体が機械であるため人を超えた力と仕込みナイフなどを使つての近接格闘から魔力銃やガトリング砲を使った遠距離戦までこなせる。また、配線の末端であるピアスを飛ばし魔力を放つオーレンジ攻撃も可能。

以上ドット君の設定でした。

まだ、詳細な設定はありますがそれ言うとネタバレになるので。

そして再度こんな素敵なキャラを応募してくださったmissio
n No. 149様ありがとうございました。

第十八話 兎紗義

噴水のある広場にケイたちが行くとりリイたちはそこにいた。リイは何か掘り出し物でもあったのか満足気な顔をしている。ランドはその後ろで控えている。

「良い買い物したわね」

「お褒めにいただきありがとうございます」

対してカイルだが金袋を逆に向けて振っている。金は一切出てこない。そして絶望の顔をしている。ミズチはたくさんの菓子を抱えてご満悦の様子。

「はむはむ、うむ、うまいな。褒めて遣わすぞマスター」

「ああ、そうだね」

「なんじゃ、せっかく褒めてやったのじゃもう少し嬉しかったらどうじゃ」

それは酷と言うものである。

「あら、遅かったじゃない」

ネルたちに気がついたリイが言った。

「ああ、色々とな」

「向こうで騒ぎがあったけどもしかしてアンタ？」

「たぶんな」

この広場とドットとケイが戦った広場は遠く離れているがどうや

ら騒ぎはここまで伝わっていたらしい。まあ、あれだけ騒げば当然である。

「なにやったのよ」

「話せば長くなるが」

「それなら帰る途中で聞いわ。馬車とったから」

荷物が多くなってしまったためだ。

「カイル、あんたいつまでも落ち込んでる気？ 帰るわよ」

「ほれ、マスター。むぐむぐ、ごくん。行くぞ」

「誰か僕（金）の心配してよ！！」

カイルの叫びは華麗にスルーされた。とぼとぼと馬車に乗り込むカイル。それに続いてケイたちも乗り込み馬車は出発した。

「それで話してくれる？」

「ああ」

ケイは錬金術師の工房のこととドットのことを話した。

「あんたあの黒金のドットと戦ったてあんたねえ、さすがに無謀すぎない？」

リリイが呆れたように言う。この世界の常識から激しくずれているケイからはわからないがこの世界の住人からするとドットはそれほどどの相手だったらしい。

「そうか？ 久し振りに楽しいと思えた」

「……まあ、いいわ。それにしても錬金術工房ね。私も見たかった

わ——なに？」

カイルがちょんちょんとリリイを突付いてた。

「ねえ、さっきから疑問なんだけど。錬金術ってなに？ それに黒金のドットって誰？」

「はあゝ」

深い溜息をつくりリイ。

「アンタ本当に馬鹿ね」

「失礼な。知らないことを知らないといえるだけまだよ！！」

「それは確かに誇れることなのじゃろうが今回は馬鹿と認めているように思えてしまうのはなぜじゃろうな」

「な、なぜ！？」

ミズチの言葉に愕然とするカイル。

「僕は正直に言っただけなのに」

「（アンタのそういうとこだけは良いと思うんだけどね）」

リリイが誰にも聞こえないように小声で呟く。そして説明を始めた。

「まずは説明の簡単な黒金のドットからいくわよ。黒金のドットっていうのは凄腕の賞金稼ぎよ。特にギルドではトップクラスの力を持っているわ」

ギルドとは依頼を斡旋する組織のことである。冒険者の相互援助や情報収集などを行うための拠点でもある。手続きをふめば誰でも

加入することが出来る。

「へーってケイってそんなすごい人と戦ったの!？」

「ああ」

「す、すげえ」

「おぬしも見習って少しは強くなったらどうじゃ？」

カイルはその言葉が聞こえなかったフリをした。

「で、錬金術ってのは？」

「私も詳しくは知らないわ」

「錬金術っていうのは簡単に言えば卑金属から貴金属を精錬しようとする試みのことだ」

ケイがリリイに代わりに答えた。

「なにそれすごい!!」

「まあ、魔法でも貴金属っていうのは作り難いからね」

魔法で貴金属、特に金を作ろうとすれば五十年以上たくわえた魔力とひとつの国の民全員を生贄にしようやく雀の涙取れるといったものなのだ。他の貴金属もほとんど同じである。

「まあ、難しいというかそれは不可能に近いレベルだけどな。他にも色々薬品を使って色々作るんだ」

「それって魔法薬とどう違うの？」

「厳密な違いは魔法を使うか使わないかだ」

「へー、それなら魔法を使えない人にはよさそうね」

しかし、それでもこの国で普及してないのはこの国に魔法が溢れ

ているからである。魔法大国であるこの国では錬金術が普及するのは難しい。

「でもまあ、その有用性を証明できればなんとかなるかもね」

リリイが言う。それが難しいからあの工房は寂れているのだが。

「さてと、じゃあ、着くまで寝る」

ケイは目を閉じた。

「よう、破魔」

「よく来たのねケイ」

破魔の世界へとケイは来ていた。いるのは天守閣だ。

「綺麗になったな」

ケイがはじめてきたときと違って世界には光が溢れ桜が咲き乱れていた。寂れていた建物は全て修繕され古都は全盛期の姿を取り戻していた。

「ケイが使ってくれたおかげなのね」

「それだけでこんなことになるのか」

「そうね、私を使ってくれる人がいるだけで私の世界はこんな風になるのね」

「なるほどね」

外に目を向ければ桜の花びらが舞う街並みが見渡せる。とても美しい世界だ。

「それにしてもケイは刀使い慣れているのね」

「仕事から使う機会があったからな」

「なら、手入れの仕方は知ってるわよね？」

「残念だが知らないんだ」

「……………それで使い慣れてるのはどういう了見なのね」

ジト目で睨まれるケイ。

「言い訳するわけじゃないがそんなのはいらないうなものを使ってたからな」

「でも、私には手入れが必要なのね。刀はデリケートなんだからきちんと手入れして欲しいのね」

「わかったやるよ」

「よろしいのね」

破魔がうんうんと頷く。

「それはそうともう町には行ってみたの？」

「いや、まだだな」

「行ってみるといいね。きっと歓迎してくれるのね」

「そうだな行ってみる」

ケイは城の外へ出た。町には人がたくさんいた。人ではない者も。

「人も亜人も平和に暮らす町か」

どこもかしこも笑いが満ちていた。

「おや、おやおやおや」

ケイをジロジロと見る二足歩行のウサギがいた。服を着て、帽子を被っている。背中には荷物を背負っている。

「誰だ？」

「おっとこれは失礼」

ウサギが帽子を脱ぎ屋台を止めてケイの前に立つ。

「あっしは、商人でさあ。みんな兎紗義って呼びやすね」

「俺は」

「名乗らんでも知ってやす。ケイさんでしょう？ 破魔お嬢ちゃんの新しい主さんでしょう。ふう」

煙管を吸いながら兎紗義が言う。

「こうしてあっしたちが、また戻って来れたのは旦那のおかげやら、みんな感謝してやすぜ」

「俺は別に何もしてないがな」

「いやいや、謙遜せんでもいいですぜ。旦那はそれだけのことを、したんすから」

「謙遜じゃないんだがな」

それでも兎紗義はケイのおかげと言う。

「さてと、あっしはもう行かねえと」

「そうか」

「そうだ、記念にこれもっていつてくだせえ」

兎紗義が紅い玉をケイに差し出す。

「なんだ？」

「記念でさあ。何か役に立つはずでさあ」

「そうか、ありがとう」

「じゃあ」

兎紗義が去っていった。

「さて、そろそろ俺も帰るとしよう」

ケイは破魔に挨拶したあと現実へと戻った。

第十九話 第四、第五守護者

シーラの街から戻ったケイたち。その手には破魔の世界で兎紗義のもらった紅い玉が握られてた。どうやら、夢の中だとは言えもらったものは現実にも持ってこられるらしい。

「……それどうしたの？」

「ああ、兎紗義にもらった」

「うさぎ？」

「ああ」

ネルに破魔の世界のことを話し、その時兎紗義と名乗った、商人にもらったことを言った。

「なんなのそれ？」

リリイが紅い玉を見ながら聞く。紅い玉の中には紅い星があった。

「さあな、まだ、解析してないからわからんが何かのアイテムであることは間違いないだろう」

「お守りじゃないの？」

カイルが言った。

「お守り？」

「そうそう、僕のばあちゃんが言っていたのにそれ似てるんだよ」

「あんたのばあちゃんって結構耄碌してなかったけ？」

リリイがかなり失礼なことを言う。だが、事実なのでカイルは何

女がやってきた。

「あははは、ごめんごめん、いきなり現れるもんだからさあ」

まったく悪びれない様子で、その茶髪の女は言った。

「別に構わないが誰だ？」

「お、あんたが新入りかあ、あたしは美咲、栗原美咲。くりはらみさき 美咲でいいよ、第四世界の守護者だよ」

栗原美咲、第四世界の守護者。第四世界では科学が発展しており、物質転送などあらゆる武器を使い戦う。戦闘スタイルは長距離砲撃。与えられた力もそれに遠距離戦に特化している。

「ケイだ」

「そっか、そっかよろしく」

会話していたとき更に歩兵^{ポーン}があふれ出してきた。二人が対応しようとした瞬間二人の間を何かが通り過ぎた。それが歩兵^{ポーン}を斬る。それは金髪碧眼の白銀のドレスのような鎧を纏った騎士であった。

「まったく、何をやっているんですの美咲？」

「あはは」

声のしたほうを見ると小柄な赤髪の少女がいた。

「あら、そっちは新人ですね？ わたしは第五世界守護者のミルと申しますわ」

「ケイだ。さっきの騎士はなんだ？」

「わたしの下僕エクエスです。わたしの能力はあらゆる世界から

任意のものを召喚するものですのよ」

ミル、第五世界守護者。能力はあらゆる世界からの召喚術、無限サモン権力の召喚状。全ての能力が召喚に特化しているためミル自身は戦闘は不得意。そのため守護者の参謀という役割がある。

「そうか、それにしても」

ケイがゼロ領域の向こう側を目を細めて見る。大量の歩兵ポーンが集まっていた。

「きりがないな」

「今までが少なかったですから、こんなことは稀なんですよ。たぶん、どこかに歩兵ポーンの上位の城ルークがいるはずですよ」

「そうか、赤鋼アカガネ!!!」

赤き光が全てを見通す。

「あれだ」

ケイが指をさす。そこには歩兵ポーンの中から見れば小さいものだった。そして、どこことなく人に近い形になっている。

「ああ、そうですの」

世界を喰らうものは階級が上がるごとに形状が人間に近づいていく。その段階により階級を見分けるのだ。人間に近づいてきた個体ほど力が増す。

「そうか、なら、アレを潰したほうが早いな。魔剣開刀」

「だよなあ!!」

「ですの」

無数の魔剣がゼロ領域に広がる。それらはケイの命令で世界を喰^エらうものへと向かう。それに合わせ美咲が長距離砲を打ち込む。歩^ポ兵が凄まじい勢いで減っていく。

「来たれ、我が剣」

ミルの目の前に魔法陣が出現しそこから銀髪の少女が現れる。

「呼んだか我が主」

「ええ、リヤン、エクエスの剣となりなさい」

「良いだろう」

銀髪の少女――リヤンがエクエスの目の前にひざまずく。リヤンを中心に魔力が渦巻く。

『我は魔導の末裔、魔導を継ぐものなり、星の翼、天高く、夜の剣、地深く、汝が願いに答えよう、悠久を越え、我は神を殺す刃となろう』

リヤンの身体が輝き黒き剣へと変貌する。片刃の長大な黒き翼のような剣へとリヤンの姿が変わる。剣は紫の燐光を放っている。柄から刃にかけて紅いラインが走っている。剣の銘はシュヴェアート。

「行きなさいエクエス」

「わかりました主」

シュヴェアートをエクエスが掴み歩^ポ兵と城^{ルーク}へと向かう。

一瞬のうちに歩兵^{ポーン}が全滅した。残るは城^{ルーク}のみ。しかし、城^{ルーク}は歩兵^{ポーン}と違いエクエスに抵抗を示す。

エクエスが城^{ルーク}にシュヴェアートを振るう。紫の燐光が尾を引く。城^{ルーク}がそれを腕のような触手でガードする。どうやら、歩兵^{ポーン}よりも知恵があるようだ。

「はあああああ!!!」

エクエスが力を込めシュヴェアートを振りぬく。

『キャシャアアアアアア!』

触手が切れ、城^{ルーク}が悲鳴を上げる。他の触手がエクエスへと迫る。何もない空間を蹴り、エクエスが跳ぶ。それにあわせ触手が曲がる。

「ぐっ!」

エクエスが触手に掴まる。引き千切ろうとするが、意外に力が強く、引き剥がせない。

「術式発動、天魔の術式、虚空ゼロ領域からの物質転送、転送物質固定、転送物質概念認識、来い、ルシファー」

ケイが術式を発動する。左腕の図のひとつが輝き魔力があふれ出す。黒の魔力が溢れだしそれはひとつの形となっていく。巨大な悪魔の姿へと黒の魔力は変わっていく。

『ガアアアアアアア!』

ルシファーが咆哮を上げる。そして、城^{ルーク}の触手を引き千切る。

『シャアアアアアアア』

エクエスが自由になった。美咲が砲撃を叩き込む。美咲はいつの間にか巨大なキャノンを背負っていた。

「くらえやあああああ!!」

それをルシファーやエクエスごと放つ。エクエスとルシファーはかわした。放たれたビームは一直線に城^{ルーク}へと向かう。そして直撃した。

『キャアアアアアア』

悲鳴をあげ城^{ルーク}が消滅する。そして、美咲がキャノンの熱を放熱する。白い湯気があがる。

「終わった終わった」

「「お前は（あなたは）何をしてるんだ（ですの）!!」」

ケイとミルが同時に美咲に言う。

「おおう!？ な、なに!？」

「あなたは何をやっているんですの!!」

ミルが美咲に詰め寄る。

「味方ごと吹き飛ばす気ですよ!」

「だって、ほら、避けると思っただし」

「そういう問題ではありませんわ!!」

美咲とミルの二人が言い争いをしているのを尻目にケイは、歩兵ポーンと城の破片を見ていた。破片は次々と消えていくが、まだ、時間がかかりそうだった。

アカガネ
「赤鋼」

アカガネ エヘクトル
赤鋼で見てもやはり世界を喰らうものの正体は不明であった。一体なんなのか。そういった疑問が首をもたげるが、赤鋼アカガネで解析できないものが一体だれに解析できるだろうか。

ケイは破片からゼロ領域へとその視線を移す。どこまでも暗く、広大な空間だ。そこには始まりの七世界が輪状に浮いている。そして、その向こう側には小さな星屑のような何かがある。

ヴェルト・フラグメ
「砕けた世界の欠片ですわ」

それを見ていたケイにミルが言う。

ヴェルト・フラグメ
「砕けた世界の欠片？」

「はい、この始まりの七世界から、生まれた世界ですの」
セブンオブセブンス

ヴェルト・フラグメ セブンオブセブンス
砕けた世界の欠片、始まりの七世界から生まれた世界の総称。無数にあり、その全てを把握することは不可能。始まりの七世界と違い、だいたいが進行の袋小路の世界である。可能性の力とは、始まりの七世界と、砕けた世界の欠片にいる、自身と同一存在が持っている、自身が持ちえなかったが、持ちえたはずの力のことである。守護者とは、始まりの七世界と砕けた世界の欠片にいた、自身と同一存在を統合した唯一の一欠片のことである。
セブンオブセブンス ヴェルト・フラグメ
マスター・フラグメ

「あれが、全て世界か、アレは護らなくても良いのか？」

「元があれば、^{ヴェルト・フラグメ}砕けた世界の欠片はいくらでも出来ますわ。でも、^{セブンオブセブンス}始まりの七世界の代えはないんですの」

「だから、守護者という、存在がいるんだな」

ケイは、全ての世界を見渡した。どれほどの、世界が世界を喰ら^{エヘク}うものに食われたのだろうか。それを窺い知ることが出来ない。守護者がいつから戦っているのかも説明されていない。

「神は身勝手だな」

「そうですの……」

しんみりとした空気になる。美咲は我慢していたのだが、限界であつた。

「はいはい！ しんみりしない！！ 気が狂いそうになるよ。それよりも、アンタのホームを見せてよ」

「ホーム？」

「ありや？ 作ってないの？ カインのおっさんに何も聞いてないの？」

ケイはそんなこと何も聞いていない。

「あの人は、また端折りましたのね」

ミルは溜息をついている。

「説明しますわ。でも、実際にみたほうが早いですから、こちらにどうぞですの」

ケイは言われるがままミルと美咲についていった。

第二十話 ホーム

ケイがつれてこられたのは第五世界。ここで何をするのだろうか。

「あなたの第七世界とどこか違うと思いませんか？」

ミルは何も言わず、ケイにそう聞いた。ケイは第五世界を見る。

一見したところ第七世界との違いはないように見える。世界の中も、ケイが元いた世界と変わらない現代だが、魔術が存在する世界だという点以外ことなることはないように見える。

とりあえず、比べてみることにした、そのほうが早い。ケイは赤鋼^{ガネ}を使い、第七世界と第五世界を見比べてみた。

「なんだ、アレは？」

そして気がついた。というより、気がつかなければおかしいものに気づかなかった。

「気づいたようですのね」

第五世界には、もうひとつ小規模な世界がくつついていた。第五世界と一体化していたため気がつくのが遅れた。

「あれが、ホームですわ。ホームというのは、わたしたち専用の世界みたいなものですわ。守護者なら、誰でも作れますの」

「どうやって作るんだ」

「世界に触れて、念じれば作れますのよ。それからは自分の能力を使って模様替えをすればいいのです。ために、わたしのホームを見てくださいですの」

ミルがホームに入って行く。ケイと美咲も、ミルについて入って行った。

そこは、巨大な城の存在する平原だった。城は、かなり巨大で天にとどかんばかりだった。

「すごいな」

「当たり前ですの。能力の全てを使って、城を作りましたんですから」

「でも、殺風景じゃん」

「あなたのモノがありすぎるのよりはいいと思いますですの」

ミルと美咲が睨みあう。どうやら、この二人、相性が悪いらしい。

「これが、ホームか……………」

ケイはミルのホームを見回していた。

「そうですの」

「良い場所だな」

とても、美しい場所だと、ケイは思った。

「あなたも、こういう場所を作れるんですよ」

「そうだな、あとで、作ってみるか」

「ここなら、どんなに力を解放しても世界が壊れる心配はありませんし、世界を喰らうものの防波堤でもあるんですよ」

エヘクトル
世界を喰らうものが世界を喰らうためには、まず、このホームを喰らう必要がある。このホームには、守護者の力で作られているた

め、世界を喰^エらうものも簡単には喰^エらえない。その間に、倒してしま^エうといわけだ。

「なるほどな、これはいいな」

「それに、その世界のお友達も招くことが出来ますわ」

「そうか」

ネルやみんなとくれば面白いかもしれないと思うケイ。それで、自分がそんなことを考えていることに驚く。

（まさか、俺がそんなことを考えるとは。今更だが、変わったな）

そんなことを思いつつ、どんな世界を作ろうかと思案するケイ。出来れば、みんなが楽しめる世界の方がいいだろうと思う。

「じゃあ、これから、作ってみる」

「ええ、出来たら呼んでくださいね」

「わかった」

ケイは、ゼロ領域へと出た。そして、自身の守護する世界、第七世界のもとへ向かった。

「えっと、触れて、念じるだったな」

ケイが第七世界へ触れ、念じる。すぐに、第七世界に新たな世界が作られた。そこへ入る。真っ白でただ広い空間が広がっているだけだった。これが初期状態なのだろう。これから、自分の好きなように世界を創造していく。まるで神になった気分だった。まあ、その神にはあのとき以来あっていないのだが。何をしているのだろうか。

『ここにいるぞ』

「!？」

そこには黒服の男が居た。まったく気づかなかった。只者ではない。

「誰だ！」

ケイが魔剣を出現させる。

『俺だよ俺……』

「詐欺師の知り合いはいない」

『俺俺詐欺じゃないから!!』

「わかつている、誰だ」

再度ケイが聞く。

『神だ』

男に万を超える魔剣が殺到した。

『ちょ!？ やめて、やめて、体に穴あくから!』

しかし、男は体中に穴があいても、平然と立っていた。更に、見る見るうちに穴がふさがって下に戻っていった。

「……………本当に神かお前は」

『そだよ。ようやくホーム作ってくれたんだから。遅いよまったく。私はホームの中でしか、行動できないんだからね』

どうりで出てこないわけだ。出てこないじゃなく、出れなかったのだから。だから、ホームが出来た途端出てきたのだ。しかし、こんなふざけた奴が、あの神だとも言うのだろうか。もっと、年を取った隠者のような男を想像していたケイは納得が出来ない。

『納得がいかなそうだね』

「当たり前だ」

『いつも、そうなんだよなあ。なんでだろ』

それはわかりきっている。その神のキャラのせいだ。それがなければそんなことにはならない。神は二物を与えないというが、どうやらそれは神自身にもあてはまるようだ。

「知らん。それで、何をしに来た。まさか、ただ出てきただけとか言わないだろうな」

『うん』

クロガネ
「黒鋼」

黒の光が神に直撃する。黒鋼クロガネの破壊の一撃だ。たとえ神ですら粉碎できるはずだ。まあ、本当に出来るかどうかはやったことはないからわからないが。それでも多少のダメージはあるだろうと思っているケイ。

『酷いなく、まったく、因果の盾を発動しなきゃいけなくなっちゃったじゃないか』

因果の盾。攻撃が当たるという因果から全て防ぐ絶対の盾。これを貫くことは不可能。どんな攻撃も全て防ぐことが出来る。使用者を外界から切り離し、位相のずれた特殊な空間へと移動させ守る、

神の宝具

。

「ただ、馬鹿にしに來たのなら歸れ」

『違ふよ、今日はちよつと、大事な話があつて來たんだよ』

神が今までのふざけて、ゆるゆるな顔から、真剣な顔に変わる。
とても、大事な話のようだ。

「話せ」

『わかったよ』

神は口を開いた。

目覚める獣

深淵の夜。月も、星も、黒い雲に隠れ、漆黒の闇が朽ち果てた城下町を包み込み、支配している。それは遠い遠い場所。前時代には王国の中心であった場所。今や永い時が過ぎ去り、かつての栄華の面影はどこにもなく、朽ち果てていた。だが、領地も、人民も全てを失ってなお、城は建っていた。主を守るが如く、数百年の時を経ても、まったく朽ちてはいなかった。これからあと何百、何千と時を重ねようとも、この城が朽ちることはないだろう。

そんな、朽ち果てた王国の残滓、残響へ、フードをかぶった人間が現れる。体格からして男。その男は、全身黒服であった。男は朽ちた城下町を通り抜け、墓地へとやって来た。

「よく、眠れているようだな。そろそろ時間だ。支度を整えねばいかんぞ」

男は誰にいうまでもなく、そう墓地の入り口で眩き、墓地をあとにする。男の声は、小さかったが、風に乗り、墓地中に広がった。

男は、墓地から、まっすぐに城へ向かっていた。元は道だった場所も、全て朽ち果て、瓦礫に埋もれていたが、男は、自分の庭のように迷いなく歩いてゆく。そして、閉じられた城門へとたどり着いた。

「開いてくれるかい？」

男が眩くと、音もなく、城門が勝手に開いた。周りには人っ子一人いない。そして、男が通り抜けると、再び城門は音もなく閉まっていた。

男が城の中へ足を踏み入れば、積もった埃と、蜘蛛の巣が男を歓

迎した。調度品などは、朽ち果てぬとも、手入れをする者がおらぬため、城の中汚い。だが、男が歩いていくと、それまで汚かったのが嘘のように新品同様に綺麗になっていく。たとえるなら、時間の巻き戻しを見ているかのようなようだ。男が歩く度に、城が明るくなっていく。

男は大広間にやってきた。天井から、吊り下げられたシャンデリアに明かりがともる。今まで、何も乗っていなかったテーブルの上には、真新しいクロスがかけられ、食事の準備が成されていく。男はそれを確認し、また次の部屋へと移動した。

男による、城の再生は続く。すすけていた暖炉も、埃の積もっていた床も、城を構成する全てが今、再生のときを迎えていた。

そして、半刻後には城は全盛期の姿に変わっていた。外装が変わったわけではない。内部が変わった。まさしく、王城。荘厳な王の住まう城になった。

「さあ、我らが王を迎えようではないか」

城のエントランスに立つ男の横には、いつの間にか大勢の男と女が立っていた。

王の間へと向かう。そこには棺が安置してあった。黒い棺。闇を纏し王の棺。

そこに男たちが跪く。

「お目覚めのお時間です。我らが王よ」

男が言うと、棺が揺れ、蓋が静かに開く。棺の中には見目麗しい、ドレスを纏った人形のような幼い少女が眠っていた。

輝く月色の髪、雪のように純白の肌、赤い瑞々しい唇。見た者は皆等しく、心奪われるだろう。成熟している、していないは関係無く、少女には人を惹きつける何かがあった。

少女がゆっくりと目を開けた。血よりも紅い、深紅で真紅の瞳が光を灯す。ゆっくりと焦点を結んでいく。世界を捉えていく。

少女が体を起こす。重力が力を失ったかのように、少女は重力に逆らい、そのまま立ち上がった。手を地面につき、起き上がるという動作を一切省いて、地に足をつけ立った。

そして、全てを見た。その瞬間、世界が変わった。城は主を得て完全に再生し、荒れ果てた城下町までもが、その全盛期の姿を取り戻していた。

「さあ、始めるぞ！ 世界への復讐を！！」

少女は高らかに宣言した。城を揺らすような歓声が上がる。それは、今ここに神殺しの獣が目覚めた事を世界に伝えた。

亡国生誕

クレメンスと呼ばれる、小さな小さな国がある。そのクレメンスは、とても平和でした。王は公明正大で、その王の娘は見目麗しく、とても優れた才能を持ってる。国民は皆上を知らず、とても幸せに暮らしている国でした。

しかし、世界はそうは行きません。この国に、わが国に味方せよとの文書が届くようになりました。幾つもの国からです。しかし、公明な王は、どの国からの要請も断りました。自国が参加すれば、戦争に勝つ国が出るでしょう。しかし、それでは、負ける国も出るのです。戦争に反対していた王は、中立を貫きました。

そのため、他国の怒りを買いました。結果、戦争が勃発。大国同士の間で戦争ではなく、クレメンスと大国の戦争でした。今まで諍いを起こしていた国は同盟し、クレメンスを侵略してきました。

王は、精一杯停戦を呼びかけましたが、意味はありません。クレメンスは長い長い、戦争へと突入したのです。

クレメンスはしだいに疲弊していきました。途切れぬことのない侵攻と、大飢饉により、国民の生活は悪化の一途をたどり、国民の心はすれていきました。それでも、王は国を守るために戦うことをやめませんでした。国のため、民のため、王も、王女も必死に努力しました。

しかし、状況は一切変わらなかった。生活の保障がされている王族にしだいに不満が高まっています。王は出来る限りの施しを行いましたが、そんなものでは足りません。

国民の不満はついに、溢れ、爆発しました。革命という最悪の形で。それには、他国のスパイが関わっていましたが、誰も気づくことはありませんでした。

そして、王は革命により殺され、王女は処刑台へ乗ることになった。王女は、逃げもしなかった。

裏で買わされた盟約。王族が死ねば、国民は救うという盟約に従うために。王女は、民のため、犠牲になることを選んだ。

王女は地下牢に捕らえられていた。ろくな食事も与えられず衰弱していたが、弱みは誰にも見せはしなかった。

そして、処刑当日。全国民が注目する中を、自分で処刑台まで、王女は歩く。断頭台に縛られてなお、王女は、国民を恨むことはなかった。ただ、国民の幸せだけを願っていた。

「……私の安っぽい命でこの国が救えるのなら、私の命など、いりませんわ」

誰にも聞こえない声で王女が呟いた。そのとき、頭の中に声が響き渡る。

『ならば、その命^{オレ}がもらおう！』
「!？」

処刑場に大量のマントをかぶった大勢の人間が現れた。圧倒的な威圧感を放ち、どこからともなくそこに初めから立っていたかのよう^{オレ}に現れた。

「だ、誰だ貴様らは！」

「本来なら、貴様らのような愚鈍な民共に名乗る名はない、だが、^{オレ}そうだな、名乗ってやろう。これから、貴様らの主人になる我の名^{オレ}をな」

月色の髪をした幼い少女が全てを圧倒する声で言う。誰も逆らうことなどできはしない。本能がそう告げている。男だとか、女だとか、幼かろうが、年を取っていいようが、そんなもの関係なしに、生物種として、まず勝てない。勝つことが出来ない。そんな感想をこ

の幼い少女に、王女は抱いた。

「我が名は――」

第二十一話 変わる世界

東方の方で戦争が始まっているらしい。大陸各地にある国が戦争を始めていた。原因は小さな小国にあるというのが真偽は不明。このミスヴェルトと似たような状況の国だそうなのだが、それが戦争を始めたという。

「どう思う？」

新聞のようなものネルに渡しながらケイが聞く。ネルはその新聞のようなものを見てから、言った。

「……………おかしい、あの国は中立の国。周りを大国に囲まれているとしても、絶対に中立を貫いていた国。戦争を始めるのはおかしい」

「やっぱりか……………」

ならば、何かが起きたのだろう。幸いこのミスヴェルトまで戦火は及んでいない。距離が遠いのもあるが、大国に囲まれているものもある。ミスヴェルト以外の国は結構慌しいみたいだ。

「実際に確かめてみるのが早いんだろうが、それは無理だしな」

学園の生徒であるネルはここから離れることは出来ない。もとより、そんな戦時中の国に入れるとは思えない。ケイならば侵入できるし、見にもいける。だが、ネルのそばを離れるのは少し躊躇われる。使い魔は主人のそばを離れないのが通例なので、それに反することは少ししがたい。

「いや待てよ。こういうこと知ってそうなのがいるな」

「……………」

「あいつだあいつ。あの賞金稼ぎだ」

そういうとネルはわかったのか、頷いた。そう各地を回る賞金稼ぎの男。あいつなら、何か知ってるかもしれない。ドットキーラスオンならば。

・
・
・

そんなわけでケイたちはシーラの街の錬金術工房へとやってきた。

「トトいるか？」

「わひゃああああ！！」

ノックをする前に中から悲鳴が聞こえた来たのでいるようだ。失礼かもしれないが、色々危ない状況かもしれないので、扉を開き中に入る。中は煙で充満していた。密閉していた空間に風が流れ煙が外へ逃げていく。しだいに煙が晴れていった。

「ゴホ、ゴホ」

「おいおい、大丈夫か？」

「だ、だいひょうふてす」

ケイの見立てでも、あまり大丈夫に見えない。トトはふらふらで、へろへろである。服がかなりよれよれで、間違っても大丈夫に見えない。しばらくして、何とか回復した。

「あ、ケイさんと、ネルちゃんお久しぶりです」

「ああ」

「それで、何か用ですか？」

「ああ、少しな」

ケイがトトに事情を説明する。

「あゝ、ドットさんなら、もうすぐ来ると思います。いつもこの時間に、来てくれるんですよ」

「ちよいどいいな」

それなら、待たせてもらう。その間話そうとしているのだが、ネルは元から話す気がないので、もっぱら、話しているのはケイとトトだ。話す内容はほとんど錬金術の話だった。トトはケイの知識量に驚いて、自分の至らなさを痛感した。

「うう、わたしって本当にだめな子です」

「おい、俺は少し規格外だから、俺と比べるなって」

「でも、いつまで経っても師匠は帰ってこないし、お客は来ないし……」

そこで、タイミングよくドットが工房に入ってきた。

「よう、まった爆発か？　へっぽこ」

「誰がへっぽこですか！！」

トトがドットに反論する。数分間言い争ったあと、ドットがケイに気がついた。

「あ？　何でお前がここにいるんだ？　決着でも付けに来たか？　いいぜ、オレはいつでも準備ができてんぜ！！」

ドットが構える。

「いや、今日はそんな用事じゃない」

「チッ、そうかよ。で、オレに用事ってなんだ？」

「ちよっと、情報が聞きたくてなクレメンスのことだ」

「なるほどな、見に行けないから、オレに聞くってか？　てめえなら、それでも知れるんじゃないのか？」

ドットの言うことはもつともだ。ケイならば、この場にいても世界の全てを知覚する事が出来る。だが、ケイはそれをやらない。実際に見ているわけではないため、感覚に違いがある。実際に見て、聞くことには勝てない。だからこそドットに聞いている。

「さあな」

肩をすくめるケイ。

「まあ、いいか。確かにあっち方面にもオレは行っている。ありやまるで悪魔でも乗り移ったかと思ったほどだ」

ドットも詳しいことは知らないらしいのだが、本当にクレメンスカと疑ったそうだ。数年前にドットが訪れたときはまるで変わっていた。数年前は平和で豊かな、ゆったりとした国だったらしい。だが、今は、殺伐とした、戦争を始めた国。180度逆になっているといっても過言ではない。

「それになんだか。国民もみんな生気がねえし、まるでゾンビだったぜありや」

「ドットさんいくら、ドットさんでも、生きてる人をゾンビなんて

「いっちゃだめですよ！」

トトが言うが、ドットは聞こえない振りをして、話を続ける。トトはそんなドットに更に怒りをぶつけるのだが、如何せん子供が背伸びして大人を叱っているという微笑ましいというか和む光景にしか見えない。ドット本人もわかっているのかまったく取り合おうとしない。

「まあ、オレが知ってるのはそんなくらいだな。あんまりに気味悪くて出てきた。だが、そこで滞在していた知り合いからはその日から、プツリと連絡が取れなくなった。なんかあんだろくなやっぱり」

「そうか、よくわかった。まあ、あとは自分で何とかする」

「そうかよ、だが、まあ、気をつけるんだな。あの国には何かあるぜ」

「ああ、わかってる。じゃあ、トトまた来る」

「はい」

ケイとネルは工房をあとにした。大通りを少し進んだところでネルにケイが問いかける。

「どう思う？」

「……………何かあるのは確実。調べてみる価値はある。それに、この国は囲まれているといっても、もうすぐ戦火がここまで来る」

「そうか……………」

今は安全だが、これから先はわからない。クレメンスは破竹の勢いで大陸を支配しているのだから。守るために、準備はしておこうとケイは決意した。

第三十二話 魔法使い襲撃

――闇夜から襲う。

――月夜に襲う。

――魔法使いを襲う。

――それは復讐劇。

――憎悪を込めて、その刃を振り下ろす。

――皮鎧や靴や手袋、フードのついたマントを身に纏い、目と口以外包帯で隠した襲撃者。

――緑が襲う、自然の代行者が襲う。

――憎しみを込めて、襲う、襲う。

――魔法使いを殺す。

――殺せ殺せ、憎しみは深い。

――許すな、化物を作り出したあの魔法使いを許すな。

――殺せ、殺せ、全て殺せ。

――一人も残すな。

——戦争に利用されている？

——それがどうした。

——関係ない、魔法使いを殺せるならば、悪魔に魂を売ろう。

——さあ、殺せ！！ 踊れ！！ 手のひらの上で、さあ、殺してやろう！！

ノステラシス魔法学園では魔法使いたちが何者かに襲われる事件が多発していた。生徒、教師見境無に襲撃された。明らかに私怨。明らかな憎悪。何者かは激しい像悪を持って魔法使いたちを襲っていた。被害は魔法使いだけ。ただ、ただ、魔法使いを無差別に襲っていた。

被害者は全員は酷い状態だったため、依然として犯人の手がかりはなかった。規則性もないため、犯人の特定は困難な状況だった。

「どういうことなんだろうな」

「……………わからない」

「まったく、嫌な事件ですわ」

リリイが新聞の記事を読みながら言う。不快感を隠そうともししていない。魔法使いということに誇りを持っているリリイにとって、このような事件は侮辱されたかのように思っているんだろう。わからなくもないとネルは内心で持っているが、それを外に出すことはなかった。カイルはいつもどおりふざけている。

「犯人って誰なんだろうね。僕としては、あの嫌味な用務員が襲

われたことに感謝したいよ」

「こら、あんたはまたそういうことを言う。少しは心配しなさいな。
わたくし私もあの用務員は好きになれませんがね」

「おや、何をやっているんです〜?」

子供にしか見えない青髪ショートヘアの水魔法教師ウィリアがやってきて聞いてきた。

「あの襲撃事件について話してるんです」

「ああ、あまり首を突っ込んだじゃダメですよ。説明があると思いますけど、あまり被害が出るのなら休校もありますからね。特に、その使い魔君は動いちゃだめですよ」

ウィリアがケイを指差して言う。ケイは何で俺なんだという顔をするが、リリイ、カイルにはわかっていた。この規格外が動けば否応なく被害が大きくなる。確かに、配慮はするのだがあまり意味がない。歩く災害だと、ミズチは表現していたが言いえてるのではないかとリリイは思っている。

「なんででもです。そもそも、魔法使いが襲われているのですから、使い魔はご主人様の護衛をするべきなのです。くれぐれも騒ぎを大きくしないでください。いいですね」

「まあ、わかった」

「わかればいいのです。それと、カイル君は火魔法の点数が足りないので補習です♪」

補習のほと聞いた瞬間に、カイルは駆け出していた。だが、ウィリアが放った水の手によってあっさり掴まってしまった。何とかその手を解こうとするがまったく効果がない。カイルの属性は水だが如何せん鍊度が違った。

そのまま、カイルは引き摺られていった。途中でリリイに助けを求めたが、リリイは完全に無視した。

「はあ、まったくあのバカは」

リリイがカイルが連れて行かれた方を見て呆れた顔で言う。

「逆属性なら、仕方ないんじゃないか？」

ケイがカイルのフォローに入る。

魔法では自分と逆属性の魔法は総じて使い難い。途轍もなく使い難い。何種類も得意魔法を持っている人間でも、どれかひとつか二つは不得意な魔法がある。そして、苦手な魔法がないということは、得意な魔法がないと言うことだ。

水が得意なカイルにとって火が苦手なのは当然のことだ。

「あら、それなら私わたくしはどうなりますの？」

リリイは自信満々に言った。

確かにリリイの成績はクラストップであった。教えれば教えられるほど、乾いた砂のように全てを吸収していくように、実力をつけている。しかし、それでも、不得意なものがあり、闇と光は使えないとされている。その点だけ、ネルに嫉妬している。

「それもそうだな」

そう考えればネルもそうだったのでケイは納得してカイルのフォローをやめた。かわいそうなカイル君なのであった。

「さてと、じゃあ、今日こそ、捕まえに――」

「何をしている」

闇魔法教師のレギルスが背後に立っていた。リリイが慌てて口をつぐむ。この教師だけはリリイは苦手なのだ。

「い、いえ、ちょっと話をしていただけですわ」

「そうか、それなら、構わんが、ネルお前に用がある今すぐ^{オレ}私の研究室まで来い。一人でだ」

ケイが何か言う前にレギルスが釘を刺した。レギルスがネル共に研究室に行った。

「何だろうな？」

「さあ？ 私^{わたくし}あの人嫌いなので興味ないですわ。その前に、あなたにも協力して欲しいんですの」

「何をだ？」

決まっていますわという風に視線だけで言うリリイ。それだけで、ケイも察した。リリイはその魔法使いを襲っている犯人を捕まえようとしているのだ。ケイも捕まえるに越したことはないので、協力するのはやぶさかではない。

「犯人探しか？」

「ええ、そうよ。このままプライドを傷つけられたまま黙ってられるワケがないでしょう」

「まあ、わからないでもない。で、具体的にはどうするんだ？」

リリイはその内容を話した。

第二十三話 茨

ケイは学園の端にある森の川辺の近くの茂みに腰をおろし、気配を断ち、完全に身を隠していた。常人にはおよそ発見することは不可能なほど厳重に身を隠してある一点を見ていた。ある一点川のほとりにはリリイが立っていた。

リリイの作戦は簡単なことだった。自分を囷にして犯人を捕まえる。至極単純で、シンプル。その分失敗の確率は少なかった。問題は、この場所に本当に現れるかどうか。リリイが魔法使いが襲われた場所の共通点から搾り出した答えで、ここに来た。共通点、総じて自然の多い場所。特に、人の踏み入れ難い森の中など。そして、同じ場所では絶対に犯行は起きない。そして、残りの場所の候補は今リリイとケイがいるこの場所のみ。ならば、後は賭けである。

しかし、どうやら、その賭けは勝ちそうであった。ケイが何か近づいてくる気配を感じ取った。何か普通ではない異質な気配。人間のように人間ではないようなよくわからない気配を纏った何かが近づいて来ていた。それをリリイに念話で伝える。頭の中に響いたケイの声にリリイが驚いたが、近づいてくる気配のことを話してすぐに気を引き締める。そして、すぐにそれは現れた。

「誰ですの！」

その存在にリリイが叫ぶ。だが、その存在は何も答えない。

「……………」

その存在は、外見はフードのついたマントを纏った中肉中背の男性に見える。マントのフードから覗く顔は目と口以外包帯で隠している。そのため本当に男かどうか正確には判断できなかった。また、

ケイが見るに体も皮鎧や靴や手袋などで隠しているようであった。それが外見からわかることだった。武装は両手の手甲についたカギ爪と弓矢。おそらくスピードを主体とする戦い方をするだろう。魔法使いとは相性が悪い。一目見てわかったのはそれだけだ。あまりに情報が少ない。

アカガネ 赤鋼を使ってもいいが、敵の実力次第ではバレル可能性もある。
アカガネ 赤鋼はいわば解析魔術の超強化版なのだ。普通の人間は気がつかないが、実力のある人間には気がつかれる可能性がある。それに、今は夜だ。アカガネ 赤鋼を使用すれば発光によりどの道バレる。アカガネ 赤鋼を使うことは出来ない。

さて、どうするか。そう考えていると――。

「……………そこにいるな」

――襲撃者がケイに気がついた。気がつくはずがない。なのにどうして、ケイの中でそんな疑問が生まれるが、それを一瞬で無視、その場を離れようとする。襲撃者が飛び掛ってきたからだ。

だが、足が動かなかった。見ると、足に木の蔓が巻きついていていた。

「チッ!!」

急いで破魔を抜き放ち蔓を切断する。それと同時に襲撃者へ破魔を突き出す。捉えた。そう思った。しかし、肉体を貫いた感触はいつまで経ってもこない。確実に破魔は襲撃者の体を貫いたはずだった。なのに、感触はなかった。

だが、考えている暇はない。襲撃者が蹴りを放つ。破魔を抜き、その蹴りを避け、リリィの下へと躍り出る。

「なんですのあれは!？」

「わからない……………わからないが――!」

突撃してきた襲撃者の鉤爪を破魔で受け止める。防がれた瞬間に襲撃者は距離をとり、手甲についている弓を放つ。

「チィ!!」

破魔を使いそれを落とす。打ち落としたとき、襲撃者は既にケイの懐に入っていた。襲撃者が鉤爪を振り被る。来る衝撃に供えるケイ。

だが、襲撃者は土の槍を喰らい横に吹き飛ぶ。

「大丈夫ですよ!」

「ああ、クソ、手強いな」

「あなた、それで守護者とか言っていましたの?」

リリイが呆れながら言う。

「悪かったな。俺はもともと一騎打ちで戦うタイプじゃないんだ」

ケイはもともと闇夜からの奇襲と、魔剣の大質量による殲滅戦を得意とする。そのための黒コートであり、そのための能力であった。執行者はそれぞれが何かに特化している。ただ一人を除いて。つまり、ケイは一騎打ちなどの単純な戦いを得意としていない。だが、得意としていないだけで、やれないことはない。現に今までも一騎打ちをしてそのどれも勝利を収めている。

「だが、まあ、少し侮っていた。まさか、人間じゃないとはな」

襲撃者のマントは先ほどのリリイの攻撃で吹き飛んでいた。髪は深緑色で硬く、頭の所々から短い木の枝が生えている。また、両腕

と胴体に茨のツタが絡み付いている。衣服で体を隠してはいるが茨の塊であった。植物人間、そうあらわすのが妥当だった。

「……………」

襲撃者が鉤爪を構える。話しをする気はないらしい。ケイも破魔を構える。

「リリイ、離れてろ。ちょっと本気でやらせてもらおう。というか、お前が襲われたら終わりだから、さっさと避難しといてくれ」

「邪魔なら素直に言いなさい。でも、今回だけは手を出させてもらいうわよ、私から言い出したことですから」

「引く気はないか。了解さっさと終わらせるぞ」

話が終わるのを律儀に待っていた襲撃者が動く。速い。超高速と言っても差し支えない。動きは鍛えた人間と同じくらいだが、それでもこのスピードは中々に脅威だ。鉤爪の一撃を放ってくる。それを破魔で受け止め、襲撃者に蹴りを放つ。やはり、人間と同じ感触はない。打撃は効きそうにない。

吹き飛ぶ襲撃者にケイは追撃をかけ、破魔を振るう。それを襲撃者はかわす。そこにリリイの土の槍が飛ぶ。それを襲撃者は鉤爪で切り裂く。そこにケイが斬り上げる。襲撃者は破魔の剣筋にあわせて一回転して回避する。

攻防のち、両者は互いに距離をとる。仕切りなおし。死合の緊張感、ピリピリとした空気があたりに充満する。

先に動いたのはケイ。破魔を構え襲撃者へと疾駆する。襲撃者は破魔の一撃を鉤爪で受け止める。その瞬間にリリイが土の槍を放つ。襲撃者は力を抜きケイから離れ、それをかわし、そのままリリイへと走る。リリイが向かってくる襲撃者に土の槍を放つ。だが、全て避けられ当たらない。

「なら！！ 神より与えられし秘法、汝が秘法より生まれし土の秘術、大地に眠りし黒金よ、その力を持って生まれ出でよ、アイアンゴーレム！！！！」

高速で地面に描かれた複雑な紋様から生まれる黒鉄のゴーレム。通常の術式で造る土のゴーレムではなく、通常の術式を更に長くして、力を強めたゴーレムを造り出す魔法。

現れたアイアンゴーレムは襲撃者へと迫る。スピードは相手の方が速いがゴーレムの登場は襲撃者の不意をついた。アイアンゴーレムの持つ剣が襲撃者に迫る。襲撃者はかわそうと身をひねった。だが、避けきれず襲撃者の右腕が吹き飛んだ。

だが、襲撃者の右腕のあった場所からは血は出ない。襲撃者は吹き飛んだ腕から手甲を取り、憎憎しげにリリイとケイを睨んでから闇夜に消えた。

「ふう〜」

「逃げた……ようね。まったくなんなのよあれは」

「まあ、普通の人間じゃないだろうな」

ケイがリリイに切り落とした右腕を指す。その腕は茨だった。かろうじて右腕だったとわかるがそれは解けた茨だった。それは襲撃者が人間ではなかったことを意味していたのだった。

第二十三話 茨（後書き）

すみません剣崎様、キャラクターは出せましたが、名前が出せませんでした。

つ、次こそ出します名前。

追記 はい、どうもテイクです。

来週から一週間ほど、用事で出掛けるので執筆が一切出来ないため、二週間ほど更新できなくなります。

ので来週と再来週の更新はお休みしたいと思います。

第二十四話 襲撃者の正体

ケイは襲撃者が去っていったあと、リリイを伴い無幻図書館に来ていた。あの襲撃者の正体を知るためだ。

「な、何なのここは!？」

やはり、リリイが無幻図書館に足を踏み入れたときの反応は案の定だった。そりゃこれだけの知識を秘めた図書館など学園にも、世界のどこにもないだろうからだ。そりゃ驚く。それに気がつかない振り、そして、説明を放棄したケイはインデックスを呼ぶ。

「ようこそ無幻図書館へ。ここには古今東西ありとあらゆる蔵書、知識、この世の叡智が保管されています。何の変哲のないライトノベルから強大な力を持つ魔導書、神の書まで選り取り見取りあなたのニーズにお応えします」

いつも通りインデックスが姿を現した。

「ら、らいとのべる?」

リリイはインデックスの存在よりも、ライトノベルの方が気になるようだった。この世界にある、本とはかなり気色が違うからだぶん、そのせいだろう。インデックスは冷静にライトノベルを持ってきていた。

「いや、持ってこなくていいから」

「そうですか」

インデックスが持ってきたライトノベルを棚に戻しに行った。そして、すぐに戻ってくる。ケイたちがインデックスに本題を話す。

「人物の検索ですか」

「ああ、出来るか？」

「出来る、出来ないかと問われたならばイエスと答えます。大勢は現在の無幻図書館の状態では不可能ですが、一個人ならば何とか出来るでしょう。大幅な業務の遅れが懸念されますが」

インデックスの表情はまったく変わらなかったが少し棘のある言い方だった。司書と言う役柄、この乱れまくった蔵書の数々をそのままにしておきたくないのだろう。一刻も早く元に戻したい、そのしぐさが語っていた。

ケイとしてはそれを優先させてあげたいのだが、リリイが聞かれないのでさっさと終わらせるように指示する。

「では、少々お待ちください」

ケイとリリイはいつの間にかおかれていた長机と椅子に座った。リリイはきよろきよると、無幻図書館の中を見回している。ネルは反応が薄かったがリリイは中々いい反応をしてくれる。そして、ケイが見ていることに気がつく、すぐに見回すのをやめるが、目を離すと、すぐにまたきよろきよし始める。面白い。

「見たいなら見てくればいい。遠慮しないでいいぞ」

「べ、別に興味なんてないわよ」

まったくそうは思えないから聞いているのだが。まあ、そういうならと、ケイは辞退した。だが、キョロキョロと視線を動かすリリイ。そして、時折ケイをチラチラ見る。見たいのなら正直に言えばいい

のにと思いながらケイは言った。

「はあゝったく、なあ、ちょっと奥に行くんだがついてきてくれな
いか？」

「そ、そう？ ま、まあ、仕方ないわね。あなたがそういうのなら
言ってあげてもいいわ」

やれやれと思いながらケイは立ち上がり、見せても問題ないだろ
うと勝手に判断した本がある場所へと歩いていく。それをリリイは
きよろきよろしながらついていく。異世界も含めたありとあらゆる
知識が収められた図書館で見ているだけでも楽しいものだろう。価
値がわかるものにはわかる。ここは宝の山だ。

とりあえず、ケイはリリイとともに面白いと思われそうなもの
があるところを回っていく。この図書館、かなりの広さだと思ってい
たが、予想以上であった。まさにひとつの世界と言える。図書館の
中には図書館にあるまじきものなどが大量にあった。探してみれば
川すらも。それら全てが何かしらの力を持っているのだから凄いと
言える。

「うわゝ」

リリイが珍しく嬉しそうな笑顔を浮かべる。ケイが始めてみる表
情であった。なんだ、こういう表情も出来るのかと、意外に思った
のは内緒だ。

「凄い凄い。本当に凄いわね。ネルはこれ知ってるの？」

「ん？ ああ、知っている。俺の能力について説明するときに見せ
た。まあ、あいつは本にしか興味を示さなかったがな」

「もったいないわね」

「お前のその顔を誰にも見せないのも勿体無いがな」

「……………」

リリイはケイが言った事を一瞬吟味、その後ボンという擬音が聞こえるほど顔を一瞬で赤くした。

「な、なななな！？　なんてことを言ってるのよ！！」

「正直な感想」

それで更に、リリイは顔を赤くする。というか、顔を背けているのでケイには今どんな表情をしているのかわからないのだが、耳まで赤いため、きっと凄く照れているのだろうということはわかった。もしくは怒っているかだ。こちらのほうが現実的だなあ、とかケイは思っている。

しばらく、というかりリイが満足するまで図書館を見て回ったあと、タイミングを計ったかのようにインデックスが検索終了を告げた。

「条件に合致する人間はただ一人だけですどうぞ」

インデックスが一冊の本を渡す。濃緑の革表紙の本。重たそうな見た目だが、見た目に反してとてつもなく軽い。まるで、草を持っているかのようなだった。ケイがその本を開く。そこには一人の男の情報が書かれていた。

襲撃者の名前はライゼル・ザルベージャ。かつては普通の人間だったが、とある魔法使いに人体改造されて人間ではなくなった植物人間。頭部と脊髄に相当するところが木の幹のようになっており、それ以外は茨のツタの塊で、それを鎧や衣服、手袋や靴に押し込めてなんとか人の形を保っている。体に巻きついていてる茨は、入りきれなかったぶん。自分をこんな姿にした諸悪の根源、ということでは魔法使いを敵視しておりその時は狂戦士のように凶暴になる。現在

は、クレメンスにて魔法使い狩りを実行中。

他にも、特殊能力などが詳細に記載されていた。

「なるほど……こいつが襲撃者の正体ってわけか……」

植物人間ならば斬撃も打撃も効きにくいだろう。木の根が足に絡み付いてきたのも植物人間で、植物を従えられるからだと考えればつじつまがあう。どうやら、かなり厄介な敵のようだ。他のページを見たところ、弱点も把握しているらしく、弱点をそのまま突くことは難しそうである。

「……………」

リリーの表情が優れない。気になってケイが聞くんが――。

「どうした？」

「……………いえ」

――不自然に答えを濁した。

「そうか」

ケイはそれについて何も言わなかった。わかっていたからだ。リリーが考えていること。それは魔法使いがライゼル・ザルベージャにした罪についてだろう。彼には正当な理由がある。魔法使いを襲う正当な理由が。魔法使いが彼を恨むことはお門違いと言える。自分ではないにしろ、魔法使いが彼をそんな地獄に堕としたのは事実。魔法使いであることに誇りを持っているリリーならば何を考えるかは明白だ。

このままライゼルを倒してしまっても、捕まえてしまってもいい

のだろうか。復讐されても仕方のない理由があるというのに。本当にいいのだろうか。そんな考えがリリィを支配しているのだろう。

何か言うべきなのかもしれないが、ケイにはそんな気の利いたことは言えない。だから、気づかない振りをすることにした。答えは自分自身で出すべきだ。

「さて、今夜は帰るぞ。もう遅い。襲撃者に関してはまた明日だ。どうせ、明日も襲いに来る」

「ええ、そうね」

「それでは、またの来館をお待ちしております」

インデックスに見送られ二人は無幻図書館から戻ってきた。それから、リリィを寮に送り、ケイは自室へと戻った。

第二十五話 ライゼル戦前編（前書き）

お待たせしました！

P C 復旧後、執筆意欲増加により、予定変更で更新です！

第二十五話 ライゼル戦前編

翌日、再び時間は深夜。ケイはリリイと共に昨晚、襲撃者ライゼルが現れた場所に集合していた。リリイはライゼルを捕まえると言ったからだ。どうやら一日考えて自分なりに答えが出たようである。今回はケイは隠れずにリリイのそばに居る。どうせ、隠れたところで植物に囲まれていればすぐに見つかる。ならば隠れるだけ無駄だ。今回は無駄なことをしている暇などないだろうから。

「さて、来ると思うか？」

「来るわよ。絶対に。だって、あれだけ魔法使いを恨んでいるのに、一度失敗した位で諦めるずなにでしょ」

「まあ、それもそうか——つと、噂をすればだな。来たようだぞ」

二人の前に昨日と同じ姿のライゼルが立っていた。殺気を放ち、すぐにでも襲ってきそうだ。戦闘準備は万全のようで、切り落とされた腕も元に戻っていた。

「さて、来たなライゼル・ザルベージャ」

「……………」

「話す気はないか相変わらず」

ライゼルが鉤爪を構える。憎しみに染まった殺気がケイとリリイに突き刺さる。ケイは平然としているが、リリイには少々厳しいようだった。だが、それでも戦う意思はあった。上出来だとケイは思っている。敵の特性はわかっていいるのだ。この勝負勝ったようなものであった。

「魔剣開刀——レーヴァテイン——！」

無数の魔剣の中から一本を選び抜く。かつて神話の時代、世界をまるごと焼き尽くすという究極の武器、ラグナレクにてスルトが世界を焼き払う時に使われた炎剣、世界を焼き尽くす滅びの剣。赤く、紅く、朱く、煌々と燃え上がる炎の剣レーヴァテインがケイの手の中にあった。

「……………」

ライゼルの動きが止まる。レーヴァテインに注意するように、その炎の剣を注視する。

「あなた、そんなのがあるのなら早く使いなさいよ」

「あまり使いたくはないんだ。この世界に元からないものは世界の修正を受けないし。どうなるか俺でも予想はできないんだからな」

つまりは、いつ爆発するかわからない爆弾を武器として使っていると同義である。それが神話クラスの武器ならば尚更だ。

「そんなので大丈夫なの？」

「大丈夫だ問題ない」

「……………」

ライゼルが大丈夫だと判断したのか、凄まじい速さでリリイに突っ込む。昨日と動き、狙いは変わっていない。リリイにはライゼルの姿を捉えることなどできなかった。

しかし、ケイにはライゼルの動きが見えていた。昨夜のような油断はない。本気で、執行者としてライゼルを倒すために動く。瞬時にリリイの前に移動、そのままレーヴァテインを振る。炎の軌跡を描きながらレーヴァテインがライゼルを燃やし尽くすためにその首

へと向かう。

ライゼルは体を捻りその斬撃をかわす。普通の人間にはできない駆動だが、植物人間には無理ではない。そのまま鉤爪を振るう。

それを紙一重でかわして、レーヴァテインを薙ぐ。ライゼルは後ろに跳びかわす。

「偉大なる大地の精霊よ、魔を貫く槍を放て――アースジャベリン！！」

ライゼルの着地点にリリィが土の槍を放つ。

「……………」

普通ならばかわせないがライゼルは普通ではなかった。ライゼルは腕の茨を解き、腕を伸ばす。近くにあった木をつかみ、そのまま着地せずに木の付近へと腕を縮め移動した。土の槍はライゼルに当たらずに闇へと消えた。

ライゼルが腕を元に戻し体勢を整えようとする。

「休ませないぜ」

そこにケイがレーヴァテインを振るう。世界を焼く業火がライゼルへと直撃する。

だが、ライゼルはマントを犠牲にし木上へと逃げる。マントがなくなりライゼル本人の姿が見えるようになった。

「チッ、はずしたか」

一瞬のインターバル。後、ライゼルが両の腕を伸ばす。ケイとリリィそれぞれに。ケイはそれを蹴り上げ、ライゼル本人へと走る。

リリイは土壁アースウォールを使い防ぐ。腕は伸ばせるだけで操作は出来ない。これを見てそう考えたケイはそのままレーヴァティンを振るう。それをライゼルは引き戻した腕を再び伸ばし、木を掴み一気に引き戻しかわす。そのまま空中で片腕を伸ばす。高速でその腕はリリイへと向かう。

「同じ手は使えない！」

ケイは避けられないはずのライゼルの伸ばされた腕にレーヴァティンを振り下ろした。そのとき、ライゼルの顔が不敵に笑った気がした。

その瞬間、ライゼルの腕がレーヴァティンを避けるように曲がった。そして、そのままリリイへと向かう。

「「な！」」

ケイはすかさずレーヴァティンに魔力を通し炎剣を伸ばす。だが、ライゼルはそれにあわせて腕を曲げる。リリイは土壁アースウォールを作り出す。それで防げるはずだが、ライゼルの腕は土壁アースウォールにあわせるように上へと伸び土壁を越えてリリイへとその鉤爪を振り下ろさんとする。

レーヴァティンを振り下ろした体勢のケイでは間に合わない。右腕をリリイに向ける。

「チィ！ 我は生命の樹を授かりし者。第1のセフィラケテル、思考や創造を司る、数字は1、色は白、宝石はダイヤモンド、惑星は冥王星を象徴し、王の横顔を表す。神名はエヘイエー、守護天使はメタトロン。最後の剣を抜き、我が前に姿を現せ！！」

刹那、右腕の刻印より、真白き魔力の塊が飛び出し、ライゼルの鉤爪を一瞬の差で止めた。光が収まったとき、そこには純白の巨大

な翼を持つ、太陽のように輝く黄金の髪を持った、純白の鎧を身に纏った天使が炎の柱のような剣でライゼルの鉤爪を受け止めていた。

第二十五話 ライゼル戦前編（後書き）

剣崎様からいただいたキャラクターライゼル君とのリターンマッチですよ。

え、ライゼル君が強い？

ドットが弱くない？

そんなことないです。

ドットは街中で本気を出せなかっただけです。

死合いではなかっただけです。

ライゼル君のプロフィールは次回出したいと思います。

第二十六話 ライゼル戦中編（前書き）

キリがいい所で切ったので短めです。

第二十六話 ライゼル戦中編

「契約の天使メタトロン、召喚に応じ参上した。マスターはあなたか？」

現れた天使メタトロンはケイに向かっている。

「ああ、ケイだ」

「了解したマスター。フフ、ようやくちゃんとした手順で呼んでくださるマスターに巡り会えるとは」

「ちゃんとした手順だと？」

「はい」

あれは無意識にやったもの。それがちゃんとした手順だというメタトロン。そうでなければ本来の力が出せないという。その状態でも強いのは強いが、ちゃんとした手順で召喚したときの力は比較にならないらしい。つまり、以前、ゼロ領域で悪魔を召喚した時の悪魔の姿は本来の姿ではなかったということらしい。なんだか損した気分になるケイ。

「まあいい。とりあえず、目の前の奴を倒すぞ」

「はい、マスター。こちらの少女は私が守ります。マスターは存分に戦ってください」

「ああ」

レーヴァティンを構えなおし、ケイはライゼルに走る。同時にメタトロンもライゼルに向かい飛ぶ。両方向からの同時攻撃。それに、弱点である炎。いかにライゼルであろうとも痛手を負わせられるだろう攻撃だ。

「……………木よ」

ライゼルが呟く。その瞬間、地面から木の根が出てくる。それらは、生き物のようにうねりケイとメタトロンを狙うと見せかけてリリィを狙う。あくまであちらの勝利条件は魔法使いを殺すことに設定されているようだ。

「無駄です!!」

メタトロンが反転、炎の剣で木の根を切断して行く。その間にケイはライゼルに迫る。ライゼルは矢を連続で放つ。矢をレーヴァテインで払う。刹那爆発が巻き起こり、砂煙が舞う。矢の中に爆弾が混じっていたようだ。その間にライゼルの姿が消えた。

「チッ、どこに行った」

ライゼルの気配は植物と同じで探り難い。このように植物が多い場所ではまったく索敵が不能になる。

「ケイ、ライゼルは?」

「まだ近くにいますはずだ。リリィ気を抜くな」

「ええ」

辺りの気配を探る。やはり、植物にまぎれてライゼルの気配は見えない。

ボコリ、何かの音が響く。そして、次の瞬間、地面から茨が出てくる。それは生き物のようにうねり、リリィを狙う。

「しまった! 地面の中に居たのか!」

ケイが走り出すが、茨が立ちはだかり邪魔をする。

「クソ！ 邪魔だ！！」

茨をレーヴァテインで切るが切った端から復活していく。地中の養分というか、魔力を無意識のうちに吸収して、異常な再生能力を行使しているらしい。

「メタトロン！！」

メタトロンに命令するが。メタトロンも状況は同じ。いや、ケイ以上に焦り、周りが見えていなかった。そのため、茨に絡め取られてしまった。

「クッ、ううう！ 不覚！！」

何とか抜け出そうとするが、もがけばもがくほど絡み付いていく。それは、鎧の間にまで進入していった。

「ひゃあ！ ちょっと、そこは、んん、だ、駄目です！！」

なにやら、大変な状況らしい。そして、リリイもまた、絡め取られていた。

「クソ、どけ！」

レーヴァテインに更に魔力を込め、その炎を伸ばす。そのまま、レーヴァテインを薙ぐ。だが、やはり、すぐさま再生される。茨が噴出す中心からライゼルが姿を現す。そして、絡め取ったリリイへ

と、その鉤爪を振り下ろすために、振り上げる。

「やめろおおおおお!!!!」

ケイの叫びが木霊する。その瞬間、氷の雨がライゼルに降り注いだ。

第二十六話 ライゼル戦中編（後書き）

新年一発目の更新です。

皆様あけましておめでとうございます。

今年もよろしく願います。

さて、挨拶も終わったので連絡を。

次回の更新は十六日を予定しています。

ので、皆さんお楽しみに。

それではまた。

第二十七話 ライゼル戦後編

「これは……」

氷の雨は、ライゼルにだけ直撃する。ケイは呆然とそれを見ていた。

「……………早く」

「はっ！」

その声で我に返り、レーヴァティンを振るい気絶したりリイと、メタトロンを助け出す。

「助かったよ。ネル」

物陰からネルが出てきた。先程の氷の雨はネルの魔法だ。どうやら、何かあると踏んでここまで来たらしい。もしくは、使い魔契約の影響かもしれない。しかし、助かったとケイは思った。

「……………別に。それよりも、あれ誰？」

「魔法使い襲撃の犯人だ」

「……………そう」

さほど興味はなさ気であったが、それでも、どこかその表情には怒りが見える。友達を傷つけられたのだから当たり前だ。いかにいつも無表情といっても感情がないわけではないのだから。杖をライゼルに向け、殺気を放っている。

「……………殺していい」

「悪いが、こいつは俺の相手だ」

「……………そう」

ネルがあげていた杖を下げリリイを抱えて一步下がる。ケイに任せるということだろう。

「おい、メタトロン、準備はいいか」

「はい、私も、どれだけ平和ボケしていたか思い知りました。少し徹底的にやらねばならないようです」

「ああ、始めるぞ……………死刑執行の時間だ」

ケイとメタトロンが己の獲物を構え、疾走する。その姿は既に人間には捉えられない次元の動きとなっていた。ライゼルは植物人間と言っても人間だ。だから、この速度には対応できない。だが、地面から現れたライゼルは茨により対応していた。

植物にも知性がある。それが、何千、何万と集まればそれは人間にも匹敵する。しかもここに生えている植物は知性の高い魔法植物。それがここには何億もある。それがライゼルを補助していた。だから、こそ、この二人の動きについていく。

「ついて来られるのならついて来い。だが、この先は人間には厳しいぞ」

ケイが蹴りを放つ。それを茨で受けるライゼル。ライゼルの茨が引きちぎれ吹き飛んだ。人間の蹴りの威力ではない。軽く人外の威力を超えている。更に、次の瞬間には、レーヴァテインを振るう。それをライゼルはかわし、後ろに飛ぶ。

「やはり、来ましたね」

ライゼルの着地ポイントにメタトロンが立っている。ライゼルはすかさず茨をメタトロンに伸ばす。それらは、メタトロンに巻きつき、絞め殺そうとする。だが、メタトロンは平然としていた。

「そう、この程度だったのですね」

ライゼルの茨が細切れになる。どうして、何があった。ライゼルの脳裏を疑問が駆け巡る。だが、疑問など浮かべられる暇などない。すぐ目の前にメタトロンが迫る。炎の剣を鉤爪で受け、メタトロンを蹴り飛ばす。空中から、地面に降り、体勢を立て直そうとするが、二人に休ませる気などない。

ケイはレーヴァテインをメタトロンは炎の剣を同時にライゼルに振り下ろす。ライゼルの両腕が飛ぶ。普通なら、これで終わりだろうが、生憎と相手も自分たちも普通ではない。ライゼルは地面に根を張る。すぐさま腕が復活する。だが、武器であり、防具である手甲はない。それは腕と共にどこかへと吹き飛んでしまった。しかし、そんなことはライゼルにとっては問題ではない。茨はただで相手を傷つける武器なのだから。

「メタトロン、そろそろ終わらせるぞ」

「はい、マスター」

メタトロンが飛ぶ。その巨大な翼を広げる。ライゼルがメタトロンに茨を伸ばすが、ケイがそれら全てを切り落とす。

「神々が人を見守りし瞳、それは時に人を捕らえる呪縛となる。人
サウザンドアイズ
を見つめし千の瞳！！」

メタトロンが巨大な翼を広げる。そこに、1000個の目が開いた。そして、全ての瞳がライゼルを見つめる。神々が地上の人間を

見守るための瞳。神秘的な魔力がライゼルの動きを封じる。

「……………!!」

「これで終わりだ!」

レーヴァテインが炎の軌跡を描き、ライゼルの両腕と両足を切断する。そして、レーヴァテインで地面に縫い付けた。レーヴァテインを外そうともがくが炎で燃えてしますため外せない。レーヴァテイン以外にも魔剣を取り出し、体を縫い付ける。

「ガアアアアアアア!!!!」

それでもライゼルは抜け出そうともがく。だが、抜け出すことは出来ない。そんなライゼルにケイが止めを刺すべく魔剣を持って疾駆する。そのまま、ライゼルに止めを刺すはずだった。だが、ケイの足元に突然落とし穴が出現する。

「な!!」

咄嗟に魔剣開刀で魔剣を足場にし落ちなかったが、落とし穴の中には巨大なトゲが敷き詰められていた。落ちたらケイならば死ぬことはないだろうが、大怪我をすることは必死だっただろう。しかし、ここには落とし穴などなかった。いったい誰が設置したのだろうか。しかも、ケイが感じたのは何かの能力だ。

「ニヒヒ、このままこいつを殺されるわけにはいかないんだよねー」

木の上から声が降ってくる。小柄で、半そで半ズボンの金髪ツンツン頭の少年がライゼルを抱えて木の上に立っていた。無理矢理引きちぎったのか、ライゼルは頭だけの状態だった。そんな状態でも

生きているようで、うなっている。

「お前誰だ」

「ニヒヒ、おいらはこいつの仲間（仮）面白そうだからこいつらに加担してんだよ。ニヒヒ、で、こいつおいら結構嫌いだねえまあ、それはいいやけど。ああ、おいらね、おいらの名前はアルゼル・ルーイッシュよろ♪」

「さっきの落とし穴はお前か？」

「そうそう、おいらおいら。おいらの能力罠造さ。トラップオフトラップスで、ライゼルはちよっと動けねえから、次は警戒しても無駄だぜ。っと、あいつが怒るんじゃない！」

アルゼルは詠唱もせず一瞬で転移の魔法を発動さえ、その場から、消えうせた。

「終わったか……」

「そのようですね。ふう、久しぶりに本気を出しました。それではマスター、御用の時はまた……」

「ああ」

「……………説明」

「あゝ、後でな」

ネルはコクリとうなづく。

星空を見上げるケイ。やはり、何か大きなことが起こっている。そして、アルゼルが言っていた。あいつ。不確定要素が多い。そして、守護者としての使命もある。深くは関われない。だが、それでも、守りたいものを守りたいと思う。

第二十七話 ライゼル戦後編（後書き）

どうも、テイクです。

今回前回、前々回と登場した剣崎様よりいただいたキャラクターライゼルのプロフィールを出したいと思います。もらったまま、変えていません。そのため、長いですが、ご了承ください。

名前…ライゼル・ザルベージャ

通称…ライ

容姿…体つきは中肉中背の男性に見えるが、顔は目と口以外包帯で隠している（顔だけ志々雄みたいな感じ）。また、体も皮鎧や靴や手袋、フードのついたマントなどで隠している。

フードを外すと髪の毛が現れる、その髪は深緑色で硬く、頭の所々から短い木の枝が生えている。

また、両腕と胴体に茨のツタが絡み付いている。

武装…両手の手甲についたカギ爪と弓矢。パワーよりスピードを主体としている。

正体…かつては普通の人間だったが、とある魔術師（その魔術師の正体は彼にもわからない）に人体改造されて人間ではなくなった植人物人間。頭部と脊髄に相当するところが木の幹のようになっており、それ以外は茨のツタの塊で、それを鎧や衣服、手袋や靴に押し込めてなんとか人の形を保っている。体に巻きついている茨は、入りきれなかったぶん。

性格…荒んだ雰囲気を漂わせているが、基本的にはいい人で頼まれ

たら断れない。だが、自分をこんな姿にした諸悪の根源、ということで魔法使いを敵視しておりその時は狂戦士のように凶暴になる。

身体能力…動くことは鍛えた人なみだが、体が植物なので凄まじい回復力があり、腕や足ぐらいなら自力で再生する。

特殊能力

1. 体を形成する茨を自在に操る。イメージとしては首から下が「隠者の紫」になったようなかんじだが、もちろん念写はできない。首から下は感覚はあるが痛覚はないし、心臓や鳩尾なども急所にならない。

2. 基本植物なので、水と光があれば光合成をして生きていかれる。

3. 植物を食べることで、その植物の特徴を一時的に自分の体に再現させることができる。たとえば春に桜を食べば頭に花が咲き、薬草を食べればその体に薬草の成分が現れる。

4. 植物と会話できる。この時、大抵の植物よりは上位になるらしく、命令するとその相手になった植物は可能な限りライの言うとおりになる。

5. 雑草なみの生命力の強さをもつ。腕や足が切断されても時間がたてば再生するし、最悪首だけになっても条件さえ揃えば再生が可能。

弱点

1. 一番の弱点は頭部。体はどうにでもなるが頭を破壊されるとさすがに死ぬ。

2. 植物なので、火に弱い。いつも着ているマントは実は防火処理がされている。

3. 酒が飲めない。飲むとたた打ち回った拳句に昏倒する。

4. 生殖能力がない。もとは男だったので今でも男の姿をとっているが、実際は体に実がなったりするので雌雄の別はない。

5. 実は賞金首。魔法使いを目の仇にしているため、過去に何人も魔法使いを襲っており、殺した数も一人や二人ではない。中にはライを仇として挑んでくる者もいる。

備考

1. 体が植物、ということで末端部が日に日に伸びていく。それは髪の毛も同じで、肩から腰まで伸びるのに1週間かからない。
2. 切り落とされた体の部分は、頭があるほうにライの意識が残り、頭から離れた部分はそのまま普通の植物になる。

今回出てきたアルゼル君もいただいた設定から生まれたキャラですので、次回プロフィールを載せたいと思います。

間章

広間の中にライゼルの首が投げ込まれる。それに、その場にいた亡国の王女であった者は悲鳴のようなものを上げる。王座に座る、この空間を支配する月色の髪をした幼い少女は、そのライゼルの様子に少々驚いた声を上げる。

「ほう？　我もこの姿になって久しいが、これほど驚いたのは、あの時以来だ。まさか、お前がやられるとはなあ」

少女が呟く。ライゼルは現在気絶しているようだ。さすがは植物人間。人間ではあるが、その生命力は侮りがたい。さすがは悠久の時間を生き残ってきた植物に改造されただけであつた。そこまで考えこいつは今どこに送っていたかなあ、とか考える。どこかの大国の魔法学園辺りに送っていた気がするが、優先順位は低かったために忘れていた。

そして、投げ込んだ張本人が入ってきた。アルゼル・ルーイツシュ、罠造の使い手。自分で選んだ行動に一直線、敵にも味方にもなるような男だ。実力はかなり高い部類に入る。光速思考ライトスピードシンキングと呼ばれる超高速思考により、一瞬のうちに魔法を発動することが出来る。王座の少女ですらその思考スピードには追いつけないとまで言われている。

アルゼルは後頭部で腕を組んで入ってきた。

「はっはっは、ライゼルの奴こっぴどくやられたみたいだぜ」
「そのようなだ。まだ、この世界にこのような骨のある奴がいるとはな」

「な、なんか、面白いやつだったぜ。おいらの罠造トラップオブトラップに反応しやがったからな」

「ほう！」

トラップオブトラップス

あの罠造は瞬時に罠を作り出す能力だ。タイムラグなどなく、最初からそこにあつたかのように設置される。避けるのは至難の業だ。この少女ですら、微妙にがんばる必要が出てくる。

それを破った相手。中々に面白そうだなと少女は考える。いつれ見に行ってみようかと思っていると横合いから声が入る。

「駄目です。今が、どのようなときか心得ているはず」

フードを被った男が言う。それに少女は露骨に嫌そうな顔をする。この男はいつもいつも、少女がやることなすことに小言を言っている。少女の性格ならば普通消し炭にするところだが、一度手放せば手に入らないほど有能な男なので、安易に消すことも出来ない。そのため、この男を納得させる理由を用意するのに少女は困っている。

「わかつている。だが……今回は駄目だ。逆らうな。我は、その男に会いに行く。行かせもらう。いつだって化け物を殺すのは人間だ。そう、我を殺す可能性のある人間に、我は興味がある」
「……………わかりました」

少女がこうなってしまうては止めるのは無理だということを男は熟知していた。それに、少女の命令にはどうやっても逆らうことは出来ない。本能から逆らうてはいけないと思わせる。いや、これは紛れもない本能からの命令なのだ。だからこそ、逆らうことは出来ない。

「さあ、行くぞ！！」

間章（後書き）

キャラ紹介

のら様からいただいた能力設定を元に作ったキャラです。

名前…アルゼル・ルーイツシュ

性別…男

年齢…不明

職業…なし

容姿…小柄で、半そで半ズボンの金髪ツンツン頭の少年。

性格…自分で選んだ行動に一直線、敵にも味方にもなるキャラ。面白いことが好き。

能力…トラップオブトラップス罠造

タライから虎ばさみ、落とし穴やギロチンまで「罠に出来る物から罠自体」を全て創造し設置出来る能力。

光速思考

これは後天的な能力で、罠の創造を活用するには、どこにどのタイミングで、どのような罠を仕掛けるかを考えなければなりません。そして特訓と実戦を繰り返し返すうちに、刹那の間に対象の認識と行動の先読み、罠を思考し発動出来る様になった。これを活用する事により、魔法等も一瞬で発動する事が出来る。簡単に言えばゲームの戦闘コマンド選択中みたいな感じ。

魔眼、名称不明

発動中は全ての物がワイヤーフレームになって透けて見える。これ

により、罨や建物の隠し通路や隠し部屋等も当たり前のように視ることが出来るが魔力には色が付く。この魔眼があるので壁の中や地中にも罨の設置が容易に出来る。

のら様素晴らしいキャラクターありがとうございました。

第二十八話 ゼロ

世界を喰らうものの存在を感じ、ゼロ領域に行ったケイを迎えたのは、大量の世界を喰らうもの。それもほとんどが歩兵以上の城。今だ守護者は誰一人として来ていない。このままでは始まりの七世界が喰われてしまうようなそんな状況。

もちろん、そんなことを望まないケイは魔剣開刀を発動しようとする。

「あゝ、大丈夫大丈夫」

美咲がやってきて、ケイを止めた。能力も使用せずに気楽そうに大群を見ている。そんな様子の美咲にケイは言う。

「何が大丈夫なんだ？ 大丈夫には見えないぞ」

「最強の守護者がいるからな。面倒な日はしなにに限るぞ。ほら、噂をすれば」

美咲が指差したほうをケイを見ると、そこには白のロングコートを身に纏った白髪の男が立っていた。真紅に染まったその瞳はただ、まっすぐに世界を喰らうものを見つめている。その姿には余裕があった。

「あいつは？」

「ああ、あいつはゼロって言って、いつも、この場所にいる奴さ。守護者らしいんだが、あたしにはよくわからないな」

「それはどうなんだ？」

明らかに怪しいのだが、美咲が言うのなら大丈夫なのだろうと思

いケイも見物していくことにする。男は目前まで世界を喰らうものが迫っていても何もしない。いや、何もしていないように見えていただけであった。ゼロを中心に力が広がっていく。

見ているケイたちですら気を抜けば気絶してしまいそんな重圧が二人を襲う。

「くう、やっぱ、あいつ格がちがうぜ」

「そうだな……この重圧あいつに似ている」

ケイの執行者としての師匠にして執行者最強の男。あの男の称号もゼロ。偶然か、それとも別の何かか。そんなことを考えていると、目の前のゼロが動いた。

腕を上げて、面倒くさそうにそれを振る。それだけで、たったそれだけで、世界を喰らうものの軍勢は無に帰した。後にはかけらも残らない。ただはじめからいなかったかのように消え去った。跡形もない。気配すらも、何もなくなっていた。

だが、今回の世界を喰らうものは更に出現した。

「あゝ、今日って穴日か」

「穴日？」

「ああ、穴日ってのは、世界を喰らうものが無限湧きする日のことだよ。これは一週間に一回は来る。そのたびにゼロが出てきてんだけどな」

「そうか」

ケイが再びゼロに視線を戻すと、ゼロは世界を喰らうものの出てくる穴をじっと見ていた。何かを呟いているようにも見える。何を呟いているのかはわからない。読唇術を行使してもよかったが、さほど興味はないためやめた。

再び手を上げて振る。そうすると、やはり先程と同じように世界

を喰らうものは消え去った。しかし、学習しないのか世界を喰らうものは更に溢れ出して来る。先程よりも多く、更に僧侶まで、混じっていた。

「おい、さすがにアレはまずいんじゃないか？」

「大丈夫だって、あいつは一人で王の相手も出来るんだぞ。そいつが、アレくらいの敵で負けるわけないだろ」

ケイは今だ会ったことがなかったが、王は世界を喰らうものの階級の最上位、最強の位置にいる存在だった。聞いた話では、王の力は守護者が三人以上いてやっと勝てるレベルらしい。それを一人で相手が出来るとは、ゼロの強さは文字通り次元が違う。

ゼロが手をあげる。三度目、何度見ても、そのトリックはわからない。ゼロが腕を振るえば、全てはまさしく、ゼロの名が示すがごとく、消え去っていた。初めから、そこに存在していなかったかのように。世界を喰らうものが出現していた穴も、同様に消え去った。

「凄まじいな本当に」

「さあてと、終わったならあたしは帰る。じゃあな」

「ああ」

美咲は自分の世界に帰っていった。何をしに来ていたのだろうか。ゼロがいるならば来る必要はない。それでも見に来たのはどういうことなのか。ケイにはわからなかった。そんなことを考えていると、ゼロがケイに気がついた。すべるように近づいてくる。

「お前が新しい守護者か」

「ケイだ」

「そうか。私はゼロ。このゼロ領域の守護者だ。歓迎はしない。せいぜい長く生きることだ」

「せいぜい生きさせてもらうよ」

「さて、では」

ケイは殺気を感じ、咄嗟に後ろに飛んだ。そこを見えない力が突き進む。もう一瞬遅ければ消え去っていたかも知れない。それだけに、確信する。ゼロは本気だ。本気で、ケイを殺そうとした。目的などはわからないが、それでも殺そうとしたのだけは確かだった。

「何をする!!」

「お前の力を見せてもらう」

そう言って再び、不可視の力を放つ。赤鋼アカガネを使い、ケイはそれかわす。ゼロの動きは赤鋼アカガネでは見えなかった。そもそも、赤鋼アカガネを使つてはゼロを知覚することすら不可能であつた。異常。ゼロという男得体がしれない。

だが、本気で戦わなければ殺される。それだけは、はっきりしている。

「良いだろう、やってやる!!」

ケイはこんなところでは死ねないのだから。

「おーおー、始まった始まった」

帰つたはずの美咲がケイとゼロの戦いの様子を見ている。そこにミルがやって来た。呆れた顔をしている。

「まったく、趣味が良いことはいえないですよ」

「そういうミルだってしっかり見に来てんじゃん」

「そういう気分でしたの」

「へ、お前らも来てたのか」

カインが二人の下にやって来た。

「なんだ、カインのオッサンもか」

「オッサン言うな。これでもまだ三十代だぞ」

「十分おっさんですわね」

「ひでえ」

そんな会話を繰り返しつつ、三人はケイとゼロの戦いに目を向ける。向こうでは、守護者同士の決戦が繰り返られている。他人の介入する余地もない、戦いが行われている。それを三人は面白い出し物でも見るような気分で見ている。

「どっちが勝つと思う？」

カインが二人に聞く。

「ゼロでしょう。最強の守護者なんですから」

「だよなあ」

「あたしはケイに賭けるぜ。なんかやってくれそうじゃねえか」

「まあ、全てはあのゼロの能力を超えられるかですわね」

三人は話すのを止め、黙って、戦いを観戦し始めた。

第二十九話 ゼロとの戦い前編（前書き）

1ヶ月お待たせしました。

これから復帰です。

これからもよろしく願います。

第二十九話 ゼロとの戦い前編

ケイは不可視の攻撃を避けていた。赤鋼アカガネでも見ることが出来ないアンノウン。それを自身の感覚だけで避けていく。いや、わざと避けさせられていた。明らかにゼロは遊んでいる。その事実にはケイの怒りを誘うが、冷静さを欠いて勝てる相手ではない。ケイにはわかっていた。

だから、こそ、ケイは慎重に隙を探す。重力も、普通の物理法則も無関係なゼロ領域を利用し、三次元的に避けていく。それでも、時々コートコートの裾にかする。かすればかすった部分は最初からなかったかのように消え去る。

「何だこれは」

「しゃべっている暇があるのか？」

「くっ！」

ゼロの攻撃は受けず、避ける。さつきから、近づくことすら出来ない。そもそも、ゼロは動いてすらいらない。今だ、勝負にすらなっていないのは明白だった。

「魔剣開刀！！」

魔剣を展開しゼロに向かって射出しようとするが、魔剣にゼロの力が降り注ぐ。その瞬間、魔剣は消えうせた。消滅させられたわけではないため、もう一度出そうと思えば出せる。どうやら、ゼロの力は問答無用で、物質や能力などを消滅させる能力ではないようだ。かと言って、それがわかったところで何かが変わるわけでもない。ケイは避けながら、作戦を考える。とりあえずは、このまま一人で戦っていてもどうにもならないであろうことだ。

「我は生命の樹を授かりし者。第1のセフィラケテル、思考や創造を司る、数字は1、色は白、宝石はダイヤモンド、惑星は冥王星を象徴し、王の横顔を表す。神名はエヘイエー、守護天使はメタトロン。最後の剣を抜き、我が前に姿を現せ!!!」

メタトロンを呼びだす。右腕の刻印より、メタトロンが顕現した。

「契約の天使メタトロン、呼び出しに応じ参上した」

メタトロンを見たゼロが感嘆の声を上げる。

「ほう、ここから、そんなものを呼び出すとは」

「誰ですか、アレは？」

メタトロンがゼロを見てケイに聞く。その目には、驚きと警戒の色が宿っていた。そう、メタトロンはゼロという男を明らかに警戒していた。天使にまで、警戒される男とは一体どれほどののだろうか。いや、それでも負けるという選択肢はない。

「ゼロ、守護者最強の男だそうだ」

「そうですか。そして、なぜあなたはそんな男と戦っているのですか？」

「成り行きだ」

「そうですか。わかりました。本気で行きましょう。出なければ、死にます」

「ああ」

メタトロンがゼロ領域にその純白の翼を広げ舞い上がる。美しき羽が舞う。ケイはゼロ領域を疾走する。ゼロは立つ、その全てをた

だ、見て、受けるようにして能力ちからを放つ。

「アレに当たるなよ！」

「了解ですマイマスター」

メタトロンがゼロへと飛ぶ。炎の剣を振るう。燃え盛る炎の剣がゼロへと迫る。しかし、ゼロは避けることもその剣を見ることがもしない。ただ、自然体で立っている。切り裂けるメタトロンは思う。だが、炎の剣はゼロに触れるか触れないかの位置で炎の剣が消えうせた。それでも、メタトロンに驚愕は許されなかった。気がつけば、メタトロンは吹き飛んでいた。

ケイはその隙にゼロの背後に回る。魔剣開刀を使い、一本の魔剣を取り出す。

「魔剣ダーインスレイヴ」

ダーインスレイヴ、北欧の伝承に登場する魔剣。一度鞘から抜いてしまうと、生き血を浴びて完全に吸うまで鞘に納まらないといわれた魔剣。獣の牙を思わせる漆黒の刀身をした禍々しき魔剣。血を吸わせると、敵の命を喰わせると脈動する。

ダーインスレイヴは敵の血を吸わせるまで止まらない。たとえばのような壁があろうとも、体がばらばらになろうとも、相手の血を吸うまで使用者の能力を大幅に強め、止まることがない。止まれないう。暴走状態へと陥らせる。しかし、ケイはそれを制御する。

「はああああああ！！」

ダーインスレイヴを振るう。しかし、ゼロの特殊な力によって防がれ、その刃はゼロには届かない。しかし、先ほどまで、全てを消していたゼロの力があるというのにダーインスレイヴは消滅しな

った。

「わかった。お前の力が何なのかはわからないが、どうやら魔力を絶えず供給していれば消滅を防げるらしいな」

正確には常に魔力を供給することで消滅している部分を強制的に修復している。なぜ、ケイがその事実気がついたのかといえばメタトロンのおかげだ。ゼロの力が全てを問答無用で消すような力なら、あの炎の剣を消した時にメタトロンも消滅していたはずなのである。

しかし、メタトロンは消滅しなかった。その事実を見て、ケイはどうして消えなかったのかを考えた。そして、思いついた。それは魔力が供給されているか、されていないかであった。メタトロンが出した炎の剣は出したら魔力を注がなくても存在するものであった。対してメタトロンは常にケイから魔力を供給されている。あの魔剣にしてもそうだった。最初打ち出したあの魔剣群、あれは出すときだけ魔力を使うが、それ以外は使わない。

そう、つまり絶えず魔力などが供給され存在が確定するものにかんしてはゼロは消すことが出来ない。ならばあとは話が簡単だ。常に魔力を供給しつつ戦えば良い。そうすれば武器が消されることはない。

「この短期間でその事実気がつくか。中々にやる。だが、それがどうした!!」

「くっ!」

ケイがメタトロンの場所まで一瞬で吹き飛ばす。何をされたかはわからないが、本当に一瞬で吹き飛ばされた。しかし、これでゼロに攻撃をすることが出来る。

「行くぞ！」

ケイはゼロへと疾駆した。

第三十話　ゼロとの戦い後編

ダーインスレイヴを振るう。その一撃はゼロには届かないが、それでも、攻めることができるようになっていた。魔剣の力で上昇した身体能力を使い、ゼロに斬撃を繰り出す。それをゼロは防いでいく。ついに攻防戦、勝負になってきていた。

「ほほう、がんばりますね」

「カインさん、嫌味ですか？」

カインの言葉にミルが言う。

「ちげえよ。本心だよ。この短期間であれだけ出来るようになったんだからな」

「あら、そうは聞こえなかったんですよ。まるで嫌味のようにです」「あたしにもそう聞こえたぜ。それが妻子持ちの言葉かよ」

美咲もカインを非難する。カインはそんなつもりはないんだが、と言うが本当に嫌味のように聞こえている二人からしたら意味のないことだ。そんな会話を繰り返していると、カインに電話がかかってくる。どうやら、この場所でも電話などは通じるようである。

「あ、もしもし？　ああ、お前か。なんだ？」

どうやら、カインの知り合いのようである。

「ああ、奥さんからですね」

「お、あたしゃ、あの電話がいつものアレだと賭けるぜ」

「賭けにならないですよ。わたしだってアレに賭けますから」

「おいおい、それはないぜ」

と、そこまで話したところでカインの悲鳴がこだまする。二人は予想通りだといった顔。

「待ってくれ！ 今すぐ帰るから、離婚だけは！！ わかった、すぐ帰る。すぐ帰るから」

携帯をきるカイン。そして、二人に向き直り言う。

「用事が入った帰る」

「そうですよ、じゃあ、また」

「じゃあな」

「ああ」

カインがもうダッシュで帰っていった。それはもう、光の速度すら越えているとさえ思ってしまうほどの早さだった。一瞬のうちにカインの体が掻き消えたようにも見えた。よく見れば残像すら見えていた。

「やっぱりでしたわね」

「そうだな。っと、観戦にもどるか」

「そうしましょうか」

そして、何事もなかったように観戦に戻る二人なのであった。

ゼロは驚いていた。この短期間で能力の弱点を見抜くとは思っていなかったからだ。あの頭脳派のミルですらもう少しかった。ど

うやら、このケイという男、当たりなのかもしれない。そんなことを考えながらゼロはダーインスレイヴの斬撃を防いでいく。これ以上は能力で防ぐのが難しくなってくるレベルへと到達しそうであった。

「だが、まだまだだ!!」

ケイはゼロにより吹き飛ばされる。そこにメタトロンが突っ込ん
でくる。再びゼロの能力の及ぶ領域へとぶつかる。今度は炎剣は消
されることはなかった。そのまま切り払おうとするがやはり、ゼロ
には届かない。それでも先ほどよりは前に進んでいた。

「すぐにそっちに行く」

ケイはゼロの背後からダーインスレイヴを振るう。ゼロの表情が
初めて変わる。ダーインスレイヴの刃がゼロの能力の壁にぶつかる。
少し押し戻されるがケイは更に踏み込んだ。そのままダーインスレ
イヴを振り切った。

しかし、それはゼロのマントをかすただけだった。寸前で体を
捻りその剣戟から抜け出したのだ。動きはやはり素人ではない。だ
が、ついにゼロまでその刃が届いた。

「チッ、かすっただけか」

「……………なるほど、流石だ。これなら私も本気を出せそうだ」

「なに？」

刹那、ゼロから先ほどまでとは比べ物にならない圧力が放たれる。
冷や汗がたれる。先ほどまでの戦いとは本当に次元が違う。これが
守護者最強の男の本気。生まれてから感じたことのない感情が駆け
巡るがケイはそれを押さえつける。逆に、ケイは笑っていた。これ

ブレッシャー

ほどの相手、これほどの差。今までの生涯で二度と出会うことはないだろう。ようやく自分が本気で戦うことの出来る相手。自分の存在意義を理解する唯一の存在。それに出会えた歓喜。それがケイを駆け抜ける。

「面白い！」

「……その余裕いつまで保つか。見せてみる！！」

・
・
・

結果を言えばケイの負けであった。完膚なき敗北。逆に清々しいほどだ。本気を出したゼロには一度も攻撃がかかることはなかった。果てには近づくことすら出来なくなっていた。力の差がよくわかる戦いだった。

ケイはゼロ領域に横たわっている。ゼロは既にどこかへと消えていた。

「ははっ……執行者がこの様か。笑わせる……」

「お疲れ様ですの。たいしたものでしたのよ」

ミルがやって来て見下ろしながら言った。

「慰めならいらないぞ」

「あら、違いますのよ」

慰めではない。本当のことだ。あのゼロを少しでも本気にさせたのは賞賛に値する。ミルを含め、今ここにいる守護者たちでゼロを本気にさせたのはカインと今はなきあの守護者の二人だけだ。つまり、これで三人目。誇って良い。やはり、歴代の七の守護者は一味違うようだ。

「……そうか」

「さてと、落ち着いたのなら早く帰ったほうがいいですよ。あなたにも心配してくれる人はいるでしょう？」

「ああ」

「じゃあ、わたしは帰るですよ」

ミルはそう言って帰っていった。ケイはその後しばらくしてから立ち上がった。すぐに脇に控えていたメタトロンがやってくる。消えたと思っていたが消えていなかったようだ。うまく視界の端に居たみたいだ。

「申し訳ありません。私が不甲斐無いばかりに」

「いいさ、俺もそれは同じだ」

「そう言っていただけと幸いです。では、またいずれ……」

「ああ」

メタトロンが霧散し右腕に戻る。それを確認してケイは自身の世界へと帰っていった。

・
・
・

「ただいま……」

「……………」

ネルは帰ってきたケイをじっと見ている。

「どうした？」

「……………なにかあった？」

「まあ、少しな」

「……………そう」

ネルはそれ以上何も聞くことはないと呼んでいた本に視線を戻す。彼女なりに気を使っているのだろう。ケイはそれをありがたく感じつつ自室へと入った。

第三十一話 思い

ケイは破魔の世界へと来ていた。相変わらずこの場所はいつでも美しく桜が咲き誇っている。変わったことは何もない。この前に来たときと寸分も変わっていない。そんな通りを歩いていると兎紗義が来ていた。

「おや、旦那じゃ、ありやせんか。お久しゅう」

「ああ、久しぶりだな。儲かってるか？」

「ええ、もうかってやすぜ。旦那も何か見ていきやすか？」

ざっと、広げられている商品に目を通すケイ。珍しいものであったが、今のケイに必要なものはなかった。お土産を買ってもって帰るという手もあるのだが、今はそれをする気はないため、兎紗義の提案を断る。

「そうですか。では、また今度」

「ああ」

ケイは城へと向かう。この世界の主の下へと向かった。

「久しぶりなのね」

「ああ、そうだな破魔」

「手入れもきちんとしてくれてるみたいだから、ここも結構栄えたのね。前の主とは違ってまあ、それでもまだ2回目だけど、来てくれるからなのね」

「そうか」

ケイの様子に破魔は首をかしげる。どこか、いつものケイと雰囲気

気が違うような気がしていた。何かあったのかは破魔が使われていないのでわからないが、何かあったのかは確かだろう。破魔は聞いてみることにした。

「何かあったのね？」

「……わかるか？」

「もうわかりね」

「そうか。俺そんなにわかりやすいか？」

破魔は黙ってうなずいた。それに苦笑するケイ。本人からしたら誰にもわからないようにしていると思っっているのだろうが、見る者が見たらわかる。雰囲気がいつもと違うのだ。何かあると思うのは当然だ。

「で、何があったのよ」

「わかったよ。実はな……」

ケイは事情を説明した。ゼロという男に負けたことを。破魔は行き成り呆れた顔になった。

「どうした？」

「いや、あんたもつと重大なことと思ってたら拍子抜けしただけなのよ。それで？ 負けただけでヘコんでたわけなの？」

「まあ、そういうわけじゃないんだがな。久しぶりなんだよ。負けたの。完敗だった。俺も強くなってこれ以上、上がないとまで言われてきたんだけどさ、まだ上があるってわかってな」

「まるで子供みたいねん」

「酷い言われようだな」

確かにそう言われても文句を言えないのだが、真正面から言われ

ると来るものがある。

「言われても仕方のない理由なのね。まったく心配して損したのね」
「と言われてもな、久しぶりに負けてものを思い出してたんだよ。
で、がんばらないとなとか思ってたわけだ」

「もういいのね。とりあえずはゆっくりしていくといいのね。この
世界を見ていくのはあなたの役目なのね」

「それは初耳なんだが」

「言ってなかったのね。私の力は今ちょっと、眠ってるのね。それ
を起こしてきてもらいたいと思っているのね。まあ、暇なときでい
いのね」

「ああ、わかった暇なときにやってみるさ」

ケイはそういう外を見る。青空と城下の全てを見渡せる。桜の花
びらが舞う。変わったところはなにもないと思っていたが、どうや
ら違ったようであった。ここから見れば違いがよくわかる。ここに
来たばかりの頃よりも華やかに、美しくなっている。遠くには大き
な西洋の城まで出来ていた。これは持ち主が与える影響だろう。

「……………じゃあ、認めなきゃな。そろそろ執行者ではないことを
……………じゃあ、俺は帰るとするよ」

「そうね。今度はお土産がほしいのね。きちんと持ってくるのね」
「了解」

ケイは破魔の世界から自分の戻るべき世界へと戻った。

第三十一話 思い（後書き）

次回はもろもろの事情により更新はお休みです。再来週にまた会いましょう。

第三十二話 使い魔ズ

現在、ケイ、ネル、リリイ、ランド、カイル、ミズチ、テュール、フェンリルの班は浮遊大陸北にあるレムエリオス山に来ていた。学園での学園外研修授業である。引率は、セフィス、レミリアの2人の先生である。

世界では戦争の危機だといえども学園の授業は休みにはならなかったのである。

「しかし、ここで何をするんだ？」

「この山には確か、主というかなんと言うかこの浮遊大陸の守護獣ってのが居るのよ。今回はそいつを探し一番に見つけるのがこの授業の目的よ」

リリイが答えた。この授業の目的は探査と魔獣に襲われたときの対処を見るのである。どうにも、世界は戦争ムードが濃くなってきていて、早めに危機管理能力を磨こうという算段なのである。守護獣の山なので、それなりに強力な魔獣がいることといざというときはその守護獣が助けてくれるため安全であるということもある。

「フォッフォッフォ、それでは、皆の衆精一杯がんばるんじやぞ。レミリア先生に怪我を治してもらいたいからと言って怪我するんじやないぞ。男子諸君。彼女の膝を使ってよいのはワシだけじゃ」
「……それ、違う」

セフィスとレミリアの馬鹿な掛け合いが終わり、それぞれ探索開始である。一斉に多くの班が山の中へと入っていく。それをセフィスは面白そうにレミリアは心配そうにおどおどしながら見ている。ネルたちの班も続こうと猪突猛進のフェンリルが飛び出そうとす

る。

「おっしや行こうぜ！」

「オラ、まてクソチビ」

それを飼い主のテュールが髪の毛を引っ張って止める。

「誰がチビじゃコラー!!」

「お前だよ。突撃馬鹿がいつものように突撃をかましそうになったから止めたんだ」

「早く行ったほうがいいだろうが」

「今回ばかりはそうは行かないんだよ馬鹿が」

その意見にリリィが賛同する。

「テュールの言う通りよ」

「なんで？」

わかっていないカイルにリリィが呆れた顔をしながら説明する。守護獣はこの一帯最強の存在である。だからこそその守護獣であるのだから当たり前だ。そして、ここに住み着くような魔獣は絶えずその守護獣の魔力にあてられる。弱い魔獣はそこですぐさま逃げていくが、力の強い魔獣は逃げ出さず逆にその魔力によってより強く変容してしまう。そのため元から強い魔獣が更に強くなってしまふのだ。いくら神話の魔狼でも封ぜられている状態ではひとたまりもないだろう。人間は言わずもがな。

「つまり、無策で突っ込むと死ぬと？」

「理解してくれて助かるわ。だから、勝手な行動取らないでよね。死ぬわよ」

「りよ、了解しましたキャプテン！」

「それで、具体的にどんな策をとる気だ？」

話を聞いていたケイが言う。ここで止めたということは何か策があるということだ。あるのならさっさと話してさっさと行ってしまった方がよい。早く行けばその方が評価はよいだろうからだ。

「まずは、ちょっと様子見ね。ランドとミズチ、フェンリルとケイ、先に行って安全を確認して来てくれないかしら」

「なるほど、妾たちが先行し、その後にお主らが来るのじゃな」

「なら、オレ行ってよかったじゃねえか！」

フェンリルがテュールに噛み付く。それをテュールは無視する。いつそう酷く噛み付くがその全てをテュールは無視した。フェンリルが言うことも最もだが、作戦を知っているのと知らないのでは大きな違いがあるからだ。

というわけで、作戦通り、ケイ、ミズチ、ランド、フェンリルの4人はネルたちよりも先に山に入ってしまった。まず山に入って感じたのはこの場所に満ちる魔力の違いであった。浮遊大陸の他のどの場所よりも濃密で体に絡み付いてくるかのような感触がある。そして、人外でなければ色々とまずいことになりそうであった。先に来たのは正解だったようだ。これを知らず何も対策していなければ気分が悪くなるだけではすまない。最悪魔力に中てられれば死ぬ可能性すらある。その証拠に先ほど無策に突っ込んだ別の班の奴らは倒れている。守護獣とやらは相当高位なものらしい。

「ふむ、なるほどのう。これはこれは凄まじい魔力じゃわ懐かしいの」

「そうですね。体に絡みつくこの感触、彼でしょう」

「うへ、オレはあいつ苦手だぜ」

ミズチ、ランド、フェンリルの3人は魔力を感じた瞬間から、何かに気がつき、3人でそんなことを言っていた。何のことだかわからないケイは3人に何のことだか聞いてみた。ランドはスルーし、フェンリルは元から答える気がなかったので、ミズチが説明する。

「うむ、お主は異世界から来たからわからんだろうが、ここにおける守護獣には妾たちは会ったことがあるのじゃ」

「なるほど、それで懐かしいとか思ってるのか」

「そうじゃ、なるほどいなくなっておったと思ったらこのような所におったのじゃな」

「まあ、懐かしと思うのもいいが、警戒はしてくれよ」

「おう、来たな」

茂みの中に気配を感じたケイたち。そこから魔獣が飛び出してきた。変異した異様な魔獣。通常の生態系ではありえるはずのない魔獣が現れた。蜘蛛のような魔獣だが、その顔は狼のようであった。

「おい、お前の親戚が来た見たいだぞ」

「誰が親戚だよ！ 完全に蜘蛛だろうが！」

「だが、顔は狼だぞ」

「そこだけじゃねえか！！」

ケイとフェンリルが馬鹿な冗談を言い合っている間に仮名蜘蛛狼は戦闘態勢に入った。ケイたちも構える。蜘蛛狼が異常な速度でケイたちに接近する。狙っているのはフェンリル。封印された状態だということを的確に見抜いたのか、それとも単に近くに居たからかわからないが、フェンリルにその牙を向ける。

その牙を足で器用に受け止めて蹴り上げる。そのまま連続攻撃と行こうとしたが、蜘蛛狼が糸を吐き、宙に止まったため、連撃とは

行かなかった。

「チッ！ おい、そっち頼む！」

「任せました」

ランドがナイフを取り出し投げる。それは蜘蛛狼には向かわず、蜘蛛狼が木に貼り付けている糸に向かった。いとも簡単にランドのナイフは蜘蛛狼の糸を切り裂く。行き成り自分の糸が切られたことで、蜘蛛狼が地面に落下する。その隙を逃さずにランドが蜘蛛狼を蹴り上げる。

「では、次は頼みましたよ」

「任せろじゃ」

飛んできた蜘蛛狼にミズチはその小さな体からは考えられない蹴りを放ち、更に宙に打ち上げる。顎を蹴り上げたために蜘蛛狼は一瞬その動きを停止する。その好きにミズチは水进行操作する。9つの水龍が形作られミズチの周りに浮かぶ。

「行け」

ミズチの命令1つで9つの水龍が蜘蛛狼に向かう。それらは蜘蛛狼の足にそれぞれ噛み付き、引きちぎる。人に否応なく不快感を与える叫びをあげながら蜘蛛狼が落下する。水龍の最後の1匹が蜘蛛狼を再び空へと打ち上げる。

「ほれ、最後はお主に譲ろう。きつちりと決めよ」

「そっちでやってくれた構わなかったんだが、わかった任せろ」

ケイが破魔を抜き、地を蹴る。そのまま、落下する蜘蛛狼に破魔

をあわせ、一閃する。首と胴体が2つに切り裂かれた。始めは首の方が動いていたが、それも時間と共に動かなくなり絶命した。

「さて、先を急ぐとしよう」

「ああ」

ケイたちは主たちのために、先を急いだ。

第三十三話 少女

ケイたちが進んでいると、だんだんと生徒の数が増えてきた。力のある生徒はこの状況に適応して来ている。しかし、いまだ動きはぎこちなく魔獣との戦闘に四苦八苦しているようであった。ケイたちは慣れたとはいえ十分に警戒しながら道をすすで行く。

「うむ、近づいておるようじゃが、まだまだじやのう。妾たちが先に見に来て正解じゃわい。妾のマスターならばとつくの昔に死んでおるじやろうな」

ミズチがそんなことを呟く。ケイも確かにアレでは蜘蛛狼にであった時点でやられているだろうと思う。

それから何度か魔獣の襲撃を受けつつも、難なく撃退して前に進むが、山の頂上は未だに遠い。外から見たときはそんなに高いとは思わなかったがどうやら、この山は外と山中とで、大きさが異なっているようだ。空間にまでここに満ちる魔力は影響を与えているらしい。

「ここらで一度戻ってネルたちを呼んできたほうがいいんじゃないか？」

「そうじやのう。では、一度戻るとしようか」

大体の安全は確保できたと見て、ケイたちは一度ネルたちの下へと戻った。ネルたちに山の状況を伝えなるべく問題のないようにしてやる。魔力の影響は完全に防ぐのではなく、少しだけにとどめる。この程度の魔力になれておけば今後、何かの役に立つ可能性があるからだ。ここは本来そのために使われるのだろうとミズチが言っていたこともある。

「それで、先はどうなっていたの？」

リリイが聞いてきたので、歩きながらランドが説明する。外で見るより、山は遥に高く、魔獣もかなり出るということを説明した。カイルはそれだけで、泣きそうになっていた。テュールはその事実の妙に嬉しそうにし、リリイは苦い顔をしていた。ネルだけはいつもの無表情でなにもかわらなかった。

「それは、凄いわね」

「ひいい、僕はここで帰るよ——ぐぎゃ！」

怖気づいたカイルが180度反転し、一目散に駆け出そうとしてリリイに制服の首根っこを掴まれた。カイルは行き成り首根っこを掴まれたせいで、首が絞まり、一気に血の気が引いていき、顔が真っ青になった。それも気にせずリリイは引きずっていく。そして、気が付いたカイルがまた逃げ出そうとしたので今度こそ手刀が入り、カイルの意識を刈り取った。

「おいおい、それはやりすぎじゃないか？ 邪魔なのはわかるが、もう少しやり方があっただろ」

「これが一番よ」

その後、気が付いたカイルが天使さんがなんちゃら言っているがみんな無視した。だんだんとおくに入っていくうちに、ケイたちの予想通りに皆違和感を感じていた。魔力にあてられたのだ。対策と心構えのおかげで大きな影響を受けなかったために進むのには問題ないが、リリイの判断で一度休むことになった。大きな影響は出ていないが、これからは出ないとは限らない。

「それにしても、やべえとこだなここは」

テュールが呟く。それにうなずく一同。満ちている魔力もそうだが、ここに居るであろう魔獣の気配が半端ではない。わかるものにはわかる恐ろしさが満ちている。それだけで気絶してしまいそうになる。ネルたちは大丈夫であろうが、案の定カイルは何度か気絶した。

「あやつの縄張りじゃなからの」

「あやつ？ あやつって誰？」

「うん、その前に構えよひよっこ共！ お客さんが来たようじゃぞ！」

ドーン、と上空から何かが降り立った。地面が陥没し、砂煙が巻き上がる。しかし、砂煙が収まっても、ネルたちは敵の正体を知ることが出来なかった。そもそも、敵自体その姿を見ることがすら出来なかった。そう、敵は目には見えなかったのである。透明な魔獣が敵のようである。そんな魔獣、このような地域にいたのかと思うリイであったが現に現れてしまったので言っても仕方がない。とりあえずこの状況をどうにかしなければならぬのだ。

「……………こいつ、なに」

ネルがケイに聞く。ケイならば透明化した魔獣ですら見る事が出来るからだ。ケイが調べた結果。魔獣の形がカメレオンに近いことがわかった。ただカメレオンと違い手は器用な人間の腕、足はダチョウのような感じで二足歩行している。手は器用さを追求して人間に、足は二足歩行で早く走れるダチョウのような脚へと進化したとしか思えないようなカメレオンだ。これもここでのしか観測されたことのない魔獣で名前がなかったためカメレオンと暫定的に呼ぶこ

とにした。そのまんまであるが、そんな悠長に考えている暇はない。

「散開!!」

リリーの指示で、一斉に散開する。対処が遅れていると思うケイだが、カメレオンは動いていないため、問題はなかった。ケイにか見えないカメレオンは眼をギョロリと動かして、1人1人、吟味するように眺めまわしている。ケイ以外には見えないが、気味の悪い視線を感じることは出来るため、怖気が走っていた。

「……………気持ち悪い」

「同感よ、なんというか、変態が近くにいるみたいな感じね」

まったく正解である。それを言ったら士気に関わるので言わないでおく。しかし、このカメレオンもどうやら彼女たちの予想通り変態みtaiである。見ているのは彼女たちとミズチである。特にスカートから見える太もなどをである。彼女たちはもとより、見えているケイも不快である。変態が近くについて心安らぐ者がいた方がおかしいだろう。

カメレオンはリリーに狙いを絞ったのか、予想外に早い動きでリリーへと突撃した。

「リリー行ったぞ!!」

「わかってるわよ。気持ち悪いったらありやしない!!」
アースウォール
「土壁!!」

リリーが作り出した土壁アースウォールにカメレオンが激突する。全属性最高の硬度を誇る土壁は崩れることなくカメレオンを弾き飛ばした。しかし、それでやられるはずもないカメレオンは再度リリーに向かおうとする。そこにケイとテュールが立ちはだかった。

「見えてるのか？」

「いや、見えねえ。だが、温度はわかる」

「なるほど。なら、一気に終わらすか」

「だな」

テュールが炎の槍を放ち、ケイは災い招く赤い枝を解き放った。
レーヴァテイン
高火力でカメレオンを消し炭に変えた。

「チッ、てめえとやると俺が強いのかわからねえな」

「そうでもないだろ」

そこで他に敵の気配がないか探っていると、1つの小さな気配を感じた。

「!？」

「ちょ！ どこ行くのよ!!」

その気配は小さな少女のようなものであった。もし、ここにそんな少女がいるならば危険だとケイはそちらに走り出した。そして、見つけたのは気を失った月色の髪をした幼い少女であった。

第三十三話 少女（後書き）

ようやく更新することが出来ました。

お待たせしました。

相変わらずリアルは忙しいので不定期更新となりそうですが、がんばって更新して行こうと思います。

第三十四話 見つけたもの（前書き）

お待たせしました！！。

ようやく更新です！！

いや、本当に申し訳ないです。リアルが忙しかったとは言えここまです更新できないとはまったく思ってたませんでした。

クオリティは相変わらずですし、これから先の更新の予定も微妙なところですが、完結までやめる気はないので、これからもよろしく願います。

第三十四話 見つけたもの

「なによ、その子」

走り出したケイに追いついたリイが聞いた。ケイが抱えている少女。このような場所にいるということは普通ではないことが予想される。もし、危険があるのならば、すぐにでも何とかしないといけない。同じく少女の状態が悪くても連れて帰る必要がある。そして、先生に報告しなんとかしてもらうのが一番である。学生である自分たちの領分ではない。

それでも、どうするかはケイの返答しだいである。

「……………」

「……ケイ？」

「ん、いや、なんでもない。それより、この子をどうするかだ」

「連れて返った方がいいんじゃないかしら。この辺りは危険だし。」

一応、この子人間よね？」

「……………ああ」

アカガネ 赤鋼で確かめたわけではないが、魔力やその他の気配を探ればアカガネ 鋼を使わなくてもそれくらいはわかる。魔獣や魔人、異形の者は人間とはどこか違う気配や魔力、独特の気を持っているものなのだ。例外として、いくつか気配も魔力も気配も、気も人間とまったく変わらなないが、その内に異形を飼っている者もある。しかし、それはあくまで例外で、このような人のいない場所にはいない。そういった種は総じて人間を食い物にする。だから、いるのも人間と同じ場所だ。

だが、それではこの少女がなにもものなのかという質問には答えられないだろう。アカガネ 赤鋼で調べるのがいいだろうが、先ほど述べた種族

はそういう解析をも騙すことがあるから一概にもそうは言えないと思われる。

「そう……それじゃ、1度戻りましょう」

「チッ、ここまで来てよ」

「仕方ないでしょ」

テュールはしぶしぶだったが、このまま少女を放っておくほど外道でも、落ちぶれた男でもないので、戻ることには同意した。その間も少女が目覚める気配はない。ここで騒がれても面倒なので、都合である。全員で麓まで戻っていると、おかしいことにケイが気が付いた。どういうわけか、先ほどまでいた魔獣の気配がなくなっていたのだ。倒された気配もない。忽然と姿を消していた。逃げたのか、それとも何かあったのか。

「……………」

「……………何かあった？」

「…………いや、気のせいだ」

ここでそれを言っても心配をかけるだけだとケイは判断して何も言わなかった。どうにも、この少女何かあるような気がする。とりあえずは目覚めてから聞くことにしようと思った。帰る分にはかなり楽だからだ。それに、この少女のせいなのかかわからない。生徒の誰かが何かしたのかもしれない。そのためまだ判断するわけにはいかない。

とりあえずは警戒しつつ、麓へと戻るのであった。

世界のとある場所にある古城。

「ほっいのほっいっとライゼルく生きてるか」

鉢植えに首を植えられたライゼルにアルゼルが話しかける。ライゼルはこれだけ見れば死んでいるように見えるがきちんと生きている。そういう種類の異形である。このような状態になったのは以前、魔法使いを殺して回っているときにやられてしまい、アルゼルが核である首から上だけを回収したせいだ。そのままでも問題ないのにアルゼルが面白がって鉢植えに植えたせいでこの様である。

「……何のようだ」

話しかけてきたアルゼルにライゼルはそれに露骨に不機嫌そうにするがアルゼルはまったく気にせず話しかける。

「いや、ほれ、近況でも伝えとこうって思ってね。首だけじゃ、わかんないでしょ？」

「大きなお世話だ」

「ほれほれ、みろみろ」

報告書をグリグリと鉢植えのライゼルに押し付けるアルゼル。鬱陶しいがまだ再生出来ていないので払いのけることもできない。とりあえず、ライゼルはそれを見た。

「何をしているんだあいつは」

「さあ、おいらにはまったくわかんない。だが、面白いことにはなりそうぜよ」

「お前の感想はどうでもいい。面白いなど関係ない。ただ、殺すだけだ」

「え、いいじゃねえか。面白い方がいいじゃねえか。面白か

「だったらおいら、誰の味方にもなるぜえ？」

「……」

会話をするのも億劫になりライゼルは目を閉じ回復に専念する。早くこの地獄から抜け出すならいますぐにでも回復しなければならぬ。

「さあて、じゃあ、おいらはもう一眠りでもしてくるかね。じゃあな」

アルゼルは部屋から出て行った。ライゼルもまた再生のために眠りに入った。

部屋を出たアルゼルはバルコニーに立って城下を眺める。そこには何もない。あるのは死人の群れだ。これほどまでにおぞましい光景が他にあるだろうか。

「面白くなってきたね」

「何をそんなに楽しんでいる」

全身黒くめのフードを被った男がバルコニーの欄干に立つアルゼルに言った。

「ああ、あんたか。何がだ？ こんなに楽しいことが起こってんだぜ？ これを楽しまないで何だってんだよ？」

「フン、我らが復讐をただの遊戯だと思うか」

「何を言ってるんだよ。あんた、そんなことまったく思っていないだろ？」

「……………」

「まあ、おいらは面白ければいいんだけどね。よっと、じゃあ、おいらは戻るとすつかね」

アルゼルはそのまま魔法を発動しどこかへと消えた。部屋に戻ったのだろう。男はそう思うと欄干へと手をつく。しばらくそうしていたが、肩が振るえ出す。しきりに笑いを堪えているようだった。しかし、堪えきれずに笑い声が響き渡る。

「ハハハ、なんとも、近頃の若造は面白くてかなわん。ククク……」

男はそのままずっと、始めからそこにいなかったかのように、霞のごとく消えてしまった。あとには何も残って居なかった。

第三十四話 見つけたもの（後書き）

低クオリティですまぬ。

なかなか文章が出てこないのです。

何かネタがあれば受け付けるので感想にでもよろしく書いてくれるとうれしいです。

作者は相変わらずの紙メンタルなので、批評とかはなるべく厳しくないようお願いします。

お知らせ

お久しぶりです。テイクです。

突然で申し訳ないのですが、私の一存でこの作品を改訂することになりました。

理由は前々から思っていたのですが、私の甘いストーリー構成と設定のせいで、グダグダになっていたこと。せっかくの設定が生かされてなかったこと。稚拙な文章。などです。

更新を楽しみにしてくださっていた読者の皆様は誠に申し訳ありません。

ですが、より良い作品を提供するために今回新しく書き直し改訂することにしました。

基本的にはストーリーやキャラクターは変わりませんが、一部のストーリー展開、設定が大幅に変わる可能性があります。

リアルが落ち着いたらすぐにやる予定です。ですので、それまで過度な期待をせずにお待ちください。

それでは、また今度。真・魔法使いと執行者で会いましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0820m/>

魔法使いと執行者

2011年11月12日01時53分発行